断片

二〇二〇

u_

（磨かれて継ぎ目は…）

磨かれて継ぎ目は見せず、きっと選りすぐられた石は滑り易そうでも急ぎ足も冷たい足の裏にぴたりと止まる、熱い風に乾いてように汚れを落とすのに使われた水が時時うっかり零されるのをどうともならないのか何時も薄っすら湿って微かに何処もが歪なせいで艶艶と艶と艶を酷く危うくでも間違いなく切れ目なく繋げてその重なりそうなら断ち切っては波打つのを、薄過ぎて透けて風に靡く細く尖った翼と翼を擦れ違わせるかに見せ付けて来る狭い道は向きを変える度に打ち抜いたように真っ直ぐ、傾く名札の汚れていたり汚れてなかったりする幾つか飛び飛びに貼られた艶も色も手触りもない低い壁に何も寄せ付けないかに挟まれて風さえ吹き込めないせいか暗くて、だって風は必ず脹れて分厚い頂の迫る山の森を滑り抜けて澄んだ硬い光りを孕んで明るいからね、そこを往き来するなら必ず目に留まる壁の敷石との境目に近い辺りの少し窪ませたその決められた処に必ずぴたりと置かれる箱に、大股な疲れ知らずのような足取りに道も壁も疲れを響かせドシドシと震えたって、そればかりはどっしり重

そうに変わらず何が容れてあるのかな。と足を弛め、窪みの陰で腰を屈めないとかたちは見難いけど上っ面は細かな肌色をチカチカさせてるので色は分かりそうなその箱を見詰めて頭を捻る姿は風より影も無いなら、その前を黙って通る疲れて活き活きしてる目付きの誰にもそれは分かってるか、それとも分かった儘に使い途もなくて忘れられてるとか。こんなのさっさと通り過ぎるに限る、って抑も遠くでも焦り見る顔付きを拵えてそれで押し通そうって通り過ぎてるんだけど、冷たい足さえ動かしっぱなしで冷え切って焼けるようで、って、誰が思うんだっけ。誰も思ってないなら、汚れてないんだけど何処となく汚げな白い布をぐるぐるに巻いて音は漏れない筈の、もう何時から使ってるか誰も知らない程に使い古されたガラガラを確り握り、でも布を解いたらガラガラより見慣れた違うものが出て来そうで足はまた振り返れば何か見付かりそうな望みを抱かせるゴツゴツした巌を裸足で力任せに踏み付けたくなりそうに熱く浮き浮きと速まるにしろ、もう目指す行く先は直ぐ先を曲がった処に、ほら、見えてるよ、内へ反って艶は隠して切れ込んで来る青空の下、青空って何処でだってその眺めごと一息に断ち切りたげなのを、怠そうにも断ち切り返そうと跳ねるかに行き止まりな。低い壁や暗い道など見下すようなその曲がり角の隅隅まで色は抜けてすっかり透き通ってる石の板で塞がれてそうなのは、ずっと先の空の青の闇に何処までも低い壁に挟まれる儘飴みたいに引き延ばされてる黴の色

の染みた曲がらずに行く道を舐めるように曲がって来る、青空の斜め裏の明るく曇った崖を広広と見下ろす刳り貫かれたばかりかに虚ろな高い眺めからの光りを、艶艶と映して透き通ってててで。でもその燻んだ青に苦しげに染まる雲とかも艶艶と何やら雲より糸を吐き損ねて慌ててる脚のこんがらがった蜘蛛みたいにモヤモヤ映り過ぎて仕舞うのに遮られ、曲がった処の行き先のそれを知ってる筈ならまだ知ってる通りの何が見えてるでもなく、そこが、坂の必ず同じ長さで折れ折れするのを飽きる程に上ってやっと辿り着けそうなもうこれより高い処は知らない行く先とは分かるだけで。にしても、高い処なんて足さえ向けばもっと他に幾らでも行けるけどね、だからなのか、透き通ってる曲がり角の手前の、近過ぎて何も映さず薄っぺらに暗いせいで奥を透かし見せてる処が少しでも開いてるならそっと開け切って、硬い殻を被って決まった動きをそれぞれ違えて繰り返してそうな獣の巣のようにざわざわした動きの全てあからさまにゆっくり犇めいて僅かに吹き込む温い風もぬるぬると止めて隙の無いそこへ入って行きたくなって足を止めたくなって、「あぁぁ球。」そうだよ、球だよ、でもそれ声じゃない。ガラガラの頭の形なら確かに球っぽいけど球っぽいなんて他に幾らも探せば探しただけ嘘を重ねて止まらないみたいに出て来るし、例えば？うーん、なのに球っぽいって、球しか浮かばないな、頭はすらすら何でも遣り過ごせてるかに止まってて空っぽな球みたいかも、いや球の他に球っぽ

いなんて初めっから有るもんか、ガラガラは知らない、ガラガラかどうかだって怪しいんだから形を思い浮かべたくもならなくて。振ってみたって籠もった音も出て来そうにないよ、振らないけど。どうして？振ってみたら良いじゃない、いや、坂を上りながら疲れて腕を振らなくちゃ進めなくなって疾っくに。思い切り振ってたけど、って思えて仕舞うのは何、そんな事した覚えも無いのに。少しでも揺れないよう腰はふらふら戯けるようでも固めたみたいに腕だけは振らず確り抱えて確り握ってたさ、今日も空には青空の居座ってるせいで心はまたら青より深く腐らされるかなって黙って。でもそれって、もし音がガラガラに聞こえたら、そこで要らないってそれを捨てて仕舞いたくなりそうで、ガラガラじゃなく聞こえたら、ガラガラと取り替えに戻らなくちゃいけなくなるのが苛苛させられ、恐ろしいばかりに、で。何時もなら楽しく戻れるけどそんなの抱えては戻りたくない戻る処は一つしか無く、そこなら青空も見上げる度に高さは計り知れずに高さって何だっけって分からなくなるしかなく高過ぎて、そこばかりが切り立つように周りよりどっしり冷え冷えと見上げるまでもなく高く迷いようもなく。坂のどの辺りに差し掛かって振り返ろうと、眺めは強い日射しに風さえ止めて腐らせるかにどんよりなばかりを沸き返らせてようと、思い立てばそこから真っ直ぐ踵を返し、崖道は直に細く途絶えるなら身を糸を引くように滑らせ、日日削られて行く森は何処からか脇に逸れて楽楽と見渡せて、

幾らクネクネして上り下りを繰り返して陽と陰とがこっちを惑わすみたいに嵌め合ってても、その道は決まってるようで決まってないのは道なんて風任せ足任せで、戻る処から来る光りより速いかに頼もしい潮の限り限りまで薄められて却って臭みを増す香りが、幾ら山や麓の川から降りる風が荒れようと吹き払われずに、ただ真っ直ぐに一つ切りって、戻る処よりまた暫く先の行き止まりの、海がどんなに荒れても何時も眠って浮かんでるように動かない空の青を染み込ませてまだ染み込ませ足らないかに青に染まれない岬からの向かい風を受ける身には易易と染み通って。それともそんな香りは少しも潮臭くない儘に始めから、女は隠しての女の女は隠してる女の移り香みたいに身に染みてるとか。

あぁぁ良いね、それ。の、良いね、と、「あぁぁ球。」って、どう繋がるんだっけ、必ず繋がる筈だよ。なんてムキにならなくても、繋がらないなら繋がらないだけの事で。だって繋がらないって、繋がる事と必ず繋がってようからね、きっと数え切れない程の繋がらなくての繋がりの束になって、なので繋がらなくも繋がらないのも忘れてられて。なので、良いね、なんて、悪いね、でも良くて、その良いも少しも良くない儘に、でもまだガラガラとも、じゃないとも音は聞こえないんだから、真っ直ぐ前だけを向いて陽と陰の嵌め合う赤でなくても赤でしかない赤や赤なのに緑でしかない緑に揺れる隙間に一一赤なら赤、緑なら緑に相応しいそこへ突き刺さって行く尖った色のスースーとしか響かない

口笛でも白黒白黒と吹き込みたくなりながら足を運ぶ程に、まだ戻らなくても良くて。いや違うよね、坂を上るより前に、間違えてガラガラそっくりに見せ掛けたかったらしいとは分かる何に使うんだろう片端に幾つも隙なく固く重ねて大きくした丸い結び目ばかり目立つ短く切られた、処処焼け焦げた跡を剥がした痕も有りそうな、苛立つようにその苛立ちを周りにも押し付けたいかに必ず斜めに傾く、中身は飛びっ切り重い石だけで出来た石かよって硬くて重くて太い紐を、巻き難いけど何とか白い布に巻いたのを思い出して探しても見当たらないなら忘れたと分かって取り替えに戻ってたんで、でも慌ててて、ガラガラと違うもっと軽くてただ丸そうなものを白い布に巻いて持って来てるかも知れないって、それですんなりとは、その曲がり角を曲がれないのかも。でもそれって、もし態と、うっかり、そのうっかりに笑いを堪えるかに、さも手っ取り早く、違うものを手に取ってたならどうかな。片端に大きな結び目の有る重いばかりの石みたいに重い紐なんて、取り替えるも何も、直ぐ先の同じ行き先に辿り着いたこの何日か前に、そこにその儘に置き忘れて来てるとか、とか言えそうなのは、な訳ないけど。ざわざわしてる中の誰もこっちのそんな嘘の思い込み振りを知ってて、こっちだけそれを知らないみたいに教えて呉れそうで。こっちが声を掛ければね、でも声を掛けようにも、忙しそうにあっちへそっちへ殻を被ったような丸いのを隠そうとぴんと伸ばした背を獣の毛みたいに細か

く震わせて向けられたのでは、その姿の動き回ってねっとりした音さえ滲みそうなざわざわにそのねっとりを練り直したように冷たい重みで耳を押し潰されそうで、もう冷たい先の先が逃げ切れずに熱いみたいにキーンとし始めた耳の痛みは、何だろうと白い布に巻いたものへもキーンがキンキン聞こえるかに芯まで伝わって、同じ痛みに布に巻かれてさえ歪みそうなのを何とかまた確り握り直して真っ直ぐにしようか、いっそ手放せば痛みは伝わらないかな、って思ったにしろ何を思ったか、直ぐ先なのにその曲がり角は見切って直ぐ側の透き通ってるのも透き通ってる処を、何も握ってない陽を浴び過ぎて煤けたかの片手を投げ棄てるかにぴんと突っ込んで開け切ってそのざわざわの中へ踏み込む足さえ溶けたに違いなくそっと入って、そしたらざわざわなんて隙だらけの穴だらけで拙いかも知れなくてもつい嬉しくなって穴と穴の繋ぎ目繋ぎ目へ独りで踊るように身をカクカクと拗らせ、その先の、また少し開いてるそっちのだらしなさそうに透き通ってる処を、汚れた水臭い頭が重くてそおっとしか身を傾けられない獣を真似て横向きにすれすれで抜けてその外へ出て、そしたら、どっちの手にも何も握ってなくて。でも白い布に巻いたものをざわざわの何処かへ置き忘れて困るでもなく、だって何にしろ白い布に巻くってそのざわざわらにしたらお手の物で、なら初めっから何も握ってなんてなかったんだって、白い布に巻かれたものは疾っくに布を解かれ、ざわざわの中に何時でも使える

ように、それが必ず置かれる処に決められた誰かの汚れ一つない手袋を嵌めた手で置かれてそうで、振り返ってもざわざわの中に紛れて見付けられないのは、ま、それはそうだろうなって。でもそれで少しもやれやれって訳じゃないのは、白い布を巻いたものと違って、何なのか隠して置かなくちゃいけない、そっとしとけば黙ってるけど撫でる処を撫でれば必ず媚びるような音を鳴らす、その決まった音なら幾らでも内に蓄えてるに違いない黒白なものを懐に収めて隠しててて、でもそうして置けば良いってんじゃなく使わなくちゃいけない時には取り出して使いたいのそんな時って殆ど何時もで、なので隙さえ見付ければ何食わぬ顔で使ってては居て。その形とか重さを態と忘れてるのは、片手で使えるとさえ分かってれば忘れてなくちゃそんなの直ぐに隠してるのを見抜かれそうで、見抜かれたらそれっ切りお仕舞いって、そうあちこち石の色にだけ塗られた石の板に書かれてはっきり知らされてるんで、思う通りの隙なんて中中遣って来ずに、でもそれはどうにもならないって懐に隠す時から半ば諦めてるけど、で殆ど何時でも使いたいのも半ば忘れてられれば、時を逃しても取り返しの付かないなりに何とか惜しいのを呑み込めてるかな、って思い込みたいけど、幾つかの呑み込んで再び帰って来ない、あれは、って時を逃したのは、やっぱり尾を引いて仕舞うかな。で、ざわざわを抜けた外は何処かって、さっき直ぐ先を曲がる処に見えてたその曲がった少し先の辺りな筈だけど、つまり透き通った

曲がり角の手前から少しだけ近道したような事だけど、さっさと曲がり角を曲がるより時を費やしてそうで、でもそれは曲がり角をさっさと曲がれてたらの話しで、行く先がその直ぐ先だって、見付けた曲がり角を忘れるか忘れる序でに見失うかして、うっかり瞬きする間にも真っ直ぐ行って仕舞ってたら、もう道に迷って果たしてここへ戻れたかなって。迷った儘その日はそれで諦めた覚えなら擽ったいばかりに幾らでも湧くようで、なんて少し心細くなって振り返ると、ほらやっぱりな、って、見付けた曲がり角は見る向きはあっちからこっちでも見失われてはいないにしても、すっかりぼやけ、どっちをどっちへ曲がるの為の角なのか凝らす程に目は凝らす儘にあちこちするかに迷い、低い筈がそこだけでもなさそうに高い壁を、角角しくきっちり切り取った、壁を造るより前から決められてた穴の向こうにちらりと見える強い陽を浴びて熱く焼けるようなな丸っこい海の、何時も寒そうな空から切り離された形の色に目が留まると、穴の中は、穴の中の奥行きも幅もきっちり角角しく刳り貫かれてるけど、その海からの汚げな色に色色消されたみたいにあれこれ角角しく収まるしか許されないかに置かれてるにしても空っぽで、って、何が空っぽかって、足の裏でなら知れるかなって、うっかり踏み込みそうになって、いや抑も穴の中って穴が穴の息を吸って穴なりに息付くだけで穴と開いてる処だよなって、そんなの分かってるから踏み止まって鳥みたいに首だけ突っ込み、懐に隠してるもう一つ

のもの、翼を生やして跪く獣でだけは無い目を瞑る幼い姿が、当たり前に軽い石で出来てるか出来てそうで石より柔らかそうで、どうだっけって確かめたくて片手で探っても何も掴めず、その彷徨う指先に目が生えるみたいに、目は穴の空っぽなのに戸惑ってウロウロするばかりで、求める幼い姿を描き出そうと指と指は絡み合っても、互いの指先を擦り合わせられずに空っぽを歪めるだけで、歪んだりしない穴の中の空っぽに、歪むのは目で、って、もうその目は指先の目でしかなく、それは、穴の中の何を撫で摩って弄んでるかって、誰が知りたいのかなそんな事、を見詰めるのも指先の目かって、そんなそれを見詰めるのは、穴の中にずっと居てこっちを見詰める目みたいで。その目みたいは、一つじゃないので三つで、三つって、四つを探して一つ足らなくて一つじゃなく三つで、その一つ足らないその目みたいな三つは、穴の中を定まらずにウロウロしてて、でもそのウロウロって足らない一つを見付けられない指先の目がそんなで。それとも足らない一つにしたら、見付けて欲しいのはその一つとで二つなんだろう、かな、って、ふとそんな、合わされば二つのもう一つの姿が古びてるのが引け目かに緊く口を結んで独り何時も通り角角しい程に影は薄く初めから分厚い斜めへと掠めて行くけど、きっと三つの陰にでも紛れて消えたくて消えて、でも足らない一つは足らない儘なんだから何ともならずに。どっちも姿が無いからって二つを並べられないのは、足らない一つは必ず見付けら

れるに違いなく、もう一つは必ず見付けられはしないからで、でもそれって、足らない一つに見付けて欲しいって思われてれば、見付けられない姿の無いのは何処へも無くならないんだよな。って分かると、その穴へ首を突っ込んでたのは、鳥みたいならきっと鳥で、穴ごと、海に危うく乗っ掛ってだけの陽の熱さに反り返って今にもぐらつきそうな酷く静かなので見通しの利かない空へ、形だけでも形を脱ぎ捨てるかに飛び去ったとかね。の、とかね、って、どの辺りが？って振り返ったのか後退ったのか、そのどっちもを誰も居なかった辺りにまぜこぜにした身の熟しを自ら見て取って、ぐるり一巡り、って、独りでに何が。その曲がり角の、入れ替わってそっちにしたらこっちの艶艶透き通った中に映ってる姿だよね嘘だけど、その姿ばかりを透き通るばかりに見詰めてられる嘘とも言い訳出来ず、そんなの耐えられなくて耐えられない事なんて直ぐに溶けて消えるに決まってるみたいに目を背け。で、ぐるり一巡りが、ぐるり一巡りまでも忘れられそうな程に利いて、変わらない行く先を定め直して足は、片足の折れて体が傾くだけのせいで飛べないばかりか水さえ飲めそうにない鳥みたいに危うく、その危うさこそ待ち望んでたかにぬるりと重い流れに乗って直ぐに沈むのかなって押されるように前へ進めて、斜めに角角しくきっちり切り取られた穴、さっきの穴は真っ直ぐ向いてたんで鳥は飛び去り何やらぐるり一巡りですぅーと遠ざかるしかなかったんだね、で、こっちの穴は、斜めなの

で、斜めの穴としかも分からず、そんなの斜めに塞がれてそうで穴でも無さそうに、同じすぅーとでも斜めにふわりと近付いて斜めにそっと先ずは片頬を寄せてそれから離れて後ろから斜めを直すかに中を覗くと、真っ直ぐな穴の中に満ち満ちてる全てが斜めなこっちを待ってた訳でもないのに直ぐ様そのすっかり消された、でもすっかり消されたとは匂うので消されてもなさそうな匂いでかに抱き寄せるかで、四つじゃないので三つ、一つ足らなくて、でも足らない一つなんて知らない、だって三つの中の一つが、そのどれとも違う一つで、残る二つは無いも同じで、なら無くて、なら一つ切りで、それ一つは独りそれ一つに、それ一つ切りの名でさえ優しく撫でるように呼べそうに、そんなの易し過ぎて幾ら繰り返し心を込めてる積もりで呼んでも虚ろに、なのでまだ何の障りも無く呼べてなさそうに。そうなら穴だって穴じゃなく、だって四つも三つも無いなら穴は要らないし。穴は要らないって何処へだって飛び跳ねて行けそうで楽しいな、って、絡み合う指先は踊るようで、翼を生やして跪く獣でだけは無い目を瞑る幼い姿もそれに絡んで、それは直ぐに懐から摘まみ出されると間違いなく軽い石で出来てるか出来てそうで石より柔らかそうで、でももっと違うぴたりとした言い方が出来そうで、あぁ「あぁぁ、むにゃむにゃ…」そうさ、むにゃむにゃで止めて置かないとね、まだ。いや違う、むにゃむにゃな訳ないさ、疾っくにすっかり決まった通り呼べば呼べるけど、誰に呼ばれるか、それ

がややふやでもなくて、却ってここでは呼ばれちゃいけなくて。でも石より柔らかそうなのは確かなら、それってむにゃむにゃだよね、って事にして置けそうで、だなんて少しも考えてないのは、もうずっと、その幼い瞑る目をそっと撫でてる指先はズキズキ痛んで、それってきっと、その瞑る目が指先に乗り移りたいんだ、でもどうなんだろうそんなの、って、そればかり考えてるからで、むにゃむにゃ…で止まるのは、考えも逸れてしか進まないからに違いなく、に比べて、それ一つの独りそれ一つは、それ一つに決まってるなら、それをそれ一つって呼ぶまでもなく、一つ切りの名も呼ばれてなさそうなら、それはただそれで、そのそれと見付けられたその身がそこに居て呉れるなら間違いなく行き先なんて初めから何処にも無くて、ずっとここに居る儘だったみたいにこっちは、それを、行き先なんて初めから何処にも無い処に当たり前に辿り着けたかに迎え入れて、そうして迎え入れられたなら、それなその身もこっちも、黙るよりもっと黙りたいかにすっかり嬉しく空っぽで、「その空っぽに目を遣る縁にでも私が見付かるって、私の姿を見て取りそうになったでしょ！却って空っぽでなら、そこに私が待ってて呉れそうで、って。」さあ、どうかな、あぁ「あぁぁ球（むにゃむにゃ）…」って言いたい。迎え入れてようと、それなその身とこっちの身を向き合いたい程に向き合わせたくないかに。え、球むにゃむにゃ？って、じゃ球って、球の形の球と決まった何かじゃなしに、球に因

んだ何かとか、球で始まる球を象ったとかの何かの言い方とか、それとも偶偶球って言い方が紛れ込んだ球とは似ても似つかない何かを指し示してるとか。

「え、指し示してる？何がどう逆立ちしたって、何もそんな事は出来ませんよ。何時からだって何処でだって。見付かってない私を見付けて押さえ付けたって。」

さあ、どうかなもこうかなも、こっちとしては、迎え入れたそれなその身を、って、何を？そうか、確かに指し示せてないな。いや、でも行く先の初めから何処にも無かったのは指し示せてないかな、ってその答えに縋りたいかに振り返ったのは拙かったかな、だってそこで、って何処で？も、穴の口が穴の口なり儘に口を開けてる処で、穴の口が息をしてるものね、何の為かって、それなその身をこっちが迎え入れたらその口はもう要らないなって自ら穴の口を塞ぐ為で、そうして穴の口はこれ見よがしにもう取り返しは付かないぞって塞がれて行って、で却って、こっちのここはすっかり、固い卵に成って拉げた硬い翼でも生やして飛べない有様を身に染み込ませたい程に、閉ざされた穴で。いや、閉ざされた穴なんて穴じゃないよね、穴に似せようさえなく、だって閉ざされた中で見付かるのは閉じてるものばかりで、遣るとしたら内から蹴破るとかだけど、そうして開けた穴の外がまた穴の外の内へ閉ざされてたんじゃ外へ出るも儘ならず、出られたってその外が穴と係わりを断っただけのまた、そんな内でしかなく。足。片足。え、誰の足？爪先と踵の間の何処かでボキッと折れて

るのはその音は忘れないので分かり切ってるけど、だって塞がれる穴の口に巻き込まれて捩切られ、でも何で片足なのかな。片足だけ捩切られたんじゃなく、初めから片足だけが、塞がれ掛ける穴の口に旨そうな骨と肉みたいにひょいと可愛らしげに差し出されたのは、それを見ちゃった目に言わせれば紛れもなくて。の目だよ、見付けたぞ、って、目が球の…、目の球って事か、いや違、違わないかも知れないけど、それは目程に球って事らしいんで、だって他には目と球って結び付けようがない、それって目じゃないってなら何を幾ら見てようと球に呑まれて影もないみたいに目じゃなく、だって目なんて無くても見えてるものが見付かるならその見える通りが見えてようからね、それ自らを見付けたる自らから逃れられないかに。でも球ではあるよね呑んだ切りに、見える見えないに係わりなく、言うだけならね。違うの？って尋ねられたからには、違うの？の先の、「却って空っぽでなら、そこに私が待ってて呉れそうで」なんて言い出す、その自らを見付かってない私って言い張る、息をするのに掛かり切りで黙り込む姿は、どれ程そこに隠されようと穴に似せようさえなくも、つまり外なんて知った事じゃない穴で。穴の有る処に穴で有る儘に穴な、って狙い澄ますように言いたくなるだけで、その穴の外の何処にも他に何の穴も無いみたいで。塞がれたばかりの穴の口だって穴の口じゃなかったんで。あの塞がれたのは斜めの切れ込み、に見えるだけなら、ほらそっちの、外の向こうまで

狭く塞がれて見通せるまたそっちの奥からの斜めに空の青が酷く映るせいで。でも、あぁ分かったよ、って心で言うだけで、穴なんて跡形も無く、だって、そのあぁ分かったよ、が穴だもんね。もうちょっと細かく言うと、その分かったよと、それを優しくそうよね分かったよねとその分かったよと同じ処から応えて呉れるの二つ合わさって穴で、でもそうなると跡形無いの何が跡形無いか、また穴かよ、って怪しくなるのは、それはそうだろうなって。そうして、そのそうだろうなにも、空の青が酷く映れば、そっちから降りて来るんでなくちゃ声じゃない声のそっちから降りて来るのを少しも待たずに済みながら待つしかなく。そんなふわりと待つ身のこっちが、目程に球って、じゃなくてもそうは呼ばれてたらしいかなって、どうやらはっきり思い出せて嘘かなとも、それを待つ程に、嘘かなごと身に染み込ませ。で、すっかりこっちは、目程に球のそれに安らうかの身なんだけど取り敢えずは、で居続けながら来る声を待つには、目程に球は忘れないとね、だってそれって遠く隔たった時の始まりの呼び名に違いなく、なら、その時の始まりより前の胎の何処かに孕まれてなくちゃ、こっちはこっちに産まれようもなく、なので呼び名通りの目程に球にしろ、それに拘る儘では時の始まりも始まる切りなだけで先は無いんで。にしろ、目程に球を忘れるって何をどうするんだっけ。知らない。ならその知らないに知らない事なんて任せ、その知らないを、そう知らないに知らせようと、知らず、知

らないと知らせようとの隙を縫うみたいに口笛が時の始まりからかも知れなさ
そうに鳴らされてて、尖った色のスースーとしか響かないにしろ、白黒のぼや
けにぼやけて白黒ともなく、延びても延び切らず。でもそうでなくちゃね、そ
れって白黒へは戻れない違う音の姿で、その姿がまたぼやけにぼやけると、そ
れは、海の終わりが姿も居処も変え、毛をすっかり剃られた裸の獣の白とも黒
とも知れない二つの膚の色の混じって月の色かも知れない風の塊の、粘粘した
月影の肉の一欠片とも見せ掛けて空に逆さにぶら下がるかに空の端から端まで
を激しく往き来して転がり続け、何処でも無い処に浮かびたげな光りの暈を輝
き出させるその中へと響こうとしてそうで、でもそんな光りの暈なんて何処に
も見えなくて、の、何処にもからして見えなくて、見ようとすれば白黒へ戻れ
ずに月の色を獣の膚の色の風の塊に探そうと海の終わりと空の始まりの間の何
処かをウロウロして安らう儘に居たそうな白と黒の互いの裂け目を舐め合うよ
うな嵌め合わせが、何処となく濡れるようなら微かな輝きを、ならさも戻れる
かの白黒に滲ませるのでは、と望みでも抱くのがやっとで。そんなの、望みな
筈ないさ、あぁ分かってたよ、のあぁ分かってたよ、が穴に成り掛けても、そ
れを口笛のスースーと尖る儘に色も無く響きながら白黒へは戻れない違う音の
姿が押し止め。そりゃ確かに、あぁ分かってたよ、の穴へ転げ落ちたら、口笛
はそれっ切りだろうからね。だって、そのあぁ分かってたよ、が口笛だもんね。

もうちょっと細かく言うと、その分かってたよと、それを優しくそうよね分かってたよねと応えて呉れるの二つ合わさって口笛で、いや違う、そうよね分かってたよねと応えて貰えないんで口笛で、つまり口笛には何かが、って言うか口笛の他の全てがかな、足らないんだけど、そうかそれで片足は穴に捩切られたんだ。なんて事に嘘でもならないのは、それを見てた草陰の下に落ちる月影の陰に隠れて影の姿の目が、それをぼやけさせて仕舞うからに違いなく、だって、「あぁぁ球…」って言いたい、むにゃむにゃ無しに、そしたらその球は必ず何か応えて呉れるのに、それが出来ずに、むにゃむにゃに付き纏われるのが嫌で、でもむにゃむにゃって抑も捩切られた片足の静かな恨みの匂いを途切れさせないささくれた言い様だよね、何でささくれるかって、片足はせめて片足だけは先の見えない伸びるばかりの道へ逃げたかったか、でも穴に立ち塞がれ、それとも、せめて片足だけは穴へ逃げ込みたかったか、ならきっと逃げ込めてて、どっちにしろ、それを、まだ何も始まってないのに急ぎ過ぎだねって、じっくり腰を据えるかに見咎める目なら、ずっとここに居て呉れる儘で行き先なんて初めから何処にも無くした、迎え入れてこっちもすっかり空っぽなそれなその身の目からな、それとも「却って空っぽでなら、そこに私が待ってて呉れそうで」なんて言い出す、息をするのに掛かり切りで黙り込む姿のその目、なんて先走った事は言わないけど、でもどうかな、それともそれとはまた違う、例

えば、声のそっちから降りて来るのをふわりと待つ、目程に球とは呼ばれてたかなの嘘かなごと染み込ませた身のこっちの、目程に球ならそう有る儘にそこに有るしか無い狭い処の、その狭さに甘えるみたいに隠れて、それでそんな目とか、うーん、どうとも決められないかな。なら口笛に何かが足らないのも怪しくなって、でもその怪しい程に口笛は響きの幅を拡げ、揺らめいて光り輝くようで、まるで、「あぁぁ球。」から聞こえて来るみたいに。あぁぁその、みたいに、は、とても良いね、こんなの初めてみたいにうっとりするよ。そうして、見える訳ないとは分かってても球の姿と重なって口笛が光り輝いてるなんて事になったら、何処にも光りの暈は見えなくたって、口笛の響き渡る処、月影を風の塊かと孕んで延び拡がる光りの暈の幻が尾を引くみたいにさらさらと楽しげに付いて来るとか。でもまだ何も起こってないね、って、翼を生やして跪く獣でだけは無い幼い姿の瞑る目に窘められそうで、の、その姿は小さくなって、直ぐそこら辺りに隠れ掛け、やっと隠れてない側は、外の向こうまで狭く塞がれて見通せるまたそっちの奥からの空の青に、空より青く酷く染まって、どす黒さを白ませせてさえ奥深げに輝いて、いや、その瞑る目の直ぐ前にこっちのズキズキする人差し指を近付ければ、全くその輝きは、どれ程青い空を突き抜けて行く奥行きより間違いなく奥深く、だって、その目はもう瞑る儘に瞑ってなけんてなく、その目に触れようかの指先にも目が生えて目と目は互いの目の奥を

覗き込めば、その互いを映し合ってそれのまた覗き込まれる奥深さなんて、きっと深さの奥底さえ黒白も無く突き抜けるしかなさそうで。でも隠されてる側の片目は静かに瞑る儘なので幼い姿は少しも傾かず、でもそのせいで他が全て傾いて仕舞わないかな、って心に懸かるその心が直しようもなく真っ先に傾ければ、それでやっぱり他の全てが傾いて、で、その傾きに、ずっとここに居て呉れるそれなその姿が、流れに逆らう大きな重い石の尖って斜めにゴツゴツと平たい頭みたいに荒っぽく洗い出されそれは先ず、空の青に幾ら照らされてもその青は少しも映さない、左を向いた白赤い顔の右の片側で、左の片側は青に染まる傾きに埋もれ、まさか溶けて消えてないかと耳を背けたくなる程に、そこからかさこそとも何の音も聞こえて来ないけど、でもそれで、顔の白赤い側は、その膚の毛穴一つ一つからさえ微かにも白赤い音が絶えず流れ出てるよね、顔色に溶けて膚に塗り込まれてるのが見て取れるので、耳を背けたい心はそれなりに和らげられるけど、和らげられる程に傾きに埋もれる顔の片側の溶けて消えてる見えない形が、迫って来るようで、そんなあなたの、いや違う違う、何でそれがあなたな筈が有るもんか、「なんて言いながら、あなたって呼びたいんでしょ。でもね、あなたがあなたと呼べるものなんて有りませんよ。だってあなたが何かをあなたって呼べば何だってあなたなんですから。あなたでさえあなたがあなたって呼べばそれはあなたのあなた、つまりあなたじゃなた

いあなたに成って仕舞いますもんね。何なら試しにあなたをあなたって呼んでご覧になっては。そんな事したってそんな呼び声はさらりと消えて、何も起こりませんけどね。だって、そんな呼び声のさらりと消えた事さえ消されて、全ての事が至る処で起こって仕舞いますもんね。だって全ての事なんて、あなたにしてみたら、全くあなたでしかなくて。抑もこの私の声ってあなたの声ですもんね。アハハ」「ねぇ、そんな声には耳を傾けないでね。」あぁ、きっと待ってた声、降りて来る。でも、そのそんな声になんて耳を傾けたりしてないけどね。「なんて言いながら、耳を傾けてるじゃない。あなたは私を見付けて押さえ付けて私をしゃぶり尽くして骨まで平らげて、あなたに声を聞かせるこの私に成り替わりたいのね。なのであなたのこの私の声から逃れられないのよね。」さあ、どうかなもこうかなも、その語り掛けるようで息をするのに掛かり切りで黙り込む姿を消せないなら、だって何の姿だって消せないからね、その黙り込む儘に言いたい事は言わせて置くしかなくて。「アハハ、そう黙り込む儘の私と向き合うのって、それって全く、和らぐ心ごと耳を傾ける事でしかないでしょ。」「ねぇ、そんな声には耳を傾けないでね。」あぁ、また、間違いなく待ってた声、でも、だったらきっと、そんな事は言ってない、こっちの耳がそう聞いて仕舞うだけで。なら、こんな耳なんて引き千切りたいかな。「容易い事だわ、何なら私が代わりに私の耳を引き千切ってあげましょうか、そしたらそ

れがあなたの耳で。」さあ、どうかなもこうかなも、そんなのきっと疾っくに遣ってたんじゃないか。「あぁぁ球。」そうだよ、そのあぁぁ球。を声に聞きたかったんで、で聞けたのかな、でも、なので、あぁぁ球じゃないんだ、そんな事は言ってない、こっちの疾っくに引き千切られたか引き千切られるとかどうだって構わない耳がそう聞いて仕舞うだけで。そうか見付けたぞ、あの計ったようにどれも決まり切った形の坂やらあのつるりと内向きな崖やらあの潮の香りが拓いたような道やらを、汚れてないんだけど何処となく汚げな白い布をぐるぐるに巻いて音は漏れない筈のあのガラガラか何かを確り握って往き来してるのは、そっちから降りて来る声をその声の通りに聞き取れる耳を探してたんで、それで、目程に球とは呼ばれてたかなの嘘かなごと、それをこっちは身に染み込ませて、目程に球、目程に球、あぁぁ目程に球、嘘かなともこう呼ばれてたんで、それで、あぁぁ球に違いないんだけど、きっとそうなんだけど違うかな、違ったって構わない程に、目程に球からあぁぁ球へ繋がらないでは、こっちの耳はそっちへは届かないに、違ったって構わない程に違いなくて。「って言いながら分かってるでしょ、そんな言いたい事を、ただすらすら楽しく垂れ流してるだけだって。忘れなさいよ、あぁぁ球なんて、そしたら何かもっと増しな事にあなたの耳でも目でも向けられるかもよ。私がどうにかしてあげましょうか。」さあ、どうかなもこうかなも、いや、あぁぁ球は疾っくに忘れて

て、なのでどうにも、あぁぁ球、って成って仕舞うにしろ、忘れたのが間違いって訳でもなく、いや間違いだったんで「あぁぁ球。」へまでは、何とか辿り着けてるんで、って、何処から何処へ？「アハハ、何処から何処へ？って、教えてあげますよ一言で。だって何処からも何処までへも、それが私の声だもの。この声の私だけが、あなたのあなたじゃなくて、あなたの私で。私の声のあなたの私はもう穴でさえ無い処へ足を取られ縺れさせ、その何処から何処へ？って助けを求める足掻きでしかなく、でも何の助けも来ないのでガラガラをガラガラとも誰にもあなたにさえもはっきりとは分からずに確り握って届けたいのね、届けなくちゃならない寒いだけな火を匂わし続ける真っ白に動かない処へ。他に何も望めないあなたなので私は声をあなたへ届けられ、でもそれは何かの障りどころか、それであなたは風に飛ばされもせず、だって頂の迫る山の森の中って凄い風が常に吹き抜けてて、森には下草も獣の姿も石ころ一つ見当たらず、剥き出しの土だけは何処吹く風って酷く柔らかそうでどんな深い空より濃く青ざめ煌めいて、ぬるぬるした艶が蠢くように盛り上がれば赤っぽくも赤っぽくしか見えず、でも少しも赤くはなく、きっと肉の名に近い色の名を自ら探してそうで、それで、でもそれを見付けられずに、ぬるぬるしてなくちゃいけないみたいで。そのぬるぬるにすっかり湿らされた風は森を抜ければ、月の光りから搾り取ったような草の色の雫を陽の光りに冷やされて滴らせ、その細い

流れは崖の下の温い泉に混ざり込みたそうで、岩肌に浸み込み掛けながら。こんなの、私だけが知ってる、って事は、あなただけが嫌でも知ってるんだけど、いや、目程に球とは呼ばれてたかなの嘘かなごと染み込ませた身をまるで違うものにしなくちゃ居られない程に嫌でなくちゃ、そうとは知れないんだけど、なので知らん振りするしかなく知らん振りしてれば森の風は受けずに済むって分かってて。でも知らん振りしてるだけで、その風は常に、こっちの直ぐ側を鋼の呟くような音を震わせて掠めてるって思い込んでも居なくちゃいけなくて。なので何処から何処までも、そんな風より速く、でも優しく、私の声はあなたの耳にゆらゆらと流れ込むしかなく、そこのそれなその身が、流れに逆らう大きな重い石の尖って斜めにゴツゴツと平たい頭みたいな姿に洗い出されたのも、間違いなくあなたの耳の中で。なのでその顔の片側が白赤くともう片側が空の青に染まるとかも、独りそれなその身の顔のようでも、そのこっちのあなたの身の右と左に開いた耳の事に違いなくて。でもきっとあなたはそれを認めないわよね、耳が穴に成って仕舞いますもんね、何の穴も無いんでなくちゃ、ここだって何処でも無くなるんで。構いませんよ、耳が、穴に成って開いてなくたって。寧ろ穴じゃ私も困りますよ、誰かの耳がその穴へ忍び込めば私の声は何処かへ筒抜けで、それでは、私の声は何処からも何処までへも、では居られなくなって。うっかり見ず知らずの声など紛れ込んで耳を拐かすかも知れなら

いし。」「そんな…、ねぇ、ねぇ、そんな声には耳を傾けないで、声でなんかなくても始めの、あぁぁ球。に戻れましょうね、そうしましょうよ。あなたはまだ、汚れてないんだけど何処となく汚げな白い布を巻いたガラガラを確り握ってるんですよ。きっと、あぁぁ球。とガラガラが必ず結び付いてなくちゃいけないけどそう見えなくて、それをどうして良いか分からず何に行き惑ってるかはっきりせず立ち止まるしかないのを楽しく過ごせないばかりに怖いものなんて無いって分かりながら怖がってるだけなんですよ。始めのあぁぁ球。よりガラガラの始めが先で、ガラガラは青空の斜め裏の明るく曇った崖の崩れて崖に成るより古く、きっと、そこがまだふっくらふわりと幼げな山の森だった頃に、そこで使い慣らされてたガラガラだけが、きっと或る日を境に濁った音しか鳴らさなくなったのに誰かがその前触れを聞き取ったかで、崖が崩れるのを見越して持ち去られ、手から手を伝って、あぁぁ球。で始まった処へまで届けられ、あぁぁ球。にその音を聞かせてた覚えは有ってもその音を聞けなくて、きっとそんな事が怖がりに輪を掛けてましょうか。手から手へ受け渡されてる内に、昼は白い布に巻かれても夜は裸のガラガラの月の光りに磨かれた初め尖って直ぐに円くて穴を突き通して直ぐにその穴を埋め穴ごと埋まって月を逆さに向くように自らを歪めて丸く脹らむを繰り返す音は、何の音だって犇めき渡る闇夜にだって道をはっきり響いて、その響きに、あぁぁ球。で始まった処へま

で闇を退ける明るみを、その明るみに籠められてるこの先ずっと続く楽しみに導かれて来たに違いなく。ゆっくり円く腰を回して、何も聞こえないならその聞こえない音の狭苦しさを喜んで真似るかに、虚ろは自ずと回り続けてるかに、どっちを向いても風の音なんて聞こえて来ませんから振り返ってご覧なさいよ、その響きの微かに明るい一筋が岬の暗み臭く重み爆ぜて汚げな奥まで延びて行くでしょうよ。その暗い奥に、でも岬を越えて潮に怯えるかに海には落ちない、海なんて無くす位に汚げに重い処に、あぁぁ球。と違う姿が、二つか三つ、って言っても、二つか三つのどっちかじゃなく、数えようでどちらかな二つか三つで、なので、二つから三つか、三つから二つのどっちか、って事だけどそのどっちもな姿が、海だけど海を無くせば岬が風を防いで、暗い程に暗さの明るみが深皿の底に汚げでも少しも汚れてなく溜まるようにそこにどっちをも向かず重そうで柔らかい光りが満ちれば、二つは、二つな程に、どう数えようと間違いなく三つな姿に安らって、二つに挟まれたその確かに増えた一つは、でもまだ一つなりにあやふやで、胸の奥から翼を生やしてるみたいに一息一息に空へ突き刺さるようなぱーと平たく拡がる痛みを覚えて辛そうで、その何故か分からないもう二つは、それで離れられない二つに翼を折り重ねるかに固く纏まって、その一つの弱い息の中に、風を孕んで高みを目指そうとする翼の形の匂いだけは嗅ぎ取るなら、その翼の形を羽搏かせて却って消し去る為に、その一

つに向かって、あぁぁ球。って呼び掛けそうになって。それで声を合わせたいかに二つは、愈愈悲しい程に始めから悲しかったと思い知って離れられず、でも離れられないって離れるしかないんですよね、だって始めから離れてたら離れるなんて作り事でしかなく、そうして離れて離れ離れでも、そのあやふやな一つにはずっと二つは二つで、でもその内の一つ離れて行った一つはそっちで、残ったもう一つは、そのあやふやな一つとで、こっちに、また違う二つなりにあやふやな二つで。でもそれでそのあやふやな一つともう一つは、それぞれに、二つなりにあやふやな程にあやふやさから隔たって、そのそれぞれの隔たりを生え揃う双並びの翼みたいに自ずから嵌め合わせて確かな二つで。いや違、違わないかも知れませんけど、その二つの確かさって、そう、やっぱり違うんですよ、翼も何も、そんなの生え揃う筈なんて無いんですよ、それを確かなんて言えば、もう直ぐにも二つごと失われそうで、だって失われるものって必ずその卑しい儘に確かで、汚げに時が稼がれてるだけで、その稼がれようも時だけが知ってそうで。あぁぁ、なので山の頂は迫りに迫り、だって山なんて始めは空の向こうの空の匂いも届かない向こうとも知れないその先だったんで、その長い時を掛けて迫って来た遥かな道筋だってはっきり辿れますよ、見下し見晴るかす程に危うく角角しく。でもまだ時は潰えてなくて、そりゃそうですよね、見下ろせる限りを見晴るかして、こうして居られるんですから、で、あや

ふやな一つは、離れて行って仕舞った一つを取り戻せないんで取り戻したくて何が出来るかって崖を登っては、山の森の崖の際のそこだけ風さえ浮かす尖った処に腰を据え、刳り貫かれたばかりのに虚ろな眺めを見晴らしてたんですけど、その真下に空の青をどろどろと明るく映す山より森より風よりさえ古そうなその周りだけ短く生え揃えられた草に囲まれた泉を見付け、その真上から遥かに見下ろしてだけ、その湧き上がる水に差し込む虚ろな眺めの光りが糸が絡んでくるくる捩れるみたいに動いてるのが覗き込め、その水に絡む光りを追ってれば湧き起こっては消えて形を変え続ける泉の中の煌めく渦と戯れてられるようで、他に何も出来ないならそれが出来るただ一つの事なんだ！って、その目に映り込む煌めく渦との戯れの形を空の青に刻み付けられないかなって、目を上げては下ろし、高い空に響く微かなざわめきとまだ聞こえても居ない低い泉のざわめきを重ねようと。で、ま、目は、それ切り何がどうなるでもないんですけど、耳は、泉の水の渦になって煌めく音と、それが空の青に映る響きとを、一つに重ねて聞き取ってたんですよ、まだ二つながらに溶け合ってざわめきまでは到らないまでも。いや、じゃなく、まるで違うんですよね、一つに重ねても溶け合ったりしないんで、それで何の耳にも届かないだけで、ざわめきは、光りの裏側に徽でも生えるみたいに微かに湧いて出てて、それを遥かに見上げる泉の、光りを骨みたいに捩切るような痺れを孕むような目、泉の水の湧

き出す処が一つなら、その一つ目が、そのざわめきを、崖を見下ろす刳り貫かれたばかりかに虚ろな眺めに充ちる蜘蛛の糸の香りを糸を手繰り寄せるように、自らの周りまで引き下ろし、一つ目を自ら少し翳ませ、その翳んで見上げられる眺めには、ざわめきを吐く蜘蛛のゆるゆるした姿も描き出せそうで、その姿が空の青を弾いて自らの透き通った色に燻んで風と戯れて動き始めれば、山の森の崖の際の尖った処に腰を据えるあやふやな一つにはそれは、腕をふらふら消え掛けるように態と弱弱しく伸ばすなら手に取れそうに同じ程の高さで、片腕は崖を確り掴み、そのもう片腕を伸ばすと風に舞い上がる白い布みたいに幾らでも延び、その掌に生えた目は蜘蛛の片目で、蜘蛛にはその片目しか無く、それを泉の、光りを骨みたいに捩切るような痺れを孕むような翳んだ片目が確り見上げ、片目と片目とは、きっとそっくりで。そのそっくりって、離れて行って仕舞った一つの二つの目に違いないって、そうあやふやな一つには見えるんで、それで、それはもうそのそっくりへ呼び掛けてて、口笛で。その響きが、蜘蛛の吐くざわめきに染み通って、そのそっくりに月影を風の塊かと孕んで延び拡がる光りの暈が架かるなら、口笛は、その光りの暈も切り裂き引き破って。それ程に口笛はその口も笛も放ち捨てたかにその響きでしかなく何もかも嘘かもよ口も笛も捨てて何の口笛だよって冴え渡り、その光りの暈の裂け目を突き通ってその奥まで届けば、その勢いで捲れ込む光りの暈の裏側の、闇でさえな

く真っ黒なら真っ白な膚は、狭そうにざらざらと陽の光より鋭い艶を蠢めかせ、もう光りの暈の裂け目は氷より冷たいんだけど、あやふやな一つのひょっとしてもっと冷たいかも知れない唇が一震えすれば口笛はその冷たさにあやふやな穴を開け。そうして先へ尖る儘の口笛の切っ先が、その真っ黒なら真っ白な膚を見下ろすと、だって口笛は前も後ろも上も下もなくどっちだって見通せて、その膚の蠢く艶は口笛の目から逃げたそうにも狭い中を折り重なり棘だらけの撓る枝の隙なくびっしり絡み合うようで、その刺刺した膚の艶は、空の青など干涸らびさせ罅割れさえ燻ませ、替わりに醜く月の青が空を赤白く覆い尽くすなら、昼の空とも夜の空とも二つながらに溶け合って、それでやっと口笛もその二つの狭間に溶けて収まりそうで、そしたらまた、あやふやな一つは凍るようでも柔らかい唇を震わせ。でもそれはそう何時までも続かず、残ったもう一つもあやふやな一つから離れて行って、初めに離れて行った一つとそっちで二つに成ってるかは分かりませんけど、分からない程に愈愈あやふやな一つには、二つは離れ離れで居るしかない程に離れられないんだって、で、その二つを取り戻せないんで取り戻したくて何が出来るかって、でも口笛が光りの暈の裂け目を突き通るなら、それを考えようにも口笛の延びる響きに妨げられるようで巧く纏まらずに、でもそれって悲しいんじゃなかったっけ、の悲しいが何なのかまで口笛に浅ましく攫われてそうで、それで唇は、氷より冷たい光り

の暈の裂け目より冷たいんだなって。その冷たさにそっくりなんだな、って、
でも何が。白い布みたいに伸びる片腕の掌に生えた目の蜘蛛の片目は、その片
目っ切りで、泉の、光りを骨みたいに捩切るような痺れを孕むような翳んだ片
目は、削られて大きく窪んでる崖の窪みの真ん中を示す印、きっと小さな裂け
目なんでしょうけど、それを探すようにキョロキョロしてて、離れて行った二
つのどちらかのそれともどちらかでもの二つの目の面影もなく、何がそっくり
でもなく。でも却って、ならそっくりなのは、そのそっくりが無くてはならな
くなったら懐から取り出すようにでもさらりと使えそうで。でまた口笛を吹け
ば、そのそっくりは媚びるような音を鳴らし、延び上がって真っ直ぐな口笛に
纏わり付くけど、でも何がそっくりかはまだ、そっくりがそのそっくりとそっ
くりだとしか分からずに。まだ？じゃ時が来れば分かるのかしらね。あぁぁそ
っくりなんですよ、あぁぁ球。と、って言って良いのかしら。って私の他にそ
んなの決められる誰も居ないなら、言って良いに決まってましょうか、それと
もまだ時が来てないなら、何時でも言える儘に言わずに置こうかなとか。なん
て迷ってたからか、口笛の何処へも刃のように尖るしかない響きが蜘蛛の身を
真ん中から裂き、口を大きく開く赤い裂け目は拡がるだけ拡がって裏返り、蜘
蛛の身をその裏返る勢いの儘に包み込んで呑みに掛かり、脚も全てその裏返る
裂け目に引き摺り込まれ、ただ片目だけが閉じて行く裂け目の上にさもしげに

ぽつんと乗っかって、ふわふわと風に煽られてる蜘蛛の巣の真ん中に飛び移れば、その片目は残して己の身を全て含んで裏返って閉じた裂け目の姿は、どう見たって何処にも疵も脹らみも無い全くの球で、しかも閉じて継ぎ目も消えれば直に透けて中に入ってるものも透け、昼とも夜とも二つながらの光りに照らされ、キラキラと。それ、あぁぁ球。なんて、言いたいけど言いませんよ。だって黙ってると、その球は浮いた儘もう前からこっそり重なってたかに恥ずかしげに二つにずれて少し離れると、その僅かな隔たりを柔らかく揉み拉いて声を上げさせ、それは、月の色が、裸の獣の白とも黒とも知れない二つの膚の色の混じった色そっくりだって繰り返し歌ってて、揉み拉かれた球の間をその色に染めたいらしいけど、染まって行くのは二つの球で、一つは黒く黒くなくでも白でだけはなく一つは白く白くなくでも黒でだけはなく。あぁそっくりなんですよ、月の、色じゃなく、月影の裏と表に、いや違う、裏が裏返った表とそれに呑まれて消えた表と。そんなの月にしたら、間違いなく隠して置かなくちゃいけないのに、なら見なかった事にしようか、でも間を揉み拉く歌声に媚びるように二つは、二つそっくりにさもまるで違うかの光りの暈を薄く浮き浮きとそれぞれ浮かばせて、それは暈の重さでか二つの球に傾いて被さって、あぁそっくりなんですよ、って、何と。それを知ってるのはきっと、岬を回り込む潮の流れの淀む端に浮いてる幼い獣の背を丸めて眠る姿か、でないなら、崖の

窪む真ん中に印された裂け目、だって裂け目しか削られた崖の姿を真似るかに窪みの真ん中になんて象られようないんで、その裂け目に斜めに嵌まり込んで半ば隠されてるような上っ面は細かな肌色をチカチカさせてるので色は分かりそうな箱か、でないら、泉を囲む短く生え揃えさせられた草に半ば埋もれる、撫でる処を撫でれば内に幾らでも蓄えてる媚びるような音を必ず鳴すに違いない黒白なもの、手に取りさえすれば形は分かるけど草に埋もれてかんじゃ分からない、そんな、その内どれか。って、で、やっぱり形の分からなさに惹かれるかな、泉の水音に聞き入って黙り込んで益益草に埋もれでも隠れる程にその周りの草は渦を巻くので隠れようはない黒白なもの尋ねたらなるんですよ、でもすっかり隠れるとの草の渦は消え、草の短さからしてより下に埋もれたようでも溶けたかも知れないのは、草の渦の跡に黒白の縞が濃くないならくく酷くはっきりと浮いたり沈んだりしてるからですけど、それが黒白な雲で湧くような声に聞こえて来ると、黒白なものが草の中で切り刻まれ逃げ回ってる姿が見えてるようで、泉から離れられずに黒白な声は痛くて苦しそうで露だって滴らせそうでもそうしてる内に、黒白の縞が草の隅隅まで拡がって泉を真ん中にして一つの渦をゆったりと描き掛けると、黒白なものは、泉の底に、やっぱり形は分からないけど箱そっくりの姿で半ば隠れながらクルクル回ってるのが覗いては水の陰に消えてを繰り返してて、いやそ

うなんですけど、それが、撫でる処を撫でれば内に幾らでも蓄えてる媚びるような音を必ず鳴らすに違いないものなのかは、はっきりせず、半ば草に埋もれてたのとモノは同じでも、それとは違うもう一つのものか、それともただ黒白なだけで全く違うものとか、手に取らないと分からないなら高くから眺め下ろしてたってどうにもならないんで、その手触りだけでも泉は知らせて呉れないかな。って思えば、そんなようなそれは、泉から水の泡か小さな透けた球が一つふらふら昇って、でもそれを受け取るのは、蜘蛛の裏返る己の身の裂け目に呑まれたけどふわふわとそれだけ残されてるバラバラの脚の影で、その八つの先が球に突き刺さって三つと三つはそれぞれに結び合い、残り二つは、後一つ足らないせいかそれぞれ一つの儘に、球の真ん中まで伸びて捩れて喱み合い、三つで結ばれた二つは、喱の色と形の違う結び目の儘に脹れ、真ん中の二つかそれに圧し潰されそうでそみ合うのも儘ならないなら、右と左にきっちり分かれながらも合わさって一つの、上と下とで黒白を頻りに入れ替える小さい中のまるで小さい球を作って。で、それってさも何となく、風に煽られてふわふわしてる蜘蛛の巣の真ん中の蜘蛛の片目に成って仕舞ってないかな、って、昼とも夜とも二つながらに溶けた月の青の赤白い空が見誤りそうなら蜘蛛の片目は巣の真ん中でその球との隔たりを際立たせようと暴れたげで、で何が出来るかって自らの球の形を海へも山へも行き止まれない空の果てみたいに歪ませる位

だけど、その歪みが蜘蛛の脚の影の刺さってる泉から昇って来た球をも蜘蛛の片目の影に逆さに沿うみたいに歪ませ、でやっと二つは隔たってるんだって月の青の赤白い空に見直され、空はその隔たりへまでせかせかと落ちて行きたげで、ならもう自らの酷い重さの醜さに行き成り倒されるかにそこまで落ちて行ってて、その狭そうな姿が、球の中の上と下とで黒白を頻りに入れ替えてる小さな球に映れば、空はもう、その入れ替えの狭間に擦り込まれ、空なら必ず拡がるばかりは変わらないにしても球の姿に閉ざされ、蜘蛛の脚の影の色に染められ。でも構わない、空なんて無くたって、月の青は青で、その赤白いのも、きっと何処かで赤白くて、の何処かって何処か、って、泉の底で箱そっくりの姿で半ば隠れてる黒白なものの形の分からなさなんですよ、で、それはクルクル回る内に一つ目みたいに赤白い球に転げ固まって箱の何時も空を斜めに向く一際汚げな角にぴたりと嵌められ、その球からだけは、上と下とで黒白を頻りに入れ替えてる球の中の、球の姿に閉ざされた空の拡がりは果てしなくも見て取れてそうで。でも二つ同じ黒白に係わる球と球でも、あぁぁそっくりとも、況して、あぁぁ球。とも言えないのは、間に月の青の赤白さが挟まってるからか、それともそう見せ掛けて違う、きっと青と赤白さを操ってる何か、あぁなら分かり切ってる、泉の、光りを骨みたいに捩切るような痺れを孕むような翳んだ片目が、どんなそっくりも挽き潰して弾き飛ばし、球もただ球って、それ

で黙らされるだけの球にしてましょうよね。でもその泉の片目って、蜘蛛の片目とそっくりって事にしろ、そんなのまだ何処にも姿を現してないのでは、って、箱の角に嵌められた赤白い球と蜘蛛の脚の影の刺さる球の中の球の球の姿の空の拡がりとの隔たりが訝って、泉の片目の手掛かりを、それはやっぱり先ずは泉の中に探すと、泉の底の遠い浜の波音の響く側の端の斜めに捲れる裏側に形の分からない白赤い石が危うげに揺れてるのが見付かり、その白赤さに触れて流れ去る水を、水とは違う三つの色に変えてて、一つはきっと裸の獣の白とも黒とも知れない二つの膚の色の混じった色そっくりの月の色で、一つは裸の獣の白とも黒とも知れない二つの膚の色の内の間違いなく白とは知れない色で、もう一つは裸の獣の白とも黒とも知れない二つの膚の色の内の間違いなく黒とは知れない色で、で、その石から下る程に硬く尖って互いに隔てって行くその三つの色の流れは、更に隔たりながらそれぞれにそれぞれの内へと曲がって、その間の、石の白赤さに触れなかった嵩を増して脹らむばかりの水の流れを外から抱え込むと、抱え込まれた水の大きな塊は、その三つの流れとも水の色とも違う、泉の色でもない、だって少しも濁ってないし暗くもないのに何の色も消す流れの塊としか見通せず、その流れだって水なのを見失えば、きっと直ぐ様固まつて流れな筈もなさそうで、で、その水なのをもう見失い掛けてないかとも、でもどうにも水にしか見えないなら、それはそんな色かなって。そ

れともそれは色じゃなく、でも色なら、色を色でなくして仕舞う色の色な色でない、そんなそれなんだけど、それって、裸の獣の白とも黒とも知れない二つの膚の色の混じった色そっくりの月の色と繋がってそうで、じゃない、違うんですよ、色の色な色でないを遡れば、その月の色だけは見付からず、月影は何処からも差さずに月影に酷く渇いてて、それで水なのを見失いそうでも水でだけは無くてはならないに違いなく。そこがまだ泉の底の続きか、その底と繋がる低まるばかりの処なら、泉の目の光りを骨みたいに捩切るような痺れを孕むよな、って、その月影への渇きなのかな、違うかも知れなくても、その光りを骨みたいに捩切るような痺れを孕むようなと月影への渇きは互いを透かし合うように、海へも山へも行き止まれない空の果ての泉の目なんて届く筈もない端で、決めてたみたいに斜めに裏返って、空の全てを押し詰めた形のない透けてる石の欠片のような独りっ切りな匂いを、直隠してそうで。でもそんなの見付けられる筈ないなら、さも取り敢えず、それとはうっかり逆さみたいに、三つの色の硬く尖る流れにすっかり抱え込まれてもう凝っとしてそうな流れの塊の色の色な色でないの中で塵程に小さな石の粒を内に一つずつすっかり透かして孕む水の泡が幾つか、その石の粒に纏わり付く昼とも夜とも二つながらの空の光りの欠片を微かに水の泡に映しながらクルクル回ってる、その踊るような跡が筋になって稀に交わればその交わる形の粘りの重さの水の軽みへ溶けたく

ないかのように凄くゆっくりと輝いて水の泡を透け、もっとゆっくりと流れの塊の色の色な色でない中を酷く弱く滲み渡って、何の色ともそっくりでない月の色かとも、泉の目の光りを骨みたいに捩切るような痺れを孕むようなな月影への渇きには映るしかなさそうで。で、その痺れが、月の色でだけは無いばかりか僅かにも月の色の混じらないただ一つの色、だって月の色の混じらない色なんて空と水に挟まれてる何処にも無く、なので何処にも無いただ一つの色に、その何処にも無さから来る汚げな匂いを放ちながら染まって、その痺れを鈍らせるなら、渇きも月影へのでは無くなって、その痺れを孕むような渇きは、光りを骨みたいに捩切るような姿に捩れるばかりで痛そうで、痛そうなだけじゃなく隅隅まで痛みなんですよ、月の色でだけは無いばかりか僅かにも月の色の混じらないただ一つの色の、と言うか、その色が痛みなんでしょうね。で、その痛みの色に染まる痺れを孕むようなな渇きは、己が何に渇くかを知らずには居られなくなって先ずはその何にを知りたい渇きになって、石の粒を孕む水の泡のクルクル回って交わる処へと遡ろうとしても、どうやらそれと違う処を遡ってるようで、そのどっちへか知れなくても遡ってるのは確かだって手応えを掴むともう遡りたくても何処へも遡れず同じ処を空回りしてるだけなら遡りへの渇きかも知れないなって、すると何で遡ろうとしてたかも忘れ、ただ忘れたもの渇きだけで忘れたものなんて知らないなら渇きへの渇きしか思い当

たらず。アハハ、渇きへ渇くなら渇きがぐるりと一巡りして元に戻って、何の渇きも、どんな空の色にも卑しげに溶け入りそうに、渇きでも無くなって。って、そこでは何だって手に入るのに態と手に取らず何にでも幾らでも渇いてられるんだって、だって石の粒を孕む水の泡のクルクル回って交わってる処だって直ぐそこに、ほら、手に取ろうとしてもう手に取ってますもんね。でも手には丸い形が乗ってるだけで、その中に何だって目当てのものは詰め込まれてそうでも、手から滑って転がれば、そりゃ石は、ここは丸くなくちゃね、って丸い石で。そんな石なら幾らでも転がってるにしろ、どれも何処か歪で、その歪さのせいで中に詰め込めないものなんて無くて、そのせいでだけどれも酷く重いに違いなく、重い程にどれも同じ向きの僅かな傾きをズレズレ流れ落ちて行ってて、そんな眺めの中に探して仕舞うのは、中に必ず一つ隠れてなくちゃいけないって思えて仕舞う、歪さをまるで寄せ付けないせいで影より軽い球かな、どうしたって。あぁぁ球。でも声じゃない。じゃ何かって、長い時を負った月影の重みで塞がってた喉が突かれて開いた小さな穴を噴き上がって来る細い水の流れとかかな、な筈ない、それって、丸い石だらけの眺めの中にぽつんと一つ、何処の月影だって呼びそうな水の色の匂いが滲んでて、それへ平たい光りの暈が微かに被さると、その光りの暈を通して指先程の水が幼げに水の色をして傾きへの恐れも知らず少しも傾かず立ってるのが透けて、水の色は真ん中か

ら黒と白に分かれてて、それって、黒い側は、その水の色に比べたら酷く濁って見える泉の目が届くからで、白い側は、月影の濁りさえ透かし見せる程静かかに遠い浜からのその波に洗われる震えが届くからで、その黒からは白い、白からは黒い境目の揺らめく音で、いやまるで違う、その境目にだけは直ぐ側の水の音だって届かず、山の森の崖の際の尖った処に腰を据えた切りのあやふやな一つの鳴らすあの口笛の響きの迷い込んでだってさえ拒まれよう、立ってる幼げな水は色んな音に外からただ撫でられ、それで境目の揺らめくのが却って音の姿に見えて仕舞ってるんで。でも水は指先の形の儘に骨みたいに動かない、なら水の儘に透けた骨で、なら水と違って骨なら動くに決まってて、指先の形は少しずつ縮んで球の形に成り掛けるけど成り切れないのは、骨は一つ水の泡のような中身の空っぽに見えるのは見誤りに違いないと見える小さな球を含んでて、それが骨の中で動き回ってるからで。球は、真ん中なんて何処にも無くあやふやに、でもはっきり黒と白に分かれ、黒白が真ん中の無いのを良い事にあやふやにどう向きを変えようと必ず黒い側は泉を向き白い側は遠い浜を向き、その黒からは白い、白からは黒い境目、いやまさか、そんな境目なんて無くて、黒と白は離れてないけど少しも触れ合ってもなく、だって、黒からは白いの黒って白で、白からの黒いの白って黒で、黒白を入れ替える鏡を互いの姿にしてそれに映る己の姿を互いの姿にしてるんで、それで己の姿に触れようもなくな

れば、それで互いも触れ合えなくて、なので球の形に成ってる、って事は、黒と白に分かれてる、境目が無いなら、その分かれ目ってのが、そのあやふやな儘はっきりと球の形に違いなくて、それで球で。ん？いや、なら形だけ球で少しも球じゃないんですよね。で、そんなそれがそんなせいか、骨は骨が誤りで水に戻って幼げに立ちたいかに、もうこれっ切りってまた少し縮んで、球じゃない球の形は上と下へ僅かずつしか動けなくなれば、球の形を縦に裏返して閉ざすように黒と白の分かれ目はあやふやの真ん中を切り裂かれるように剥き出されてその姿を晒し、それを含んでるのが骨か水かをあやふやにして、その軽みに独り僅かでも沈めるだけ沈んで、もう上へは無いな、って、黒白しっかり結び合って、それが球に成るなら、いや違う、球なんてその形さえ、あぁぁ球。の勢いに任せて何か知れてるかに思い違いでもしてたんで、まだその何を知れてるでもない空と水を合わせたより遠い球を求めるように、ただ下へとだけ落ちて仕舞いそうで。で、落ちてるかどうか、そんなの知れないし、それが知れるかどうかでもない、その何処までも下へと覗き込める拡がりは、空と水との隔たり、隔たりって何処の何だって空と水の隔たりに決まってますけどね、違いますかね、その行き着いて窮まる少し手前をゆらゆら揺れてるみたいな隔たりとそっくりで、思わず、あぁぁそっくり、って、声が欲しくなって、その出せも聞こえもしないなら、またはまた酷くその声を欲しくなって、その声さえ無いそ

っくりとそっくりな何かは必ず見付けなくちゃいけないんだって、で見付かるのは、その下への拡がりの空と水とにそっくりな隔たりの窮まりをゆらゆら揺らしてあやふやにする影が一つ、それとも二つで、隔たりの窮まりに見付けられたお蔭で、これ程確かな一つそれとも二つって無く。あぁぁガラガラ、裸の。黒光りして真っ白な暈を被って、黄ばんだ細かな砂の上に転がされてる、それが二つかな、それとも一つで、もう一つは、片端に大きな結び目の有る短く切られた紐が石みたいに重そうに傾き、ガラガラへは斜めを向いて、周りには砂を掻き集めようとして細か過ぎて出来なかった荒荒しい跡が痛そうで、いやそれって跡にしても、大きな結び目は今も砂に埋もれ掛けては動きを隠してるかで、凝っとしてるようでも砂集めは諦められてなくて、ふと結び目だけじゃなく紐ごと砂に埋もれたりするんで、その絹のように薄い砂の裏を透ける影が転がれば裸の黒光りするガラガラそっくりで、然もそうなるとガラガラが慌てて砂に姿をすっかり隠して仕舞うようで、それで、一つそれとも二つかな、とも。あぁこの二つを、あぁぁそっくり、って声に出来たらな、いや違、違わないかも知れないけど、声って何だっけの何って声だっけ。知らない。ただ、そっくりが欲しくなると、そのそっくりを確かな姿にしたくて、その為に欲しくなる何かを、何だっけの声って事にしたいだけとか。あぁぁそっくり、なんて何に向かってだってその何はその何とはそっくりに決まってるんだから、そっく

りを欲しい限り幾らでも言えますしね、ん？なら、声が欲しいとかじゃなく、
その、声にしたいそっくりって、何。いや、何、とかじゃなく、あぁぁガラガ
ラ、裸の。の他に無くて何にしろ、だってそこまでの拡がりの空と水とにそ
っくりな隔たりの窮まりが、森がまだ塩辛い岩肌を晒してた頃からずっと蓄え
て来た岩肌そっくりに粘っこい光りを、その拡がりの真ん中に一筋に降ろし、
その細過ぎて繰り返し消え続けるばかりな輝きが、黒白黒白とガラガラに注が
れ続けると、ガラガラの上っ面は平たく固そうな、の戯れる形に覆われ、それ
が少しも炎のようでないならそれを、盛った姿の違う炎で燃やし尽くすように
月の形がガラガラの上膚面に撫でるように映って、でもその色は、獣の白とう
黒とも知れない二つの処の色の混じった色そっくりでだけは無く、少しもそう
は見えないんだけど何処か、空の白と水の黒の互いに触れ合えずに却って黒は
白を白は黒に渇いてるみたいに互いを歪め合ってるに違いないようで、ならそ
の黒と白って色とは違うんだって、いや違う、そう見えてならないって見たく
て堪らないのかも知れないな、黒と白の渇きが映るみたいに、って、何処に？
黒と白が色とは違うようで違わないにしろ、なら黒と白の渇きは色のあやふや
さへの渇きで、ならその黒と白は色と違ううんで、あやふやかにあやふやで無
しに、なら黒と白の渇きは色へはあやふやとさえも映らないような、違うの？
それとも色へ映りながら、色に渇くはっきり黒と白とか。それとも映るみたい

なだけで何処へも映ってないとか、そのどれかかどうかとかより、何処に？って尋ねるのが果たしてどうかな、何処に？なんて、少しも何処に？じゃなく、いや違うな、何処に？が何処にへと何処に？つて、何処かに尋ねたってそれだけで、映るみたいなその黒と白の渇きに係われたりしないんですよね、きっと。違いましょうか。だって、あぁぁガラガラ、裸の。って声にしたいそっくり、の他に何も無いなら、何処に？なんて何処かに尋ねられる何処も無いに決まってて。え、じゃ、もう一つの片端に大きな結び目の有る短く切られた紐は？って、その紐自らが尋ねるのは、翼を生やして跪く獣でだけは無い目を瞑る幼い姿で、黄ばんだ細かな砂でも、じっとり湿った中に何処か分からずすっかり埋まって、でも瞑る儘に、空を向いて眠る片目は静かでも、水を向いて水の奥から這い出して来る水の一つ目を見詰めるもう片目は、絶えず音を立てて、そりゃ何をだろうと見詰めればその見詰める音はしますよね、必ず、でその片目の音が紐に答えるんですけど、その音はすっかり透けてて、遠い水の一つ目に届くばかりで、だってそれを見詰めてるんですものね、ならその一つ目に尋ねるんだ、って、紐の結び目が身を翻してる水を向くと砂浜しか無く、水も無く。でも水の替わりは水よりずっと重そうな色を内に孕んで隠してそうなたっぷりな月影の拡がりで、それが波そっくりを寄せるなら海そっくりで、いや違、違わないかも知れませんけど、それは海にそっくりなんじゃなく、きっと海が何か

にそっくりで、そのそっくりはただそのそっくりとそっくりで海そっくりの月影で居られるみたいな。それを、ほら見付けたよ、って言って仕舞えば、他の何にも似てないそっくりのそっくりを見付けられたようで、見付けられたようなら見付けられたんだ、って、そこへ一思いに飛び込むと、って何が？知らない。でも知らない姿なら知ってる。翼を生やして跪く獣でだけは無い目を瞑る幼い姿なんですよね、他に無い。つまりその他の何もその姿は知れてるって事、かな。なら、獣でだけは無い、は要らないかな、だって獣でだけは無い姿なんて幾らでも知れてますからね。獣の姿をしてたって獣でだけでは無いかも知れないのだって幾らも有りそうで、って思い浮かぶのが、幼い獣の背を丸めて眠る姿なら、遠くても、それが岬を回り込む潮の流れの淀む端に浮いてるのが、ただチカチカとしか見えなくても、くっきり見えて仕舞って、跪いて目を瞑る幼い姿は、翼を生やしてるのはこの時の為だ、時を逃さないぞ、って、そこへ真っ直ぐ飛んで行けるようで。行けるようなら行けてるようなだけで少しも行けてないんだ、って、目を瞑る幼い姿が眉を顰めるなら、その自らの飛んで行けてない行方を追って跪く儘に反っくり返る程に伸び上がり、目を瞑る幼い姿はその動きの中にねっとりと溶けるように、ただ明るく笑うように弓形の、片側を砂浜より向こうからの月影を真横に浴び、月影の差さない側は真っ暗で無いも同じで、なら無くて、笑うように、は傾いて、少しずつ浜から岬へと向き

を変えると弓の形は欠ける月かにすーと酷くゆっくり時をずっと余らす為かに細くなり、消えるよりはと閉じる振りさえせず自らを苛みたいかのキリキリした輪を描きたげに倒れ込むなら、水の無い月影に満たされた、刺さった棘かに岬を痛がるかの海に、傾きと真っ暗に挟まれた弓形を擦り抜けて目を瞑る幼い姿で海の痛がりを真似るかにどうやら転げ込んでるんでしょうけど、どうかな、それって、先に一思いに飛び込んだ筈の何かの後を追ってそうですけど。そう見えて仕舞うしかなさそうでも、まるで違うんですよね、そうして倒れ込んだ目を瞑る幼い姿には月影は、その姿の反り返る背中を掠めるだけで、その姿は殆ど真っ暗な中に痛みごと溶かすかに溶け、その様に、他の何にも似てないそっくりのそっくりに飛び込んだ何かが目を遣るなら、その目は裸の獣の裸の目にそっくりで、なら飛び込んだ何かは裸の目をした裸の獣で、それが、傾きで身動き取れない目を瞑る幼い姿を真っ暗な中から助け出そうとしてそうで。でもどう遣って？なんて思えて仕舞うなら、獣はもう月影に溺れてるんで、却って助けて貰わないといけないかも。なら、どっちも助からないんだ、って、誰が思うんだっけ？そりゃ、誰が思うんだっけ？自らしか居ないなら、その自らは、自らの、誰が思うんだっけ？とそっくりな、他の何にも似てないそっくりのそっくりを探して直ぐにも見付けなければ消えて仕舞いそうで、なら消えてるんで、で、それでもそっくりとそっくりにそっくりそうなそっくりがその辺

りに何か残るとしたら、それって、も、それって言えるかも分からないけど取り敢えずにはそう言うしかないそれって、独りそれ一つのそれには違いなく。他の何とも似てないせいで、他の何ともそっくりで無い。それとも他の何ともそっくりで無いせいで、他の何とも、ただ、そっくりな。さも丸裸で、その澄んだ膚に何でも映り込んで、その何でもにも成って仕舞いそうな。あぁぁ球。って、それ、呑み込まなくちゃいけないみたいでも何で呑み込まなくちゃいけないのかな、いやもう疾っくに、そんなの、あぁぁ球。で溢れ返ってるんですよ。それが声かどうかなんて知らなくたって構わない、だって、あぁぁ球。ですもの、そんな、あぁぁ球。ならそれでそれもどれも巧く行くんですよ、まるでそうでないに決まってたって。決まってる事なんて決まってるだけの事でしかなくして仕舞えるんで何時でも、それで、あぁぁ球。なんですもんね、きっと。その、きっと、さえ掴まえてれば、何だって、きっと、で。そっくりとそっくりで無いも、きっと、そっくりでそっくりで無く、いや違いましょうか、そっくりとそっくりで無いは、そっくりでもそっくりでも無くでも無く、そっくりともそっくりで無くでも無く、なので、きっと、ですよね、きっと。あぁぁ、そうして、きっととそっくりの波間を泳ぎ渡ったんでしょうよ、ついさっきまでは遠くに眺めてた岬の浜に辿り着いて、って何が？って見れば、きっとは軽過ぎてそっくりは重過ぎて波間なんて有る筈ないなら泳ぎ渡ったなんて嘘

だよねって泉が、ダラダラと湧いてるだけで、でもきっとでもそっくりでも無
い、いや違う、きっととかそっくりとかとは違うらしくに、そうしてだけ泉で、
あぁぁそうしてだけ泉なんですよ、なのでか、泉からどっちを見渡そうと、山
も森も、海なんて疾っくに影も無く、その泉を囲む、のっぺりと窪む空っぽが
すっかり岬の姿で、でも凄く狭くて真ん中から右と左に裂かれたみたいな艶艶
と明るい顔の裂け目みたいな処に挟まって、辛うじて泉は窪みに圧し潰されず
に済んでそうで、の顔って、あの、空の青に幾ら照らされてもその青は少しも
映さない、右の片側は白赤く左は青に染まる傾きに埋もれてた、独りそれ一つ
なその身の顔に違いないとは分かっても、空の青に照らされるなんて望みよう
もないでは面影もなく、それできっと艶艶と明るい顔の、右と左に裂かれたみ
たいな裂け目みたいな処に、顔の右も左も端へ追い遣られ押し詰められ、それ
ぞれに歪む弓形の硬そうな緩く伸びた襞にしか見えなくて、いや違うな、襞に
しては何かが足らないな、って見入って仕舞うと、もし拡げられるなら、それ
って翼じゃないかなって、の、それって何？何に見入るも、挟まってる泉の水
音に溶けて流れて、襞にしては足らない何かを幾ら目で追えたにしても、行く
先は水音の流れ落ちて行く、右と左に裂かれたみたいな裂け目みたいな処の斜
めに振れる半ば裏側で、水音に捲れ上がって覗くその奥に、黒とも白とも知れ
ない強過ぎて鈍くさえ輝かない光りが柔らか過ぎて少しも揺らめかず凍ったみ

たいに深深と溜め込まれ、なのに揺らいで、待ち兼ねたかに、ふと光りで無く
なったりしながら思う様翼を生やしたそうで、なら透き通った翼はもう次次に
光りの揺らぎの上っ面に生え揃い、でもどれもまだ幼過ぎて、ふと光りに呑ま
れてそれっ切りだったりしながら、幾つかは陽炎に絡む枝の無い捻くれた立ち
木みたいに見る見る育って硬く尖って、その先っぽにどれも影のような球を乗
せ、暫くはその球が翼を育ててるようでも直に球と球が繋がって寧ろ翼らの伸
び上がるのを押さえ付けてるようで、でもその球と球の繋がりもふと光りに圧
し被られてそれっ切りだったりすれば、そのそれっ切りを伸びて抜けた尖った
翼らは、それぞれに、その飛べる空でも見付けたみたいに嬉しそうに蕾の綻び
るかに羽搏きましょうか、でもその飛べる空かの中に、どれもずっと死にたが
つてたみたいにふと消えれば、その残した消える音が自らの静けさに急いで驚
いてさざめいて、泉の水音にそっくりかな、影も無く。そっくりなら泉の水音
なんだ！然も水音に影が無いのは泉に影が無いからなんだね、そっくりにそっ
くりかに、って誰が言うんだっけ。って、それを言おうとずっと待ってた、独
りそれ一つなその身に違いないですよね、だって、そんなそれ一つに独りそれ
一つのその身なら、その一つの他に何も見付かる筈も無くて。にしても、その
独りそれ一つなその身だってどうやら見付かってないかな、なくてもそれとそ
う言えようけどどうやら言えてさえもなさそうで。なら替わりに、そう言われ

る泉の水音が、そう言ってても良さそうだけど言えないでしょうよ、だって、そっくりだけならまだしも、そっくりにそっくりかにでは、何を言おうにも、そのそっくりのそっくりに搦め捕られ、何をにしろそっくりにそっくりかにとしか言えないとしたら、そんなの、そっくりからしたら何をさえ言えてない、つまり泉の水音を、とさえ言えてなくて、でも、言おうとはしてるその姿は、そっくりにそっくりかに、って元に戻るみたいですけど、元に戻るみたいならそのみたいな元は元の元とは違うんで、なら、その姿のそっくりにそっくりからにも、言おうとしてる前のそっくりにそっくりかにとは違うんで、でも、だったら、そんな泉の水音って、少しも泉の水音じゃないかも知れないなって、じゃないかも知れないその泉の水音は、己から逃れたそうにでもそう思ってそうで。そんなの思ったら、そりゃ、じゃない、ですよね、違いましょうか、って、誰が誰に尋ねるも無さそうなら、私が、まだ私には何も知れてないあなたに尋ねても良さそうですけど、あ、いや違いますよね、だって、私もあなたも私とあなたって向き合えば、抑も向き合えないんでしょうけど、誰がとでも誰にとでも無くなるに決まってるも何も、そんな私には違いなくて、あなたは知らないけど、なのでこんなのまるで違、いや違わないかも知れませんけど、誰にもならない誰でもないが、自らを私なんて言うのから違ってるには違いなく、でも、ならそう違いないって言えるのは誰でもない、の、そう言ってるのは何？

ってなら、分かり切ってますよ、独りそれ一つなその身ですよ、だって他に何もやっぱり見付かってないかな、って。で、振り返り返したかに、見付かったよ！って、言えるかどうか、その身の見付かってないかな、は、見付かったのかな。でそれを、見付かったよ！って言ったとしたら見付かる独りそれ一つなその身か、って、尋ねるのも答えるのも、その独りそれ一つなその身の他に無いなら、それは自らの身を見付けたかどうかは知れないにしろ、独りそれ一つないその身は、そこに、見付かったよ！と、どのようにか離れ離れのようでぴたり結ばれたには違いなく。違いましょうかね？なんて誰も誰にも尋ねられる筈も無いなら、そんなでしかなく。そんなでしかないあぁぁ私、何処に居ようと何処にも居られないなら翼を生やして降りたい処へ降りられる、って言いたい、叫ぶようにでも、いやまるで違う、そうとだけは言いたくないんですよ、翼なんて要らないんですよ、何処にだって降りたくなんてないよ、それとももうそうん叫んで仕舞ったのを、裏返して叫び直したいかに耐え難くても逃れられず、そんなん裏返らされる叫びへの渇きが、耐え難さを残して独り先へ先へと青白く細長い翼をピンと伸ばして降りて行ってそうで。あぁぁそれを見上げる独りそれ一つなその身を見下ろせるなら、あぁぁ球。って、言い直せないかな、って、それ、耐え難いって叫びへの渇きが、ですよね、いや違って欲しいんですけど、でも違って欲しいって、その渇きにそっくりでは、違いようもなく。アハハ、

違いようもないなら違いようもない儘に何にしたって何も違いようもない中へ見失われるしかなく、硬く尖った口が叫びも渇きも食い尽くしたかの独りそれ一つなその身だけが、どう違いようも有りそうに、どう違いようも有るしかない岬の有りもしなさそうな形を真似るかに横たわってて、なので、形からして横たわってなんてなくて、凹んでなくちゃいけないなら脹らんで裂いて開いて欲しがってそうな筋張って硬そうな腹の底に、黒黒と輝いてその身をすっかり白く褪せさせる音もしない泉を一つ小さく隠してたのを透けさせ、もうその泉は何も隠せないなら、泉の底が、形は分からないけど箱そっくりの姿に固められ、その中へなら幾らでも、あぁぁ球。って声を蓄えられそうで、も何も、その蓄えられて来てたんで、それはそんなそれに、どう違いようも有って、って、その蓄えられて来たのもどうにも違いそうで。でも声はどうとも違いようもなく声でなく、独りそれ一つなその身の内を暗く水より軽い血のように巡りそうなら、血を送る為かにそこだけ生きてるみたいに片足が捩れて浮いて、その断たれた踵の断たれて剥き出しの黒い骨が艶艶と、断たれてないかに丸丸とした形を嬉しそうに。あぁぁ球。だって、だって嬉しそうだもの、嬉しそうが丸丸とクリクリと回るみたいに、そうして色という色をたっぷり染み通らせた、輝くように骨で。そんならそのたっぷりが溢れるのかな、骨は真ん中から丸っこい裂け目を盛り上がらせ閉じ合わさるみたいに割れて、骨の中には色なんて

一つも無いのを晒せば、裸の獣の白とも黒とも知れない二つの膚の色の混じった色そっくりの月の色が、それより高くなんて無い位高い処から真っ直ぐに落っちて骨を突き抜けるかに満ち、裸のガラガラを握ってガラガラを真似ずには居られずに裸の私が独り、えぇ私独り？そう私が、初めから私だったみたいに、そんな私と、独りどう違いようも有りそうに、お淑やかで幼げな眼差しを、骨の底の底まで落ちて止まらない月の色に刺し通し、真下を向いてるその眼差しを月の色を刺し通す儘に前を向くまで起こすと、月の色はどんより重い水音を激しく立てて私の身に流れ込んで来て、えぇ私の身？まさか、私の身なら疾っくに、あの遠い口も笛も捨てて何の口笛だよって響きにすっかり切り刻まれてズタズタの紐がヒラヒラしてるみたいなもので、って、始めっから分かってた事を今分かったけど、それへどう遣って月の色が流れ込めるかな、って、振り返られて、なら振り返る事もなかった一つ切りのそっちを振り返ると、そのそっちはその振り返るのを凝っと待ってたに違いなく、狭そうに直ぐに動きを止めそうに待ってた事を始めてたにしろ、死に掛けてる獣からみたいな酷くぎこちない弱い口笛の音がスースーでもなく、石と砂を擦って石ばかりが砂に見せ付けるような透けた音を立てて全て石の中に音は隠れてそこから一息に砂に成ろうと啀み合って一つ処で石が砕かれ続けるみたいにザラザラと籠もって響き、その砕かれ続ける程に石は石の儘に粘りを増してそうに口笛の音を揺さぶって、

それでまたそのそっちは動きを止めて止まった自らを凝っと見詰めてるみたい
で、って、何処を？あぁぁ、なら分かるよ、自らの腹の底だよねその底って抜
けてないかなって、だって、何処を？って、何だって何時だって行き着く先は
誰かのなら誰かのでも無い腹の底だからね、まるで違いようも有りそうに。そ
んな何だって何時だって必ず行き着くなら何が腹の底もなく、動くものが動く
為だけに丸く動いて、って見えるなら、その丸い動きに囲まれ、ガラガラを同
じ傾きを保って音を殺して楽しそうに振りながら丸く丸く回って、瞑れる目を
持てないなら瞬き一つせず重い瞼に深く長い息を延ばしてそうに眠りを恐れて
絶えずキョロキョロして、でも何かを探す為じゃなく、ガラガラの中の音を殺
す丸く傾く動きを目の玉に写し取るかにで、って誰が？って尋ねそうになる声
なら呑み込んで、って、それは私が、で、そう私が私を振り返るなら私は私を
消せて、そこからクルリと振り返り直して、ガラガラをすっかり音を殺す技を
身に付け楽しそうに振りながら丸く丸く回ってる、それって生身の姿か、つる
りとした石にでも写された姿か、そのどっちかの影に色を着けたか、ま、どれ
にしろ、それをそれが楽しませてるかどうかで、その楽しまされてる生身は、
写された姿そっくりに、何ともそっくりでない月の色を色なんて知らないみた
いに纏ってて、なら色なんて無いよねって、それがまた楽しめてるみたいでガ
ラガラを音を殺すのなんて忘れて振り翳し、そのガラガラに飛び付こうと腕も

伸ばしてるけど届かないのは、あぁぁ球。って始めにその球と呼ばれて球に成ったそれを呼んだ声をそれへ届けた、でももう疾っくに居なくなってなくちゃいけない、獣でだけは無いにそっくりでもなく似せて、そうとも知らず生きてれば死ねる姿で、あぁぁそんな姿って何だっけ？知らない、しかもどうにも汚げだし、ならその姿に続く、またそれを真似たみたいな知らない姿が、その次にまた知らない姿を従えて腕を伸ばしてるけど、始めの姿より二つ目、二つ目より三つ目は小さくて、とてもガラガラに届きそうになく、その三つの頭の傾きがゆらゆらと定まらないせいで、それに苛つくかにガラガラに翼でも生えそうで、なら生えてて、ガラガラを持つ姿にそっくりで却ってまるで違う姿が、飛び付くのを已めない汚げなら汚いに違いなくて汚い儘に汚さを拭えたみたいな三つの姿の後ろから、切り取られた枝の無い捻くれた立ち木を硬い筈みたいに思い切り高く振り翳し、その翼の生えたガラガラを打とうとしてるんだけど、でも翼はそれを嘲笑うみたいに閉じたり開いたりで巧く躱し、立ち木が益益激しくも狙い澄ますように狭い音を唸らせるように振られると、立ち木とそれを振る姿は光りを孕んで幻と呼ばれれば幻と消えそうで、なら幻と呼ぶ声を消そうと焦るかに立ち木はまた激しく振られてそうで。そうして孕まれた光りに立ち木もそれを振る姿も侵されて行くみたいに、もうまるで幻で、なんて筈ないよね、だって立ち木はそのまるで幻なんてモノともせず振られ続け、何を幻と呼

ぶ声も、その声だって幻じゃ無いってマとボロとシには近付かない音をブチブチ立ててブツ切れにされながら掻き消されてるんで。って、そんなのを、独り遊びか、って仰け反って見上げてる三つ繋がる、獣でだけは無いにそっくりでもなく似せて生きてれば死ねる姿の六つ並ぶどれもそっくりなそっくりでさえ有れば互いを浄められるかに汚げでさえない目は、水の泡粒みたいに小さくてもそれぞれクルクル楽しそうに互いのそっくりを見合って何も見えないのを怖がるにも慣れたように内を向いて回って、寄り集まって一つに纏まりたそうに生きてれば死ねるのさってうっかり消え掛けたりして、その隙にガラガラに生えた翼は、それだって仲良く揃って独り遊びか、見るに耐えないなって、ガラガラから離れて翼だけで飛び立つようでも何処へ？そうして狼狽えるしかないような翼を、中の空っぽな球を二つに割った器で右と左から挟み込んで捕らえて仕舞うのは、何が腹の底も無くにそっくりな腹の底な、そんなでは言われる腹の底って何処？って腹の底をした誰にも似てそうな、なのでもうその先に誰にも似てそうに負けて誰の姿も出て来そうに無い姿で、そうして捕らえてみると、その右左の手で掴んでる二つの器は少しもずれずに一つの球にしっかり閉ざされる形で、その球の中で翼が狭そうにでも何処へも飛び去らずに済んで閉じ込められてるのを楽しげかに羽搏いて、その羽音とは係わらずに球の中に湧くガラガラに似せようとされる音を、その音を探してるけど探しに行けない

何処かへ届けたそうで。腹の底からそれを見上げられるのは溶け掛けた蜘蛛の屍の虚ろに刳り貫かれた小さな、でもその小ささを突き抜けて透き通る二つの目しかないなって分かれば、腹の底は有りもしなかったその形を急いで畳まれるみたいに閉ざされ、何もかもが何か知らない儘何もかも忘れたみたいな目付きを搾えて、その球を掴む姿は、ガラガラを振る姿と立ち木を振る姿とで成り行きで三つ並ぶしかなく、そのそっちの中で背丈も概ね揃えた長い時を共に過ごして色を失ったすらりと描かれた姿みたいで、みたいなら描かれた姿じゃ無いんだって、球を掴む姿は呟きたいかに独り動き直し、その球を腕を伸ばして高く掲げ、そしたら蜘蛛の屍なんて嘘だよって、活きの良い刺刺した脚を誇りたそうな若い蜘蛛が糸を吐き吐き球の中の翼を襲いに来そうで。その怯えてそうな球の中の翼に見入るガラガラを振る姿は、翼を救う積もりか、自らの背に生えてる光りの暈みたいな大きな翼を見せびらかし、その勢いで空いてる手で球を奪い取り、もうこれっ切りって目付きを悪戯っぽさを悪戯っぽく隠すように搾え、その球を、球を掲げてた姿の腹目掛け、その姿に背を向けながら、つまり大きな翼を球を掲げてた姿の目の前に振り向け、片腕を痺れたみたいに振り下ろし、描き易ようにかそっと置くようにに投げ付けると、その片腕は力が込められてるって描き易ようかに反り返り、突き立てられた抜かりなさそうな尖つた指は高い辺りを差し、その高い辺りから、それらを見下ろしてる私の姿に

私は恥じ入らなくちゃいけないのか、でも無いのか、その三つの姿に教えて貰いたいようで何か怖くて。その怖さが腹の辺りに球を投げ付けられた姿に映れば、私はその姿の直ぐ後ろに立って居なくちゃいけない筈が居られないんだって、もうこれっ切りみたいに分かって、そのせいで球を投げ付けられた姿は何もかも何か知らない儘何もかもを躊躇うみたいに弱弱しげに痩せた身を微かに傾かせ、腹の底なんて始めから無かったみたいに抜けて窄んだかに、腹の上っ面は少しだけ寂しく微笑むみたいに薄い肉を微かに波打たせて次にまたもっと寂しくたってもう微笑み方も忘れるんだなって月影への渇きを煌めかせるように震え、でもその震えって、活きの良い若い蜘蛛にまだ乳臭さのせいで腐ってそうかもな、腹の肉の匂いを嗅ぎ付けられそうで、でまた少し怖くて、その少しって底無しみたいなら却ってその怖さを諦めの波に乗るかに楽しめそうで。そうして楽しめてやっと、自らが裸の上に薄衣を纏うだけで他に何を身に着けるのも許されないんだなって分かって、腹の震えを真似るみたいに月影への渇きを何時でも易しく煌めかせられるかに知らず微笑むと、楽しめてそうだったのが、骨が溶けたような骨身に染みるかにねっとり寒寒ともしてそうで、月影への渇きなんて始めから何処にだって煌めいてそうで。でも自ずとな微笑みは絶やさずに、絶やすのを許されないかに。あぁこれっ切りなんだなって、微笑み自らが微笑みにうっかり微笑めば、その姿はその儘にそれっ切りで、後はも

う隣の翼を生やす背を向けてる姿に従うしかないんだなって。で球は？あぁぁ球。って言えたにしても、これっ切りって事？知らない、きっと知れなくたって知れない切りに知れもしない儘、それっ切りかなって。でもそんなの、光りの暈みたいな翼を生やすガラガラを振る姿には、すっかり見通されてて、それを分かって、球を投げ付けられた姿は、その球をどうして良いか分からずにも、その分からなさを胸に留めさえしてれば測り知れないに決まってる成り行き任せで良いような、それも、それより悪くなんて無さそうに、なので球はそれっ切り一重の薄衣の裾辺りをフラフラ浮かんで纏い付くような儘で、それに目を凝らすのは、ガラガラを振る姿を挟んで、体の向きを他の何とも違えてきっちり間違えずに心を配ってそうな立ち木を振る姿で、刺すような鋭い目付きは俯く儘、高く振られるガラガラに激しく振られる立ち木の先を湿っぽく輝かせながら絡ませ、いやまるで違って、そう見えて仕舞うのは振られ過ぎて幾筋にも裂けて禿びてボロボロの立ち木の皮の破れ目から香る匂いのせいで、それも、木なら木の薫りな筈が、根から生えてた自らを態とのように酷く嫌うかに、山の森を擦り抜けた明るい風の孕む澄んだ硬い光りを押し詰めたような薫りで、ならそれは、ボロボロの立ち木なんて役に立たずに捨てられ、替わりに、蜘蛛の糸にこれでもかってガラガラは絡みに絡まれ、山の向こうまで抜けるような空の色を煌めかせる丸丸とした蜘蛛が忙しく働いて、ガラガラを生き物を殺し

たいみたいに締め付けてそうかな、って、球を裾の辺りにフラフラさせてる姿に、そう見せてそうで、すっかりガラガラは蜘蛛の糸にくるまれ、ただその糸の色に筋を入り組ませた鏡の盛られるように膨らむみたいに輝くだけなら、その鏡みたいな輝きを欲しかったんだって、球を裾の辺りにフラフラさせてる姿は、欲しかったそれを見付けた嬉しさに、立ち木を振ってた姿に石みたいに透き通った弾む声でも掛けられたかな、立ち木を振ってた姿は、捨てた立ち木の替わりに、片端に大きな結び目の有る石みたいに重い必ず斜めに傾く短く切られた紐を隠し切れない豊かな胸に慣れた手付きで乗せ、その結び目を、尖った鏡の欠片みたいなまた一際鋭い目付きでせっせと解いてて、球を裾の辺りにフラフラさせてる姿は、あぁそれって、この私の為なんだ、って、それ声だったら酷くか細くかに思えて、でもそう思えればそんな私の為ってのから逃れられずにすっかり囲まれてそうで却って有り難くもなさそうなら、身は嫌でもそっちへ捻曲げられる、そんな。の、そっちなら知ってる、って、球を裾の辺りにフラフラさせてる姿は向きを変えるしかなく、その向きの先が、ここまでのそっちと違うし少しも似て無い、でもそっくりに違いない、だって、そっくりそっちへ三つの姿は移って行けるどころかもう移って移る前と同じ息を死んだ振りみたいにしてる、そんな、そっちで。いや、そんなの、そっくりその儘違う、だって、そっちの三つの姿は皆俯いて即かず離れずにも互いを疎ましそうに、

出来ればもっと離れたそうで体の向きも常に心配りしてるかにバラバラで息なんて吸ったた切り胸の音もさせず、真っ先に、球を裾の辺りにフラフラさせてる姿は、球を見失って薄衣を纏うだけの素っ裸と変わらない寒けに鳥肌の立つ身を傾かせるけど、そう傾かせるのは、その傾きの掠める辺りに酷く柔らかそうに据えられた箱の形にしても箱でだけは無いのは箱の形なんてしてちゃいけない位柔らかさなんて知らずに柔らかそうな、なので箱の形なんてでっち上げに違いない、って見えるしか無く箱の形な、その上に、それ一つの独りそれ一つなその身が仰向けに裸でも無く何も纏わず、きっともう何も纏えなくてそれで裸にも成りようはなく横たわってるからで、なら傾きは僅かでも、ずっとその僅かに傾いてなくちゃいけないみたいに身は軽軽と空と繋がってるみたいに浮くように強張って。でもう、あぁぁ球。って言える何も無いんだ、って、傾きに僅かに抗うだけでまだ知らない傾きまですっかり薙ぎ倒そうかって俯くと、さっきより更に湿っぽく脹らんで搦め捕ってる蜘蛛の糸の塊にしか見えない姿のガラガラが、そこを動かず激しく転げて自らを床に擦り付け、きっと空さえ水さえ聞いた事も無い、なら擦り切れて掠れた口笛の音に違いなさそうに、床を震わせ響かせ、紐の結び目を解いてる姿の鋭い目にだけ、ガラガラの周りをその響きに纏わり付いて独り転げ回る透き通った球が一つ映れば、その響きは、棘だらけの撓る枝の隙なくびっしり絡んで絡むに輪を掛けて囁き合うみたいで、

それに埋もれそうでも構わず球は転げ続けて却って枝を次次に身の内へ巻き取ってそうで、そうか、それでもう、あぁぁ球。って言える何も無いなら、球は何かそれで球が球と名付けられた時からの望みでも遂げてそうで、結び目を解く手の力は曇る水でふやけるみたいに抜け、結び目はすっかり解け、紐はその傾きだけ残して伸びたそうに波打つように捩れ回って、球を見失った薄衣だけの姿を縛りたそうで、なら、って、知らずそう分かってたけどねって顔で、薄衣だけの姿はその縛られて行く儘かにそこに背は伸ばして跪き、従わされるなら従おうとも祈りたいようでも祈るのを許されないかに獣のような目を白黒と尖らせ、そんなの望んでなかったと恥じるかに瞑ろうにも瞑れず。替わりにか、紐を解いてた姿の鋭い目は、きっと曇る水で洗った顔は溶けて流れたかで目の痕さえ無く真っ白な額は白過ぎて周りを映して黒黒と艶めき、でもそれを酷く歓んでるかに声にも成らず高い笑いは艶めく黒を醜く真似て止まりそうになく苦しくて消えたくても消えられずにそれをまた歓び尽くして尽くし切れないかで。そんな姿には疾っくに背を向け、薄衣だけの目を獣のように尖らせ跪く姿は、黒白と暈を増して右左ともなく寄せる曇る水の腿まで浸かり、祈るのを許されないせいか腰は骨を砕かれたかに崩れそうで、見付からない球のきっと水に潜んでるなら更に水は寄せて腹の下まで来るしかなく、球は、腹の虚ろの腐って虚ろに閉ざされたような匂いに惹かれ、なのに何の匂いもさせない捩れた

股の穴に怖ず怖ずと吸い寄せられ、こっそり身を沈めるみたいに穴に呑まれる振りでずっと閉じてた穴を事も無げに分け開き、それを吐き出そうと波打つ狭い中を逆さにまたその逆さにその波に絡み損なって滑り回るように進んで、行き止まればぴたりと柔らかくやっと瞑れた目のように曲がって、その曲がった身の内に球そっくりの球を孕めばその球も自らを球と証すかに曲がって、その曲がった中にまた球が見付かりそうで見付からず戯れに曲がった身を直そうと球とは似ない角程透ける角張った泡でも噴こうかって。それって、もう、予め望まれた翼を無くしても水の暗さの幼さにも穢れない獣に見せ掛けた蜘蛛の幼い姿をして、そこに孕まれてないか？って、誰が思うかって、球自らの他に無いなら球でだけは無く、なら、横たわってる独りそれ一つなその身しかないだろ、って嘘を吐きたいのは、さも恵み深そうに光りの暈みたいな翼を大きく拡げてそんな務めを誇らしそうな姿で、それは独り、独りそれ一つなその身より向こうに背筋を好きに伸ばしただけ背も伸びそうに爪先立って、独りそれ一つなその身の手前で、裸を恥じるのを誇るかに翼の光りを少しでも多く浴びようとまた背を伸ばして跪く姿を、直に終わる務めのように楽しそうに今ばかりと見下ろし、その吐きたそうな嘘が吐かれたか、薄衣は剥がされ跪く姿は裸にされると、何を孕んでようがそれに自らがそっくりだって思えるしかなくて、水嵩は更に増し、身がいっそ流されればって、でも祈るのは許されないなら、背

を何処までも細っそり丸める積もりで祈りたい心を高くへ丸く拡げて放り飛ばすかに眠り込むしかない、その姿は、うっかりとも球そっくりかなって、薄っすら甘く望みながら。でもそんなのだって蜘蛛が許さないよ、だって私が蜘蛛だもの、ってやっと分かったよ。もう、えぇ？私、なんて驚かないよ。でも糸なんて吐かない、巣を編みもしない、屍の姿で水自らも見逃す水の端に沈み掛けてぬるりと溶けそうにでもぬるりのせいで溶けそうもなく虚ろな中に浮かんで嘘そっくりな姿を晒してる、だって、虚ろな中なんて何も浮かないし嘘も嘘も無いも無く、なので、そっくりな何も嘘そっくりな嘘でも無いで、そんな自らの姿へと、そんなの見て取れる筈も無く、お淑やかで幼げな眼差しを注いで、嘘の奥から噴かれたでないなら嘘そっくりに違いない角張った泡に映る白黒と黒白の間を惑うように擦り抜ける艶めきが、曇る儘透き通る水そっくりな、嘘じゃ無く、空より古い月の色を内に潜め、ずっと鳴らされて来た響きの今初めてかなって真新しい儘に古びない口笛に靡く紐みたいに、でも直ぐに丸ごと結び目に成りたそうに捩られて、あぁぁそれを捩ってるのって、あのガラガラの、何だろう？音でも響きでも転げる姿でも無いなら、いや違う、ガラガラなもんか、蜘蛛の糸で絡みに絡まれて鏡みたいに輝いてる中からは、蜘蛛の糸を何処まで解したって何も出て来ないに決まってようから。って事は、糸は幾ら解しても解し尽きずに、その中の中はまたその中で。アハハ、そんなでっち上げで

私で私を誑かしたくて、その為に蜘蛛の糸も鏡みたいに輝こうかって己を欺いて、ならそんなこんなを鳴らすガラガラなら、足元でチョロチョロしてそう、って誰の足元？独りそれ一つなその身の、だって他に居ない、なんて言ってみたって、ガラガラの予め見失われてるのを痺れるように分かるしかないのは、裸にされ跪く姿しかなく、だって他の二つの姿は、きっと予め見失われる前までで戻れてそのガラガラに身を籠もらされ、もう何の務めも終わったよって、しれっとガラガラの音でしか無い音なら鳴らせるかなって安らってそうで。その安らいを見届ければ水も引き、引いた跡は曇りに渇いて、その渇く儘に曇り果てて何を曇らせるも無く。そこに裸にされ跪く姿は、そうして独り残されるなら予め許されてなかったかに裸でも無く跪いても無く、ならどんな姿でなら居られるかって何の姿も痺れる処まで、頼れるのは他にないかなって水の幻を、黒白白黒と分けて璧るようにじゃなくて、ただ裸なだけは変わらないって、そう思う心までを裸にしてその裸の白も黒も撥ね除けるに導かれ、いやまさか、もっと違う、でももっと違うだけ近付けてるに違いないかなって、何に？知らない。それより、独りそれ一つなその身は、横たわってなんて無く、なら重さの無い頭を浮かすように身を起こしてそうでも姿は隠す儘に、裸でも有るか無いか跪いては無い姿の側に、足は穴の開いたような静けさの重みに掴まれてるみたいにその儘に、身を寄せようとしてるに違いなく、だってその息の匂いを

月の無くした色を滲ませるかにそんなの疾っくに懐かしくなんて少しもなくて却つて懐かしげを弄ぶかに香らせ、その少しも欠けても傷付けられても無くて冷たい角張った小さな片足の強張りを自ら撫で摩って、でも撫で摩ってるその片手の動きって、それ、断たれた踵の断たれて剥き出しの黒い骨が艶艶と、断たれてないかに丸丸とした形に沿ってて、それを嬉しそうで。あぁぁそんな片足をして舞うも転げもせず走り回れて歯止めの利かないのを舞い転げるかに熱く湿った息を弾ませる獣達の底の抜けたように数え切れない足音が、泉の底を揺らす遠い浜の波音の丸い石の中に響き籠もるように聞こえて来ないか、って誰が言うかって、独りそれ一つなその身の背の下に独り進んで水を運ぶ、山からだって隠れてたなら幾ら水が湧こうと平べったい泉に違いないその底で、翼を生やして跪く獣でだけは無い目を瞑る幼い姿か、石より硬そうな、でないのなら、その姿にそっくりな蜘蛛の私にチューチュー血を吸って欲しそうな、あぁぁ球。いや違う、なら、あぁぁ球。いや違う、で、いや違う、あぁぁ球。いや違う、にそっくりな、そのそっくりで、にしても、その血を吸って欲しそうなそのそっくりには、吸われる血の匂いの影さえ無く、いや、なので、獣達の足音の聞こえて来ないか、って、直ぐその、ああ聞こえるさ、って答えに渇いてるみたいに、あぁぁ球。って、叫びたいのを抑えてるようで嫌になる程そんなの叫び疲れてて、何の耳にも聞き取れないかな、でも却って丸い石に響き籠

もる音の中に籠もれてそうかなって。そんな無くされたとも知らない月の色みたいに甘い望みは血の匂いでも吸えたみたいに薄っすら楽しいね、って、その楽しさに乗せられるかに蜘蛛の私は、影を脱ぐより容易くさっさと蜘蛛も私も已めて、あぁぁ球。いや違う、なら、あぁぁ球。いや違う、で、いや違う、あぁぁ球。いや違う、にそっくりな、そのそっくりに、ずっと孕まれてたような痺れに成り損なうかに痺れ、その痺れだけの通り抜けられる処を通り抜けたか通り抜け損なうと、いや、じゃなくて、そんな処は何処にも無くて痺れが痺れを通り抜け損なって、その痺れを、断たれた踵の断たれて剥き出しの黒い骨を内へと捩切るように身に孕み、それごと、独りそれ一つなその身の匂いの噴き出す、血の匂いの影そっくりに歪んで窄んだり延びて丸く脹れたり誤ったかに赤らめば真っ青に艶めく裂け目の平べったい中に独り挑み掛かるかに浮き立つのを泉の底に見付け、ただ見付けた儘に何もせずに済みそうに無くして忘れたものを弄ぶかに微笑んで、その微笑みの、何もかもしなければならない処へ導かれる儘に、あぁぁそんな蜘蛛も私も已めた痺れを孕む身なら身でも影でも無くに、その導かれる儘で居られようかって、そんなで。そんなそんなを、蜘蛛も私も已めてるのにそんなの知らぬげに蜘蛛の私の事みたいにその影さえ私の身を裏返した袋みたいに撫で回して嬉しがるかの独りそれ一つなその身は、その独りを活かせば空より遠くの、でも空より遠くなんて空の直ぐ先で然して遠

くもないんだけど、何でも纏えて、黒白も白黒も一つに、なので何の色も知らなくて撥ね除ける光りさえ幾重にも纏えて、でそんな何でもをそれぞれに、それに見合う、泉の底から獣の息も凍らせるかに冷たく吹き上がる風への靡き方を撫で付け塗して纏ってて、それですっかり裸な身を隠しようもないじゃない！って笑いを抑えられず、独りそれ一つなに成るより前から他の何が何に成るより先にずっと笑えてたって分かる、その身を笑わせるものが、何処にだって隠されてるのを何処にだって見付かって見付け尽きず、それをまた笑える、だって裸なら何も纏ってないもんね嘘そっくりでそっくりも嘘なら嘘でもなくに裸な嘘の嘘かな、って、裸で有るも無いも嘘の嘘も、そんなの孕んでる痺れの僅かな傾きの程程さ程の事で、それで笑いは、アハハって声の形に成らず裸みたいに形も無いなら影のきっちり揺らめき定まって晒されるしかない儘に、独りそれ一つなその顔に、泉の片目にだけは、だって泉にしたって同じ明るさが湧いて泉で、はっきり見えそうな明るさを、水を失って乾き果てた空への渇きみたいに、あぁ懐かしいなんて知らないし知らないが何かも忘れた、って言って欲しそうに湛えてるよ、それだけは確かでしょ、ってね。それを、見付けたよ！って、あぁぁ球。の替わりみたいに声に出来そうならしないけど、その何処へか傾いて楽しく消えたなら消えたかも知れない声そっくりは、独りそれ一つなその顔の明るさが真っ直ぐ前に見付けて拡げて仕舞う軽くてただ丸そうに傾く

眩しく光る海の姿を、角張った泡の一粒に収めてその潮の流れを光りの硬さを逃れるように深く重く曲げ、泉の片目から、その顔の明るさを始めから見えてなかったみたいに解き放ち。あぁぁ軽くてただ丸そうに浮きこそしないだけで海の姿なんだよ、あぁぁ球。って、だってどっちも、石が透ければ光りばかりみたいに眩しいじゃないか、って嘘そっくりの、そのそっくりって、内へ反ってて艶は隠して切れ込んで来る青空が透ける石をずっと探してるみたいにざわざわと、嘘に決まってる青空が青を拒むみたいにねっとりした音さえヒラヒラと滲みそうなら、何がそっくりにそっくりも、その泉の明るさにも映らない顔の明るさに打ち負かされようなら、何が打ち負かされるも無しの何の色も知らない光りの硬さより強い必ずそうと決められた向きの傾きに、独り生き残るのを強いられるみたいな片足は捩れて折れて、独りそれ一つなその身が、嘘にも成らず何時裏切るか知れない海なんかに呑まれないよう、却って危うくかも知れずにその身を浮かして海だろうと川だろうと泉だろうと流れる水には斜めに起こしてる姿の儘に固めようとされるなら、笑いも顔の明るさも晒された裸を恥じるかの獣の吐き終わって次の無い息みたいに失せ、それ一つの独りそれ一つへと、決められてたみたいに一つの裏へ裏へと一つなんてその度に潰して潰して、通り抜けようとする光りは悉く捩切って痺れを孕みようもない、まだ見付かってない透ける石のように忘れ果てられそうで。あぁぁ、何だっけ？って事

は球。じゃ無しに、なら、その、あぁぁ、って少し窪んでて、じゃないな、あ
ぁぁがそれを窪ませてる、の、それって何処の何？なんて有る筈無いよ、だっ
て、その何処って、一つの裏へ裏へ一つとは違えて必ず決められてて、そっく
りもそのそっくりもただの出任せさ、って、それはきっとその窪ませた処の影
かに艶と擦り込まれるかに窪みに磨きを掛け、窪みに絡む嘘も嘘そっくりも一
つっ切りの影を捲った裏へと流して消せば、そっくりは嘘そっくりに裏返され
た袋みたいで、じゃないな、袋でだけは無く、それできっと窪みも必ず決めら
れた通りに曲がって曲がりを直され、袋でだけは無い袋そっくりかに裏返し返
された中へ、その待ち望まれた危うさを喜べも出来ない心を、瞑る儘の瞼の裏
に湧く棘棘しさで眠れなさを刺すように傷付け、それで嘘でも眠れて痺れるな
ら袋の内はさぞザラザラと苦かろうさ、って、折れた片足だけは流石にその折
れてなんてないのを分かってるねっ、て、独りそれ一つなその身が、微笑みそ
っくりに窪みの底の石の味そっくりな息をこれっ切りとそのこれっ切られた後
の始まりかに呑んで、それがザラザラより苦いなら苦み尽くして沈めて裏返し
返そうか、球。とは違う必ず決められた向きに有りもしない球の形へと丸めら
れようか、曲がり直したのも忘れ、身は、一つと無ししに、まだ光りも知らず
透ける石の味をその透けた長い時を写すように裸すら纏えず、平らかな胸が裸
とは違ってなだらかに拡げられ、月の失われようのない匂いが黒も白も無い時

のその石かの長さに沿って香って、乳の移り香のように輝くなら、（二〇二〇年四月六日）

（穴にしては見上げようと…）

穴にしては見上げようと見えなくも拭い残された煤に塗れて抜かりなく真上へ滑るように這い上らされたか、もう明明と夜かも係わるかに星を燻ませて空の澄んだ濃さの軽みから逃れられず、そんな相応しくない姿を隠すしかなく隠し損ない損ねて剥き出しに高過ぎるなら迫る山の頂と競うかに吊り上げ晒され、他は夜に濡れる遠い音を真似てつるりと切り立つ石に陰は悉く擦り切れたかの白くに塞がれ却って拡げられ、その自らに惑って常に薄明るさを絶やさない闇まで呑もうかの構えの道を決められた通りに通って、その穴を黙って抜けるように、それとも疾っくに底の抜けてるのが穴で、成り行きはその抜ける儘かなって行き果てもしたか、ならもう穴じゃないのかその抜けたので穴か、どっちとも構わなくに黙ってる内も、その内へ一つ限り今限りに残された息を塞がれそうに一つ限りの初めて抜けよう穴を真下へ滑って降りる儘でしかないのは、

左の踵の剥き出しの骨の痛む憶えをズキズキと甦らせては誰の手にも触れさせない玉と浮かせた白くだけ透けて白くないのを晒す身を傾げ、決められた浮き沈みを軽軽と繰り返すのを已めない箱に収まるしかないからでも数えられる限りは独りじゃない、先ずは、その限りの限りには、箱ごと抜け穴に嵌め込まれてようと。抜け穴だったんだな、だって抜けられたからね新しく動き始めたばかりの時にぴたり沿おうと時を過ぎたからは、それ一つ限りな初めてに。それとも、それ一つ限りな初めてになので抜けられて、それで穴かと。かな、きっと違う、何を違えてるか見えないので、それで、きっと、に。きっと、って何処の何だっけ色を着けたら、何かがどうにかできっとなら、きっとの何かときっとのどうにかを何処からかって何処なのか色は失せ、ここからでは行き着けなさそうを頼りに探して来ないと。知らなくにも、きっと、そんなの出来そうになく色は余所から溢れて色でも無く。だって抜かりなく隠されてた抜け穴なんてのは、それを塞ぎ開いた白ごと忘れて仕舞われるしかなく、もう消えて冷たい透けるばかりな処を、そんなの何の処で有る筈も無かったなって、そんなそれへ言い聞かせたくにも振り返るのは許されず背にしてるのではね。穴が吊り上げ隠した白に囲われては逆らえずにか迎えを頼んだからには迎えに来るのは見ず知らずの盛りの声だけは牡とは知ってたし、その迎えを迎えるよう頼んだようなからにはそれを迎えて直ぐに送り出すのは見ず知らずで無いにしても

無いだけの、なので見ず知らずとも余り変わらない擦り替えられたでもなさそうにか何処か初めて見るかの名だけは牝とも知ってたし、どっちも毛こそ当たり前に剃ってようと剃り跡の牡の白っぽく膚に肉を余らせた間抜け面なと牝の黒っぽくっり澄まし見肉は引き締めてぽげなの如何にも態とらしい獣なら、目を交わし取か交わし損なって掠め合っただけでも行き成り激しく憎しみに昂ぶって息のたし入れの距たりをきっちり磨り潰して交わったに違いない、その薄明かりに照らされる時まで磨き潰そうかに、その継がれ直されて行く息と息の互いを冷たく撥ね付け合う音なら箱の四隅に木を括るように聞こえたかで、拒み合う息と息の交わりに抜かなのく生えた耳には。なので数えられるんだな、でも見ず知らずさ、その交わりの数を数えられたって目は背けられ直ぐ様数え忘れられ、その交わりも穴の奥に置き去りの再び目には甦らないと知れる白へと知らず消え、あぁ白って牡牝の捩れて耐えられなげに混じる行き成り過ぎて酷く切り裂かれた匂いを包み損ねて走り去るみたいに白なんだ、って。掠め見るのもまた許されずそれも背に、独りじゃ無いって独り、かに、いや違いなくに、穴は抜けてもまだ降りるしかないならその見通せない高げな直ぐそこまでなと物足らない暗みの傾きに投げ遣りにふと飛び立ちたくも足はどっちが右か左か片足ずつ細紐に結ばれた小石みたいにふわり浮き掛け、宵闇の丸っこく寄って来る拡がりにじわり圧し落とされてまさか崖じゃないよなって酷く険しそ

うな下り坂に身を前のめりに勢い付かせ、ずっと獣の交わりに憎しみに我を忘れた獣を間に立って宥めるかの嬉しげな声を、嬉しげにでしかないのを今更に半ば悔やみながらでも全て思い通りに事は運んでるんだ何故か、って掛け続けてたのを恥じるべきか恥など知らないと知るべきか、箱の四隅に尋ねたかったけど箱は穴の終わりに嵌められた儘、なんだけど違うんだ、って言えるならその違うように見えて来るのは、塞がれた重そうな、重そうなのは中に収められたものがこの身に痛みと繋がって軽そうな、な、そんな箱が、こっちからに決まってる筈が見ず知らずでも見ず知らずとはずっと知れてたって知れるかのこっちでないからにはそっちからに、いきり立って自らに突き刺さろうとしてるみたいに寝かされた、思いも寄らない剣の形に、その自らに立ち塞がる様で。立ち塞がる？な筈ないのは、坂をそれが急ぐかに真っ先に下るからだけど、あぁそれで突き刺さろうとしてるみたいか色色後付けだけど、って、それに従うしかないなら、そんなで、頑なに。の頑ななのは、それがもう穴に嵌め込まれた箱に運ばれた箱なのを逃れようはないからに違いなく、なんだけど違うんだ、だって違いなかったら、それで済んでるから、こんなの。そのこんなののせいで、抜けた穴もきっと真下に滑るように抜けなきゃならなかった、とか、違うか違いないかなんて抜けた底も何処吹く風って。アハハ、風ならここにささやかに山颪は吹き初めてないか、こっそり冷えても根は生温く、だって見窄ら

しく抉れた軽そうに寒そうな影ばかりな頂は直ぐ斜めに見上げられ、その湿っぽくぼおっと暗い生温さだけを頼ろうなら、それに誘われるかに更に嬉しげな独りで交わろうって、でもしっかり牡牝へ向いた声は止めようにも巳まず、なのに独りとも交わり損ねてこの身を寄せたり距てたりの獣のスカスカの声色に成り掛かり上擦って、それを箱の形は咎めるみたいに剣の形を収めて何処か平たく丸みを燻みの艶を矯めるかに帯びて白みさえ乗り移ろわせそうに、って、どつちから？って振り向くと、ぽつんと独り、もうすっかり小さく闇に浮かぶのを知り尽くす牝は穴の終わりの直ぐ外の透けた枠にぴたり収まって目を伏せてじりじりその終わりの白みに馴染んで影も無くして平たく何処か丸みの儚げだけをこぢんまり帯びて、その姿のゆっくり小さく逸れて行くのって、他でもないそこからこんなのが始まりましたって下手な芝居でも打ってるのかな自らもきっと可笑しくて何時もの遣り口を眉根を寄せて晒してるよな、って少しも笑えないどころかこの先の笑いまでこっちは奪われたようで、あぁ振り向いちゃいけなかったんだ、あんなの忘れられないよ、これまでどんなだろうと牝の姿なんて一片の薄っぺらな青い炎を吹き消すように忘れて来られたのに。そんな筈ないよ、突き刺さるだろ、その、ないよだけど、まるで違ってる、先走り過ぎてる、逃げたいのかな、って何が？いや何が？じゃなく何から？だろ、いや、何からなんてこそ分かり切ってて、それで逃げたいのかな、なんてそれ、

空空しさに身を捩りたくなる、かな、だけど、いっそ捩れるだけ捩って、くるりと振り向き戻して、で、白みさえ乗り移ろわせそうな声を呑めないと分かって呑んで呑み損なった声を剣の形に纏い付かせたくて形は怒りに満ちて静か過ぎるようにただ冷たくて纏わせられずに、何で箱の形は選りに選って剣なのか、そんなの知れたところで、そうしてその形の剣を幾ら突き崩せたってその崩れる形こそ剣の剣自らの形を削いで剣な形で、その触れられなさばかりが剣な形なんて、剣と同じ傾きの箱の上辺に一刷き兆すだけの見せ掛けに決まってて空空しく、呑み損なわれた声は繋がれてその見せ掛けの剣な形を上滑り、嬉しげは止めようにも已まず、だって、牡も牝も獣じゃ無いからね、ほんの戯れさ、なら端っから牡も牝も作り事で、それでこいつら牡と牝とに背き合って、交わり絡む二つの声は出しなによろよろ尖った山颪に真上から切り分けられ、迎えられた一つはまだ剣を追い、迎えた一つはもう剣を棄て、二つに挟まれ、その二つの繋がりを裂くように裂かれる、あぁぁそんな声なんて、悔やむさえ儘ならず、いや良いよ、だって他に無い、他に無い程頼れるものも他に無い、なので、この、他に無さは手放せないぞ、って、手はもう何も掴めてなくて、その手は他に無いかどうかも何の手も無さそうなら、この他に無さは、何処へとも放られ撒き散らされてる、の何処へとも、なんて、ほら、そこここへしか無くて。なら、そんなそこここがこの他に無さなんだ、って、前を向けば、にして

も、そこここにどっちが前も無さそうなら、そんな前のこの他に無さは、何処へ消えるも無さそうで。で、何とか、先走り過ぎたならその後ろ姿の見える辺りまでは追い付けたかな、って、もう振り向き戻したのを戻し直してそうで。も何も、そんなのどうだって構わなくなってるなら、そんな事で。でもまだ何も始まってない、いや違う、寧ろ終わってなくて、だって始まってはいて、でもそれを繰り返し始め直さなければならないなら、始まりの終わりを次次に熟して行かないなら、始まりから失われそうで。でもそんな始まりなんて疾っくに失われてるさ、だって、やっぱり始まりしかないじゃないか、って、誰が躊躇い叫ぶしかないんだっけ、こっそりとも取り消しようもなく、痛ましさを覆いようもなくかに、だって何だって覆われてるし。いや、そうにしても、やっぱり先走り過ぎてる、逃げようなんて無く、なので先走りようなんて無く。って、何から？なら、もうはっきり言える、あの箱だよ、でもどの箱？いや、どの箱とかじゃなく、箱の剣な箱なその必ずそうで無さの為に箱な箱の一つ限りの箱でしか無さ、それに囚われるしかない一つ限りのこの身を縛る、四つ。見付けたぞ！なんて言うのも虚しい、箱で無くったってさえ始めからここに四つと決まってる四つ、それは目が四つってすんなり数えたいけど何故か巧く数えられなくて、それで四つ、箱の四隅じゃない、隅なら上と下、角は四つで八つ、箱に寄り添う姿から数えるならその通りで、だって箱を運ぶ箱に箱ごと運ばれ

る姿は四つで、その目は八つだからね、でもそんなの数えたくなくて幾らでも身を切られる程に繰り返し数えられるのから逃れたくて、それで四つの内の二つを牡と牝にしてその目の生臭い四つを除けられるなら、除けられない目は四つ。でも牡牝の四つ目とはまるで違って、やっぱり巧く数えられない儘に、それで四つ。それとも、四つとも数えられないのかな、二つまでは数えられても、いや違う、二つまでは数えるまでもなくなので数えようもなくかに、その二つの数えるまでもなさに次の二つが何処へか距たるしかなく、その距たりのせいで二つと分かってても二つって数じゃないかに数えようはなく、ってなら、それで数えては居ようかね。そんな、二つと二つで四つ、って数えられないんだよな、って、そんな四つ。でも、なら、それって四つじゃないかも、に四つ。違う違う四つじゃないんだ、四つに成って仕舞うから四つじゃない、の四つ。あぁぁ何で四つに収まろうとするんだろう、そりゃ四つだからさ、の他に答えは無くてその四つから目を背けるしかなくて、四つ。うーん、なら良いよ、その四つとやらを一呑みで、その四つに収まるか纏まるかの一つで。でも二つと二つの距たりは二つを二つにしてる儘だよね、それで二つを二つなのもその儘に、それで収まり纏まる一つに四つかなって。いや一つとか四つとかの先に、その、かなって、のがきっと間違ってるね、見付けたかな、その、かなって、の間違いで、どうにも四つに一つで。でも、その、かなっての間違いようが分

からなくて、分からないなら忘れるに限る、って何を？四つを、それとも、四つと係わりさえなさそうな忘れるに限る分からなさをうっかり呼び出して仕舞ってないかな忘れるとかじゃなく、いっそ、その違いなさの耐え難さを汚いものみたいに四つに投げ付ける様をはっきり色でも着けて思い描くなんてどうかな。それとも四つは疾っくに先廻りして、もっと汚いとか。そうしてその汚いに窮まりそうなら、あぁ汚い、って、その呟きは数えられるなら、きっと四つかなって。でも汚いが四つなら色は着かない、だって二つと二つは余りに距たってて。あぁなら、その距たりが数を跨ぐかに四つなんだ、四つの汚いなんだ、なら四つなんて数えるまでもなく、ただ汚いだけが、汚いだけでは距たりの向こうにでも隠されて仕舞うのが嫌かに、色も着かない汚げに、見る見る取り囲んでるよ、目を背けようもなく、四つを四つに。その汚げの四つに取り囲まれる四つは、四つだろ、ほら見付けたよ！こんなの見付けるまでもなく始められに決まってて。ならもう、独りで行けるよね、真っ直ぐ、そうさずっと四つ目だったんだぞ、って声を立てず顎は骨を砕くかに痛いと分かって叫ぶかに動かない舌と唇に止めを刺したいかに呟き呟き。そんな独り身をどうしよう、持て余しも持て足らずも出来ず、なら独り身なばかりに独りでは居られずに、独り身でなく。でもそれってどうにも目を背けようもなく独りに成り損ねたからで、どうにも独りで。あぁそれで、玉と浮かせた白くだけ透けて白くないのを

晒す身に身を褰し。その背けようもなさを振り返りようもなく、だって坂はもう湿ってがらんと広過ぎるせいで星の光りを重く這わせて流すように益益拡がるしかないせいで、その濡れる夜ごと刮げるように平たく低く下って行く、ここでだけ失われた夜の音を全て磨り潰してまた広くへ酷く狭そうに向かって。その広い中に、予めたった一つと縋るしかなく残して来た、どうにも決められてる行く先を指し示す四つ、でも角が取れて斜めに丸くて、それってどう見ても三つなんだけど、「おぉそうか、三つさな、覗いて見てはどうか。」もう覗いてるよ、縦と横が斜めを擦り抜けて交わって、息を合わせて一つを指し示してるかな。でもそう分かれば、その一つが縦と横を交わらせて三つにしてるとも分かって、そう分かれば三つなんて風に飛んで折れた矢印みたいに要らないみたいで。「まさか。三つを要らないお前から三つを取ったら何も残らんよ。」なんて私の言う事をうっかりぼんやり耳に入れて仕舞うんで、それで残らないだけなんだけどな。で、お前には、一つが指し示す四つしか無いって事なんだな、私がそう決めたからには。だって私はお前が産まれた時の事だけはきっと知ってるよ、見てた訳じゃないけど。お前は足から産まれて来たんだな、腹の中で、その種を仕込んだ男の罠に嵌まって縛られてたみたいに、右左ぴたりと揃えた足は間延びして流れるようなくの字に折って。そんなのって、足だけ先に、ぬるりと大きな環の上を延びて行くみたいに育ってなくちゃな。でお前は、爪先

を内へ向けた踵を掴まれ、控えめにそっと裂かれた夏の草原のような青い腹から引っ張り出されたんだけど、ぴたりと揃えたくの字の足を環を滑り落ちて行き処を無くしたかにくねくねさせ、それって直ぐにその足を収める容れ物が欲しいんだなって分かってても、足は跳ねるみたいに曲がり曲がりしてて掴めないなら容れ物は後回しでだな、先ずは足を鏡に映して見せたんだよ。だってそんな足なら足自らにその姿をさてどうするか、どうとかして欲しいよな、って事かな。そしたらくっついてた足は足枷が外れたみたいに膝から下が離れて右ばかり跳ねるように前へ出て左は赤い足の裏を上へ向けてだらりと痺れたみたいに引き摺られ、それで足に只で乗っかってるみたいなぬるりと切れ長な目玉みたいな儘ずっと叫びっぱなしな口みたいな小さな白く透けて中はぼんやり黒い幼い体は、鏡の前に留まりながら自ずと傾いて跳ねたり沈んだりするしかなくてな、鏡の中に曲がり拗ってそのまた鏡の中に映って曲がり拗る道を映して、鏡はそれを始めからずっと憶えてるんだな。それを独りで凝っと見てたのが、誰だと思う？私かな、私じゃ無さそうならお前を産んだ女の裂かれた儘の赤黒い腹の底にべっとり生えた一つ目じゃないか。青いのは裂く前の話しでね。女の腹なんて裂いてみたって見窄らしさに嗤うしかない鬘を重ねた空っぽとその鬘にさえ嫌われてそうな黒くに平たい赤い底が目一つに従うみたいに光ってて、色も艶も匂いも無いのに、お前がそこから産まれたばかりに、空っぽは艶艶と

青を隠す黒くに、を匂わさずには居られないみたいに。私はきっと鏡を後ろから抱える係りだね、それもまだ慣れてなくてな。鏡って凄く分厚くて石みたいに重く、うっかり石かなって見直したら鏡じゃなくてただのザラザラした苔さえ生えない石だったなんて事にならないよう、それから思い切り目を背け。でもどんどん重くなって何故かって直ぐに分かったよ。お前の右左でちぐはぐな足が描いた曲がり拗る道の重さが鏡の奥の鏡のそのまた奥の鏡へと折り重なるように増えて溜まって行くって。そしたら私はそれを抱えてなんてなくて、ただ倒れ込み掛け抱き付いてるだけで、その儘だとそれと私はそこにめり込んで行くしかないんで、身を立て直し腰を落とし、それを力の限り抱え上げたんだ。なので私が何を言いたいかは、お前なら必ず分かるんだよ。あぁ思ったより軽いな石じゃないみたいだ、って思うだけで石より重くて、でもめり込んだりしないよ、だって軽いと重いを比べられたからね。私はもう白い峰へだって飛んで行けるも何も、私は何時だって、その白い峰から降りて来てるのさ。それより腹が空いてて、白い物なら何でも食べたくなってて。でも坂ばかりなら色を着けた物は生らないね、なんて当たり前さ。何とかならないかな、って私が尋ねるなら、お前は何とかしてようかね。」坂は下る広くへの先に避けようもない曲がり拗った道を、道をなぞるかに身を拗らせて踊るように進めるのは一人切りだけど、なのでそれは影が影を刻み出すみたいに何人にも連なれて、なの

でどうにも一人に、なのでその一人に群がる湧いて出るような何人もが連なって、でも一人、玉と浮かせた白くだけ透けて白くないのを晒す身で、その誰にも触れさせない身を高く保って翼を丸く拡げる鳥みたいに声を嗄らし、その先にはそれと互いを待ち殺そう、もう一つの鳥の姿が、でもそっちのそれは、丸くとは逆さに翼を拡げてる、なので拡げるとも逆さで、でもその刳り貫かれたかの虚ろを鋭く煌めかせる真ん丸な二つの目だけは、ずっと慣れ親しまれてた石みたいに動かない笑う目で、なので鳥は笑わないので鳥の目じゃなく、こっちが何を話し掛けたって撥ね付けて来るに決まってる、笑ってるようなだけさって笑いながらに、その左目に映り込む灯し火の連なりを数えれば、七つ、右目に映り込むのは、六つ、ならその一つ違いの狭間を、曲がり拗った道はまた曲がり拗られるんだって、そうと分かれば、どう曲がり拗ろうと道は真っ直ぐにしか見えない、そうとしか見えないだけとも分かりながらに、また行き止まりよりも狭く。それは良い兆しでも悪い兆しでも無く、だって兆す程の事なんてすっかり済んでて、笑うしかない程に笑えずに、の笑えずも笑ってるようなだけの笑えずで。その隙を突くように斜め後ろから聞こえたかなの声は、真っ直ぐに見える道の行き着くよりもっとずっと先の風が風を叩く甲高く沈む声に吹き矢のように吸い寄せられ、残されたかのこの身は一から曲がり拗るのを遺り直すみたいに、右足は跳ね左足は足の裏を上へ向けてだらりと痺れたみたい

に引き摺って、でも足の裏は真っ白だな、土に触れた事も無さそうに、ふっくらと、こっそり傷付けたくなる程に、で傷だらけかも知れずに、何処もが治り掛けの細かな傷で真っ白かに。笑う目は目敏いよ、見逃すもんか、七つと六つの狭間に、ヒラヒラ舞うような薄ぅい刃を一片、闇を知らない平たい夜の眺めの向こうから、時を止めて夜の時がきっと送り込んで来てて、そこから何が笑えるかって笑えてみなくちゃ分からないなら、分からない切りの、その分かりようの無さを、刃は薄緑色に薄ぅく染めて、それは舞うようなからには密かに濡れて艶めく桜色を映してそうで、でも夏の終わったばかりさと、掻いてもない汗を冷やされる背中は今更驚くのも疲れるみたいに裸で、なのできっと裸は間違いの儘に裸っぽく、刃を立てて下さいみたいな、傷しかない足の裏みたいに、ふっくら真っ白で。でも背は笑う目には背を向けてるんで陰に溶けて見えない筈、って、これなら笑えるかな、の、かな、が、一片の薄ぅい刃の端を衒えて、なら、かな、は、凝っとしてたって風だって傷付けられそうで。いやまさか、風なんて無いよ、だってひたすら過ちだらけに苛苛と息吐く間もなく牡とも牝とも違う石のようにぼそりと野太い声に言い含められた行き止まりへ行き着いて過ぎた夏は燃え尽きたかに戻って来ないよ、いきなりに砕けた影で、見下ろすしかなかった暮れそうな海みたいに。なので、過ちも潮の引きっぱなしみたいに帰って来なくて砕けた影で、あぁそれで目は、慣れ親しまれてるげ

に笑うんだ、違いない、って、何が？凪の塊だよ、傷だらけにふっくら真っ白な、それだけは違いないに違いない、って、目が笑うんだっけ、違うよね、だって鳥の目だもの、笑う形をしてるだけで。でもそれもきっと違うよ、だって笑う形なら、笑う形をしてるだけで、笑いたいなら笑えるだろうからね。でも笑う形をしてる儘じゃ、笑ってるかどうかは知れない。それが鳥の目なのは、その知れなさだけかな、の、かな、が、一片の薄ぅい刃の端を銜えて、ふっくら真っ白な足の裏みたいに間違いの裸の背中に、すぅっと刃先を走らせると、細過ぎて僅かに曲がる一筋の傷は、七つと六つの狭間を早足に逃げ去って、もう色もない桜色で、その色もない桜色の影が、ふっくら真っ白から滑り落ちるなら、それを慕うかに追う刃の先の薄緑色は、その薄さを恥じるに違いない、刃先の奥の芯を紅く染め、でもそれはもっと薄ければ、そこから圧されて滲む緑は、刃先から滴りそうで緑を濃くするならそこだけ葉先で、蛹そっくりな青くふっくら尖った、水を思い切り吸って瑞瑞しい落ち葉の葉先で、そうさ、それをさっきからぼんやり驚いてて、そんな葉は、見直す程静かに幾らでも夜露に散って、縦と横の交わって指し示す一つが縦と横を交わらせての三つの内にも外にも、数え切れず張り付いてて、いや数え切れないは言い過ぎかな、数え切れないだけで数は知れてそうで、じゃ何故数え切れないかは、三つの内にも外にも数えられるのを拒むかに一つ一つ向きを違えて散ってるからだろうな、ま

るで何かに指し示されたかに、いや違う、何かを指し示すかに、一片一片が、それぞれの一つ限りの息のような温もりの向きを定め、あぁそれで風は濡れ過ぎて已むしかないんだ、って思わせて呉れる、その何かの優しさかな、だって風の已むのはこの身のせいだって、逃れようなく分かってるからね。でもそうして風を已ませてる振りをしなくちゃいけない、何故かって？知らない。いや知ってるさ、知ってなきゃ、疾っくに頽れてるよ砕けた影だよね、でもまだその砕けた影をそっちへそっちへ追える処で、坂をゆるゆる下ってるのさ、右足は跳ね左足は足の裏を上へ向けてだらりと痺れたみたいに引き摺って。アハハ下り終わってるね坂なんて、いや下り終わってるねって笑えば坂しかなく、どう曲がり拗ろうとその真っ直ぐな狭い坂を、数え切れず、でも散りも散らされもせず連なって片脚の鳥を真似て踊りながら、その坂の先の針を刺して開けたような小さな穴へ、そんな姿らは一連なりに吸い寄せられ。って、何の姿なのかな。踊りはその揃えた足音でも鳴らすなら教えて呉れようか、揃えても露の切れ込むようにずれる音の隙間にまだ始まったばかりの夜の汚れみたいに色が挟まって、穴から真つ直ぐ針を通すように吹いて来る尖り過ぎて影みたいに冷たいだけな風に微かにでも晒されれば、どれも穴に真横に挿されて眠たげな花みたいに。こんなのは夢よりもそのまた夢よりも夢だ、そう黙って呟くしか無い、なのでちっとも夢なんかじゃ無い、ってそんな夢じゃ無さの夢とも知れな

さかなって、もうこんなの繰り返し見てるし、その度にあぁ夢だよって夢なん
て見ずに見破ってるさ、夢から醒めようなんて無いに違いなくかに、って、ま
た同じなら、その夢じゃ無さの夢とも知れなさを見られずに、除け者にされた
みたいにそれを恨んで何時も、穴の上に被さろうとして被さり損なう低く震え
て波打つ平たい塊とばかりぼやける森は、ずるずる向こうへ滑り落ちそうに、
またその変わらない恨みに傷付く何時も同じ痛みを、こちらの夢じゃ無さの夢
とも知れなさへの呟きへ向けて、突き刺そうとして来るよ。あぁそれ、ちょっ
とだけ煩いな、どうしようって、ちょっとでも思えばその森の痛みは、こちら
の夢も夢じゃ無いも醒めるも醒めないも道連れに森ごとそっちへ暗く引っ込ん
で、のっぺりと穴ばかりが、その口の形を小さい儘に奥へ酷く長く延ばし、ま
た嫌でも穴に挿された花みたいな姿らは、その穴の口の中の奥深くへ、尖る姿
を見窄らしく真似るしかないから吸い寄せられそうで。でも吸い寄せられそう
なばかりって、何時まで経っても穴へは行き着けず、なんだけど、穴に挿され
た花みたいがその姿を終わらせてるんだって、すっかり引っ込んだ森の痛みが
言い残したみたいなら、足ら鳴らす踊る姿らは、もうすっかり穴の中だったり
とかね、だって夜から姿を消してるもの。さぁどうかなって、夢も醒めないも
忘れて乾き始めた唇を薄く開く儘に呟き直せば、終わるより前に花なんて疾っ
くに何時もながらに色すら無かった脱け殻で、凋んで凋んで凋み窮まればもう

凋まない花の塊は形もなく穴を塞いで穴に形なんて無いのを明かすなら、穴の口は、その花の塊を穴の口の形の水玉一つに映り込む数え切れずびっしり犇めく花の影に象って、水は減らないぞ、って、その水玉の震えで着いてもない花の色を揺らして伝えたそうで。良いよ。いや、良いも悪いも水って減る筈ないでしょ、どっちを見てるの？どっちも見てないんだよ、どっちでも見れば、風だって水をたっぷり運んでるさ、何処も彼処も水の匂いに埋まって、なら水は減らないって伝えなきゃ居られないのって、花の影でびっしりの水玉で塞がれた穴しかなく、水の減る減らないが穴の行く末に係わるらしい、かな、他に無さそうで。でも、その水の話しってもう薄皮の捲れ掛けてるみたいじゃないか、間延びしてるよ、って誰が言うんだっけ。蛹そっくりな青くふっくら尖った水を思い切り吸って瑞瑞しい葉を落とした木を、きっと古くて太くて苔生してて若さを誇るかに真っ直ぐな、そんな木をずっと探してるけど、それ、その数え切れない青い落ち葉の上に枝を張る木木でないのは端から確かで、だって狭い星空さえ狙い定めて隠す程にヒラヒラ揺れる薄くて広い葉は繁る儘だからね、瑞瑞しい儘の落ち葉は何処かからこっそり風で運ばれて来たんだろうけど、その風はきっとどんな風とも違う形をしてて、葉をここへ運んだなり水に溶けて疾っくに、って言うか、真っ先に穴へ吸い込まれたに違いなく。だって他の形の風は見上げればどれも狭い星空なんて掻き回そうって勢いで白白と渦を巻い

て回ってて砂を潰すような澄んだ音を立てて一つ一つ数えて行けるからね、切りがなくて数え切れないだけで。それはそうにしろ、その葉を運んだ一つだけ違う形の風は溶けるより水へ突き刺さって、そうして何処かへ穴を開けたんじゃないかな、これは、って一つ限りの無くてはならない、無くてはならないので一つ限りに穴な、って誰に言われるんだっけ、それ。さっきのあの声は？「はぁ？違う違う、呼ばれたって来ないよ、だって言う事は言ったからな、一言で言えば、私が何を言いたいかは、お前なら必ず分かるんだな、って事だな、分かろうと分かるまいと、そう言ったよね、それで終わりだよ。だってお前はもう、木を探してるじゃないか、それでこそ、私の話し掛けられる唯独りのお前さ。違うかな、違うなんて言える筈ないさ、だって私の言ってる事をお前は聞いて仕舞ってるからな。そこにもう道は引かれて仕舞ってるのさ、そりゃ、何の夢じゃ無さの夢とも知れなさだって道連れにするしかなくて。だってお前の足はもう、先へ進む限り森へ踏み込むしかないじゃないか。でも、森って、踏み込めなくて、それで森じゃないか、に、さも」…じゃないかないか、って言われても、どう答えたら良いのかな。森なんて遠ざかるばかりで、左目に映り込む灯し火を数えれば、七つ、右目に映り込むのは、六つ、ならその一つ違いの狭間の曲がり拗った道の拗りの傾きの刻む淡くぼやけた陰に溶けて消えてるじゃないか。いや違う、そうしてもう、森へ踏み込んでるじゃないか、って事

にして置こうか、だって森なんて見せ掛けで、長年穴の吐き続けた汚れの溜まって息をし出しただけのもので。「その通りなら目だけ鳥じゃない鳥の通る通りにその通りだね、だから言ったろ、お前なら必ず分かるんだな、って。私とお前には分かる事しかないんだから、それっ切りでな。」こんな穴と向き合えるのは、きっともう穴から出られないで足を鳴らす踊る姿を真似たいからで、真似られたなら声に話し掛けられるこの身なんてもう、戻る事はないって分かってる坂の上みたいに忘れられてようか。って、まさか。あの踊る姿らこそ、この身の足を引き摺る姿を真似て、彼らだけでさっさと騙されたか騙されたかったかに穴へ行き止まりまで奥深く、穴なんて無くて行き止まりだけだったたみたいに籠もって、だって左の踵の剥き出しの骨の痛む憶えはまたズキズキと甦り、でも踊るなんて思いも寄らないな、彼らには息の根を止めて呉れる再び陽は仰げない、そんな行き止まりが有ったからね、それで黙って弛まなく踊れるんだ、って事にしたは良いけど、そんな行き止まりへ行き止まる穴なら何処にだって、見付けたい処になら何処にでも見付かって、だって、何処にだって、必ず何かの息の根は止め処なく止まってて嫌でもそれらは有りもしない色と形を影ごと振り翳し、その黙り込もうとして却って立てられる音なら聞こえ、忘れられる程に目に幾重にも飛び込んで来て、何の音も消し忘れたから棄てて消して。いや、蛹そっくりな青くふっくら尖った水を思い切り吸って瑞瑞しい

落ち葉だけは違うんだ、だって、蛹の形の中では息が息をしてるもの、どうやら見付けたかな違いない、三つが息をしてるよ、そっと、蛹の形に守られるなら一つも四つも物の数じゃ無い、ただ三つだけが数の始めから数な、そんな三つに、あぁ夢ならここは夢の外かって、であって欲しいのにって、それもそっとに。でも、なのでそれより三つには近付けない、蛹の形ももう、くっきり三つの形を自らの内へ描き出してるに違いなくて却って目に映り難くなってて、その映り難さってその形の蛹らしさからして薄緑色の霧に滲むかにぼやけさせ、あぁ、ぼやけた形だけは、目には映したくない目は背けるしかなく。それともいっそ眠りたい、って、それ、消えはしなくてもぼやけて行く蛹の形の中へ潜り込むしかないって事？そしたら数の始めの数の三つが、楽しい話しでも聞かせて呉れるかな、って、右足は跳ねて踏み出すと、その足の動きの為に、何が産まれも死ぬもするより前からずっと待って開いてたみたいな穴に足はすっぽり嵌まって、引き摺る左足のざらりと滑って投げ出されるような勢いで身は翻り、下って来た坂の眺めが酷く暗く蛹の形よりもっとぼやけて吐き出されるようにぐるりと音を一塊に畳み立てて左から押し被さって、でも辛うじて目を、糸を引くように、三つ、三つって震えて波打って音を立てようとしない曲がり拗った道へ逸らし逸らし、息も絶え絶えかに。いや分からない、逸らしたんじゃなく、元元そっちしか見てなかったのかも、だってそっちだけは、何の夢じ

ゃ無さの夢じゃないからね、何故そう分かるかって？だって糸を引くようだからね、って何が？糸を引くようなら糸しかないけど、何の糸かって、そりゃ三つの糸だよね、ほら三つは行き止まりだね。行き止まるから三つなんだけどね、始めから、それが数の始めって事で。で穴に嵌まった右足はそれでも跳ねて、穴ごと跳ねて、跳ねる穴は、砂の中で寝てた魚みたいに目を白黒させれば、穴にも魚にも似ても似つかない、真っ新な耳と見ず知らずな箱に挟まれたかに潰れた儘に息をする四つ、だって四つだけは潰れた儘で居られて、息をする限りは一つでもなくてはならないからね。そんなそれはそれでも穴か、って、右足だけは踏み出す儘に裸足で、桜色に濁った桜色の、きっとそうなる前は透き通ってただろう砂を、敷物のように生える若草を避けて幾筋かに敷いた、金網で仕切られた狭い庭を踏んでて、あぁ、その庭の中でだけは楽しい話しも楽しくなくなるよ。だって、ズキズキ踵の骨の痛む左足は、そこへは踏み込めないからね、まぁそれでこそ、この身は、誰の手にも触れない玉と浮くようで、白くだけ透けて白くないのを晒すのは、そっちからこっちまでざわざわと、この身ばかりでもなく。いや違う、この身だけは白くは透けず白いんだ、だって、この身なんて知らなくて、それで、ただ誰の手にも触れない玉と浮いて居られて、なので金網で仕切られた狭い庭から風も払えて、敷かれた砂の桜色を筋に添って舐めるように狭いなって見て取れて。箱を探してる。箱を探してる！っ

て、桜色は、もう夜ごと紛れた坂を振り返って叫ぶようなのは、その桜色が箱を隠してるって思えてならなくて、益益その桜色を睨み付ければ却って箱は何処にも見付からなさそうで。ここは遠回りする処だぞ、ってだけ分かれば、誰の手にも触れない玉と浮くのから離れ、知らないこの身も序でに棄てるかに白くは透けない白に、桜色の隠そう箱を、庭を外れて映すんだ、って何処に？桜色の叫ぶような、にしかないなら、桜色に叫ぶようなは懐かしい祭りのその祭りの時からもう壊れてた耳障りな遠い音に違いなく、その壊れてる祭りの音に、桜色の隠そう箱が紛れてるよね。だって他に無いもの。さあ、それを取りに行こう、って祭りのどさくさに紛れた、その祭りから食み出たその時限りな淡い曇り日の空へ放るような、独り切りな祭りだよ、きっと。なんて取りに行けるのは、箱自らしかないよ、だって箱は箱しか知らないからね。ってなら、その箱は嫌でも直ぐに見付かって、ってどの箱？だから見付けるしかない箱だよ、って、箱に懐かしく話し掛けられるようなのは、庭の脇で庭と同じ広さと形に成ろうとしたがる庭の光りの届かない低い形の艶っぽく自らを閉ざして角を四つ眠り込むようにこっそり尖らせてる闇の中に、その箱は収まってるからで、少しも箱の形なんてしてなくて。ならまた剣の形など見せられるのか、なんて恐る恐る覗くから間違いなく剣の形で、恐る恐るなんてそこだけ寝惚けるように溶ければ闇も溶けて溝へ流れ、低い形は色を拒んで艶っぽくだけ透け、中に、

白くだけ透けて白くないのを晒す、少しも角張ってないけど玉のように丸くもない、剣の形も一刷き薄く兆そう構えはその傾きに含まれようけれど、それも色を拒んで透けるなら、に、箱ってこの世にこの一つしかないみたいに、そんな箱で。ならこの箱が、この世を一つしかないみたいにしてるんだ、そうだ、なのでこの世が一つの箱なんだ、じゃ、この、って箱じゃないんだよ。この、箱じゃないんで、これはここに、色を拒んで艶っぽく透ける、ここに。そんな箱じゃないんで、色を拒んで艶っぽく透ける中に尖った足でじわじわ踏み込める。色を拒んで艶っぽく透けるばかりで形のないこの身は、箱じゃないを纏って、すっかり箱じゃない姿になって、色を拒んで艶っぽく透ける中を浮くように。の、その浮くようにが濁った桜色で、なので桜色は色を拒んで艶っぽく透けて、箱じゃないを纏ったこの身を照らせば、この身は、箱じゃないさえ脱ぎ捨てるしかなくに、さもうっかりと女の足の指の股の匂う細紐の緩い結び目の中に飛び退るかに石みたいに籠もって、その細紐をか細い音を立てて震わせれば、低い形の中に独り身を起こす鳥の崩れ掛けて煩そうな形の薄い単衣を纏って手足を生やすしかなさそうな桜色は、さも女かにならで女でしかない科を作って低い形の窪んだ底に沈みそうに、細紐を腰に巻こうとして巧く行かず。紐が短過ぎるでもなさそうなら、結び目か、結び目の中のこの身が、嫌がってるんじゃないかな、って石みたいに考えるのは、低い形の窪んだ底の氷みたいな冷

たさに違いなく、ただのっぺり冷たいんじゃなく、その冷たさは数に成りたがらない三つの姿を窪んだ底に写そうとして写せずに冷たい儘を保つ為にぐるぐる回って扇形に成り掛かるんだけど扇は却って畳まれ、氷と氷を擦らせたような尖った途切れ勝ちな声を桜色に生えた手足に立てさせてないか、って、結び目の中のこの身が心に掛けるのが桜色に伝わったか、桜色は結び目を女の足の指の股の匂う手に取って柔らかい歯でそっと噛むと、結び目は解け掛けるかに僅かに歪んで、でもそれって、この身に酷く堪えて、でもそれを分かってるかに桜色は噛み続け、そうして結び目が薄緑色に透けるなら、それはきっと桜色には苦いんだ、青虫を噛んで汁が舌に粘り着くかに。透ける薄緑色の中で、この身はそれを一片の息絶えたかに青い炎になって揺らめき笑えば、きっと桜色も笑う筈、生やした手足を、より硬く、より若若しく棘棘と尖らせて、火に炙られたいかに。それで、あぁこの身なんて要らない、って思えば、この身はもう青い炎じゃなく、きっと色を拒んで艶っぽく透ける中に、ぐにゃりと足ばかりになって投げ出され、右足は跳ね左足は足の裏を上へ向けてだらりと痺れたみたいに引き摺って、それを繋げてるのはうっかりとも一つ目で、その目の届く先は、桜色をズブリと刺したその奥しかなく、そこは苛ついて待ち構えるような女の裂かれた儘の赤黒い腹の底で、そこに生えてる、切れ長に何時も笑ってるみたいな形は平べったいけどグリグリと盛り上がってる赤目勝ちな一つ目

に睨み返され、それをまた睨み返せば、一つ目と一つ目は、重なればきっと直ぐにも真っ直ぐ何処までも風を断って飛んで行けそうな鳥の形に成れると分かって、ドロドロに溶けて薄緑色を滲ます泥塗れで一塊で居るしか無いなら、ただ生きるとは違う他へ行けなくて生きてるしかない女の姿を、探し始めてる、足でも生やしたみたいに。で、低い形の窪んだ底の氷みたいな冷たさに、その女が嫌嫌ずっとそうしてたに違いなくに逆さに丸っこい身を浸してるのを見付けるのは、どっちの目かって、そりゃこっちの一つ目だよね、って分かれば、もう一つの一つ目は、女の裂かれた儘の赤黒い腹の底で、どっちの脚も切られたせいで翼に傷は負ってなくても飛べない鳥の形に成りたそうで成れなくて、ドロドロの一塊で生きてる女の欲しがってる目に成りたがってるようで、って分かれば、こっちの一つ目は、低い形の窪んだ底の氷みたいな冷たさに身を浸してる、その生きてる女の姿を、ドロドロの一塊から、ドロドロは濡れてる上っ面だけで、硬い骨を掻き集めて骨と骨が擦れ合って高い音を立てられるよう、きっちり組み立てた姿に見直して、「欲しいのは、目ですか。目だけは、ドロドロなんてしないだけに。生きるのを已められないからは。ですよね。でもどうして生きるのを已められないんでしたっけ。生きるとは違う他へ行けないんでしたっけ。それさえ分かれば生きるも生きないもないかに。」と尋ねると、その声は、庭の脇の低い形の庭に沿わない暗い側をもっと暗く鋭く裂き、その

見掛けだけ深そうな裂け目から、低い形を満たしていた闇は色を拒んで艶っぽく透け、沈んだ陽を追って海を真似て波打って海へ向かうように流れて止まらず、その女の姿も一塊に流され。「欲しいのは、違いますよね、何を欲しいんじゃないんですよね。生きるとは違う他へ行けなくて生きるのを已められないからは。じゃ目は何ですか。きっとそんなの、捨てたいけど捨てられないんでしょ。でも何を欲しいんじゃないならそうとも分からずに、とは、分かってそうに。じゃ目は何ですか、とは何ですか、が、そうとも分からない、目であって欲しいとか。」女の姿は、その声の流れを跳ね、丸っこく四つん這いになって、そのそうなるしかないのは腹を全て切り取られてるからで、で腹みたいに脹れてるのは、色を拒んで透ける艶を常に吐き続けてるしかないまでに呑み込んでる儘で居るしかないからで、「あぁそれで、目なんですね、闇へ届かない。闇へ届かない目なんて、目じゃなくて、木の皮の切れっ端で無かったら闇を裏返したみたいなただのドロドロですもんね。違いますよね。違うなら黙りましょう、試しにですけど。あ、試しに黙ってるのこそ、目に違いありませんよ、ドロドロと距たりながらに、ただ一つの絆かと空高くへと繋がって。」の声は、もう一つの赤目勝ちな一つ目を、女の裂かれた儘の赤黒い腹の底ごと、こっちへ引っ張って来て、目と目が見交わされると、どっちの一つ目も覗く一つ目に映る自らを、その覗く一つ目から水を弾くみたいに取り出し、同じ向きのも

う一つの目にして、それぞれが二つ目になって、また互いを見交わすと、その四つの目は互いをその中に映して、八つになって、その内のどれか一つが、女の姿の生まれ付きの目に違いない、って思えてならないなら、きっとそんなの嘘で、それをさっさと女の姿に引き渡したいけど、どれがその一つか女の姿に尋ねられず。だってそんなの尋ねて、どれか分かったら、その一つ目はきっとドロドロに溶けて流れ出して取り返しが付かないよ、って誰が言うんだっけ、そりゃ四つ目だよね、八つになるのが抑もの間違いだろって。そう言ってたんだよ、四つ目は始めから、なので四つ目って自らを思い定める儘に四つ目の姿を彫り出して。「そう、って、どう言ってたんですか。」と、女の姿が、庭の脇の低い形の裂け目へ戻ってその身を投げ出してそれを塞ぎたそうに、硬い骨を擦り合わせる音で尋ねると、女の姿は、黒く澄んだ水を山さえ斜めになら上りそうに速く流す川に、遠い奥から手を延ばして来る闇に覆い被されるかに溺れ掛けてて、それを助けないでは川を渡れず行き止まるしかないなら、黒く澄んだ水に刃を突き立てて、その裂け目から色を拒んで透ける艶を掬って、啜るしかなさそうだけど、って、誰が言うんだっけ、だからそりゃ四つ目だよ、そうしてその内の一つの目が、跳ねる右足と足の裏を上へ向けてだらりと痺れたみたいに引き摺る左足を繋げてて、それと斜交いの赤い一つ目は、相変わらず女の裂かれた儘の赤黒い腹の底にむくりと浮腫んで浮き出るようで、その目と目の傾き

に促され、足は軽やかに運ばれ、黒く澄んだ水の流れを四つ目は抱いて踊るようで、「でもどっちへ。森なら枯れて風に塵と飛ばされたって、さっき、遠い何時かみたいに見たよね。なんて、そっちから言われそうで。で、踊るなら、目と目の傾きに促されて踏み止まれなくて、どっちへ。」って、また硬い骨を擦り合わせる音で尋ねられると、足は右左とも酷く痩せてて生白く、それを黒く塗ったのって何時だっけ、だって生白いんじゃ黒く澄んだ水に肉から骨まで溶けちゃうからね、つまり、この川とは違う処で黒く澄んだ水に足を浸けてたんだよ黒く塗ったのはその為で、でもそれ何時、って俯くと、だって時は重くて必ず水に沈んでるからね、その俯く自らの重みに、四つ目はその時の中へ尖って切れ込みそうで何の何時だっけも探すのを已めれば、探し出されるのは、何だろう。その何だろうって、垢で汚れっ放しな耳を舐められたまだ幼かった頃で、耳を舐めたのは何だろう、の、何は、川をクネクネ泳ぐようなら水に棲む蛇の姿が真っ先に浮かぶけど、それが泳げずに直ぐ水の澄む黒さに溶けると、川底から湧き上がる黒く澄んでないとだけは分かる三つ寄り添う温い泉に右足を取られてて、跳ねるのも儘ならず、もうずっと前から干涸らびて生きてる、水に棲む片目の蛇の、その目を舐め続けてるのって何だろう、の二つの何だろうさえ繋がるなら、誰も水に溶けも溺れずにも済むのにな、でも何かが見せしめみたいに秘められてあからさまに溺れないと川は渡れないって、始めから決

められてたに違いなく、四つ目は、二つの何だろうから目を背けたは良いけど、それって、目の四つ揃ってじゃなく、じゃ四つの内のどれとどれ?、って、四つ目自らより先に女の姿に、逃げられる筈ないのに空高くへ逃げる振りで、嗤われる序でに尋ねられると、四つ目はやっと先を見通せて。「アハハハ、見通せるから四つ目なだけで、四つ目ならそりゃ見通せるよね、四つ目に見通せる限りに限っては。その限りに私の姿を見通しなよ。探すのを已めたんだよね。なら何だって探し出せて、私の姿が女じゃなく、空高くの白く濁った水を掻き回してその痛みに呻く剣の形の影だって分かりそうだけどな。」は、少しも、硬い骨を擦り合わせる音ではなく、確かに影が呻くような、その痛そうな音色をずらして重ねて鬟のようなら、剣の形もきっと鬟で出来てそうで、その鬟が声を上げてるようで。でも剣の形なんて取って付けたまやかしだろ、「夜だって坂だって何だって、箱を降ろした穴からしたら取って付けてるよ、だけどまやかしじゃない、だってまやかしってまやかしならまやかしじゃないからね。だからまやかしなんて無いんだよ、何もがまやかしで、坂だって夜だって。それで、剣の形だってて取って付けてるって事だね。違うなら違うけど、も取って付けたかな。は、まやかしじゃないならまやかしかな、まやかしにも程があろうに、な。の程しか無いかに。」は、耳には紛れもなく低い女の声で、声は低いなら必ずそれは女の声であるかに。声だけでなく音さえ女の音かに。そうか、

そんな女の声なので、女なんてもう音と同じに要らないって事か。「要らないんじゃなくて女は居ないんだよ、居たのが居なくなったんじゃなく初めっから居なかったに違いないなら、女なんて無かったんだね。要るか要らないかって言ったら要るよね。女なんて無いよ、って言わなくちゃいけないんで。」はもう、低くもなく、なので女の声でもなく、と言って硬い骨を擦り合わせる音でも、剣の形の襞が声を上げるでもなさそうなら、初めっから何も聞こえてなかったか、空高くからなら自ずと耳に流れ込む白い濁りだけを聞いてたに違いなく。それともまさか耳は、水に棲む蛇の踊る柔らかい刃のような姿によって切り落とされ、耳の穴は蛇の蜷局を緊く巻く姿に塞がれてないかって耳を触ると、耳は傷痕のような平べったい耳朶を揃えて目と同じに四つ生えてて、それは四つの事を聞く為で、でも目は違う、四つ揃ってないと一つの事を見えないからで、の一つの事ってこれだろ、みたいな顔付きの、白く濁った水を掻き回してその痛みに呻くのは、跳ねる右足でも痺れたみたいに引き摺られる左足とも違う、痩せて弓形に曲がった太い骨のような黒く塗られて揃えられて縛られた足だけど、黒は剥げ掛けてて斑に剥き出される白は爛れて、白く濁った水に身投げしたそうなら身投げしてて、その巻き添えで白く濁った水に沈む四つ目を、四つ目は追って追い切れず、ならそれって、一つの事じゃ無かったんだって、何を諦めるかからも四つ目を逸らして諦めると、四つ目の先は、剣の形の蓋の

開いた外は白くて内は黒い箱へと、襞を重ねる跡を描き描き落ちて行き。でもそれも追えない、追えたら生きるのを已められると分かってても。替わりに四つ目は、崩れ掛けて煩そうな鳥の形の薄い単衣が低い形の艶っぽく透ける闇から闇の艶の濁りを滲み浮かすように脹らみながら突き上がり迫るのから、身を躱さなければならなくなり、先ずは透ける闇のこっそり尖ってる四つの角を揺さぶろうと四つ目の内の一つを瞑って、それで真下に見下ろせる限り、低い形の四つの角を三つの角に出来たかは見えて来ないけど、鳥の形の薄い単衣はのしは畳まれて行きそうで傾いて向きを変えそうで。でもそれを見て追えてる少って瞑る目だけに違いなく、なら瞼の裏の奥へ向かって鳥の形の単衣は突き刺さって小さくなって行くのかな、でもその一つ目の瞼の裏を隅まで見て取れる残りの三つの目には、単衣はもう鳥の形とも見て取れない程に脹れて、三つ目を覆って、それって三つ目を瞑らせてるのと同じなら三つ目は瞑らされてて、その瞑る目で三つそれぞれに単衣を見ようとすると、その形は、剣を呑んで剣に刺し貫かれたがってる三羽の鳥の姿で。それを見てるのって、瞼の裏に鳥の形の単衣を突き刺されて瞑ってられなくなった一つ目しかないなら、音も立てず海の底でゆっくり羽摶くような三羽の鳥の姿の単衣に囲まれた浮いた玉は、その一つ目に違いなく。で、三羽は剣を呑んで貫かれたのかな、切っ先は鳥の尻の穴から突き出し、その姿はくるくる回るのを止められず、玉はその切っ先

に至る処傷付けられて白く透けて白くなかったのに白く透けずに白く濁って、周りまで燻ませて。そうして燻んだ三羽の鳥の姿に、瞑る三つ目は包み取られたようなら、三つ目もまた剣に刺し貫かれてないか、って、誰が思うんだっけ、誰も居ないよ、誰も居ない？何処に？誰かが居られる何処が何処に有るのかな。って、鳥の形の単衣なんて知らなかったみたいにふわりと四つ目は真下を一つに見詰めて見付かるのは、そりゃ、閉ざされたからには再び開けられない筈の蓋のうっかりかに開けられた、外は白くて内は黒い剣の形の箱しかないよね、蓋がされてれば軽そうが蓋が外れて酷く重そうに静かに仰向けに凝っとしてるなら何処へだって行けるぞって横たわって、坂に塗られて拡げられてたほんの今さっきの夜の色を盛んに懐かしがってようか。でも何で空っぽなんだろ、空っぽ？分厚い黒が隙なく中を埋めてるじゃないか。四つ目にはさらりと透けて仕舞うなら四つ耳を働かせるんだな、黒の中は箱の深さと同じ厚さの剣に象られてたって穴だらけ、って言うか、黒に穴が開くんじゃなく穴ばかりなので黒くて、どの穴も同じ口の形でしか言えない違う事を声を互いの声の鏡に映すみたいに叫んでて、その同じ穴の形って夜に辿り着いた全ての叫べる口を穴へ導いた、森が被さり損なった穴の入り口の形に違いなく、なら花の影でびっしりの水玉で塞がれてようね、あぁそれで違う事しか言えないんだ、花は一つとして同じ色にも形にも咲かないからね、って誰が決めたんだっけ、そりゃ、穴ば

かりで黒しかないけど、違う事の互いの声が鏡みたいに映し合うんじゃ、穴は見掛けは塞がれるばかりで、黒は色取り取りの花の色かって。ならどの花の色も黒いんだよね、って四つ耳の陰で四つ目が当て擦りに呟けるのは、箱の外の白をギリギリ斜めから覗いたからで、白は何も映さない鏡のように益益暗そうに白く、花の色をどれも無かった事にして斑に煌めいて。それに四つ目を凝らすと、その斑な煌めきはクネクネしながらも一繋がりごとにどうやら四つに数えられ、なら自らの映るのを見てるんだって、互いを白の中に探すと、互いの色を盗み見合うみたいに色を奪い合って、目の中は四つとも、色という色が犇めき合って真っ黒に透き通って、その四つ目からは、箱の中の穴ばかりで黒は、うっかりすると桜色の濁りで、うっかりしないと桜色を打ち消してしか出せない淡い灰色で、それは何を何の炎で燃やした灰だろう、それが分からなければ、桜色の濁りの何が桜色かも分からずに、穴ばかりの黒で無いなら穴で無いばかりの白で、見付けたぞ！その白って、空高くの白く濁った水を掻き回してその痛みに呻く剣そのものの影に点して滴らせた一片の炎で、女の骨張った痩せた腰を角角しく拗らせるようで、それは何を燃やしたろう、って四つ目が見上げられないなら、だって四つ目は真下のギリギリ斜めしか見ようとしないからね、四つ耳が見上げると、箱の黒い内を凝っと見詰めるかに低い形の艶っぽく透ける闇の直ぐ上に沈みたそうに浮かぶ、失われた取り取りの色に彩られて透けた

細い紐を絡めて自らを縛ってそうな、翼を苦しそうに捩ってるなら鳥のようでも翼の捩れに遮られるかに鳥の形には成らない、きっと淡い灰色に透ける石をそんな形に刻み出して中を刳り貫いて拵えた、これより小さな箱なんて無いって位に小さな、箱に見えない箱で、きっと中身は、その箱の箱に見えない形の通りの空っぽで、でも分からない、それって四つ耳が見てるからで、四つ目が見たら、細い紐がこれ見よがしに自らをこんがらがらせて、そんな箱に見えない箱のように見えるものを縛ってそうに見せ掛けてるだけみたいで。って、四つ耳がさも四つ目が見るかに見直すと、同じ翼と腹を分かち持つ四羽の鳥の、それぞれ違う向きに飛び立とうとする形の、やっぱり小さな箱で、腹を分かち持つ辺りが少しは箱にも見えるけど、中身はやっぱりその箱の形の通りの空っぽで、いや違、違わないんだけど、その空っぽの中身って、その箱の外で今にも消えそうに揺らいでる一片の炎に限られるなら、それはそれを取り囲むように見下ろす四つ目にそう見えるからで。え？四つ目なら、仰向けに横たわる剣の形の箱の外の白を覗いてから箱の中の穴ばかりの黒で無いなら穴で無いばかりの白を見付けてその儘それっ切りで、ならこっちの四つ目って何、って何が何に尋ねそうにも無いなら、その四つ目と四つ目は目を背け合うも何も、低い形の艶っぽく透ける闇の低くと高くで互いを知らなくて、その互いに知らないのに付け込むように、鳥の翼と腹は四羽の鳥の顔をそれぞれ顔から食み出す程

の丸丸とした一つ目にして、その四つ目の見詰める真ん中に一片の炎を点し直し、それを箱の外の空っぽの中身なんだって見直すと、その鳥の四つ目は顔からつるりと外れ、その内の三つが炎へ転げ込んで煙も立てず灰も残さずに消えるけど、それでその炎は、三つの事を一時に見分けられようって、そんな三つの色を滲ませたり消したりしながら、ゆっくりと、蓋を開けてる剣の形の箱の直ぐ上まで垂れ下がって、あぁその輝きが自ら剣の形の箱を照らす中に穴で無いばかりの白を見付けたぞ！って、言えるなら。でも言えない、鳥の目を燃やしたのを炎自らが分かってて、うっかりとでも目を燃やすなんて事は、しちゃいけないんだって引き摺ってるからね。で、灰を残さなかったなら灰色も、それを遡る桜色も見付からない。でも、その桜色が何かは、その炎には分かった筈、だって色って、目を燃やして滲ませたその黒く澄んでないとだけは分かる水を汲み置いて腐らせたような色の他に無くて。って、分かるのは、その炎自らじゃなく、それに照らされてる剣の形の箱の中だよね、だって、桜色はそこにしか甦らなくて、そこだけがそれを求めてるからね。いや、それを求めてるのは、箱の中を見詰めてる四つ目も同じで、って、誰に分かるんでしたっけ、って、他に居ませんよね、他ならない、声のあなた。違いましょうか。いやまるで違う、何一つ変わってない儘に、その他ならない声のあなただけが居ないんだ、その声を聞いて仕舞ったんで、きっとその時から。その独り居ないあな

たのせいで、あなただけが何でも知ってて、何一つ知らされない四つ目は、それで剣の形の箱の中に桜色を。いや違う、その違うんでそれで、四つ目も箱の中も、求めてるのはその桜色だけは甦らない事で、それには、炎に滲む黒く澄んでないとだけは分かる水を汲み置いて腐らせたような色を頼るしか無さそうが、それが時時チカチカと桜色を鈍く煌めかせ、その煌めきの欠片が箱の底へ落ちて薄くもう再びは濁らないかに澄んだ桜色に塗り拡げられてそうで。でも箱の底なら底無しさ、って言ってしまえば、箱に底なんて無かったみたいにそこは底無しで、で、そこは、そんな底無ししかない底なんだけど、すると桜色は塗り拡げられてなんてなくて、その底に溜まって欠片と欠片が打ったり撥ねたりし合えば夏の終わりの冷たさに凍るかに死んだばかりでまだ死に慣れずに澄むも濁るも済んだ事と蠢いてるようで、その煌めく桜色の欠片も一つ一つ覗き込めば、その色の中は狭過ぎるせいで底無ししか見付からず、その箱の底の底無しと桜色の欠片の数知れない底無しは、玉に見える透き通った穴で繫がれてる、って、それを見るのは、顔から外れて一つだけ炎へ転げ込まずに箱の有りそうに無い底無しの何処かを底無しに紛れて転げ回ってる筈の鳥の目で、そこに桜色の煌めきが映りに映って黒く輝いて黒さが増す程に桜色で、って、それを見るのは、箱の底の底無しと桜色の底無しを、その無しと無しなら何だって繫げられるさって嬉しそうな玉に見える透き通った穴で。でも、それってき

っと、玉に見えて無いし透き通っても無いし穴でも無いって、それ自らが真っ先に心付けば、それに針でそっと刺したような小さな穴が一つ開き、垂れ下がってた一片の炎が針を真下に落とすように、そこへ流れ込んでそこを満たし、それはその勢いを駆って、同じ翼と腹を分かち持つ四羽の鳥の形の小さな箱を呼び寄せてその空っぽの中へ自ら収まれば、箱の形の四羽の鳥で有るからには身を振るように目を欲しがってるみたいで。それを、低い形の艶っぽく透ける闇の高くで四つ目は冷たく見下ろしてる。それを、低くの四つ目がうっかり見上げて仕舞って、もう潮時なんだってその四つ揃って、どんな箱でも構わないので一つの箱に収まりたくて堪らなくて、それが叶わないならって、同じ翼と腹を分かち持つ四羽の鳥の形の小さな箱の影は見付けたは見付けたけど、直ぐにそれは、鳥の崩れ掛けて煩そうな形の薄い単衣に覆われ。そうか、欲しかったのは鳥の形なんだ、って、四つ目はその形に啄まれようとするかに、四つ寄り添って鳥には旨そうな淡い灰色に透ける石の振りをしてると、鳥の形って四つ目にはどう見たって人の形で、だってどっちもどうにも形でしかないからね、四つの嘴から右と左の翼からも一つの腹からも、一揃いの人の手足がそれぞれに生えて、それらが細紐がこんがらがるみたいなら嘴も翼も腹もその巻き添えみたいに捩れて、いや違うよね、どうにも人の形って見えてるでしょ、でもその人の形が、淡い灰色に透ける石をそんな形に刻み出して中を刳り貫いて拵

えた、これより小さな箱なんて無いって位に小さな箱に見えない箱の形でしか無くて、え？じゃ四つ目は揃ってその箱の中に収まってるって事、なんて虫の良い事をつい考えて仕舞うのが拙いに違いない、箱に見えない箱の形はどう見ても箱で、なのでどうにも塞がってて開けられないんだって分かって、ならその箱の形を炎のように柔らかい刃で削って人の形を刻み出すしかないな、の、その人の形って、やっぱりそうか、桜色だよ、手足を生やすしかなさそうな。その桜色が、低い形の艶っぽく透ける闇に浮くように沈むようにしてるなら、それを支えてるのは四つ目しかなく、って、どっちの四つ目？って悪戯っぽく尋ねるのが高くな四つ目なら低くな四つ目で、いや分からない、高い低いは、艶っぽく透ける闇が低い形をしてるせいだけで、四つ目に高くも低くも無い、って、桜色が思うんでなくちゃいけないんだけど、思うのかな、何故、でなくちゃいけないかって言うと、高い低いって、桜色を、人の形な筈が鳥の形にして仕舞うから、で、これまでそうなってたんだよ、高くな四つ目を何とかしないとまた同じ繰り返しかな。いや構うもんか、って高かろうが低かろうが、って放り出すと、そっちの四つ目は二つ目と二つ目になって、こっちの四つ目は、ただ桜色を支える為だけみたいに変わらずに、四つ寄り添って鳥には旨そうな淡い灰色に透ける石の振りの四つ目で。で、桜色は何にも支えられてなくて、長そうな手足を生やし、それとも細いだけで肉を付けさえすれば酷く短くも見

えそうな、でもそれって手足なんだろうか、真ん中が透けた玉で、そこから骨の透けそうな白い肉が上と下に右左右左って同じように延びてるだけで、でも、なら上下と右左は分かるんだ、って分かれば分からなくなって、いやそうとも限らない、って、何が？手足は手足しかないよ、あぁでも燃えてるみたいだ、炎の形にだけは成らないぞ、って石礫みたいな風を右左もない斜めからザラザラと呼んでは腿やら腕やらの形なのか波打たせ。アハハ、嘘だねって、同じ翼と腹を分かち持つ四羽の鳥の形の小さな箱の中で、一片の炎はすっかり勢いを得て同じ翼と腹を分かち持つ四羽の鳥の形になってグルグル躍り回って、人の形に腿も腕も有るもんかって笑ってるよ。あぁ見付けたよ！その炎の形だよ、人の形って。だって、どっちも形だからね。他に形なんて無いでしょ、って、こっちの四つ目は、四羽の鳥の形の炎になら喜んで燃やされたそうな淡い灰色に透ける石の振りで、各各抜け駆けでもしようかってばらけて、剣の形を、空高くの白く濁った水を掻き回してその痛みに呻く影の動きの端に見詰めたり見失ったりしてて。低い形の艶っぽく透ける闇に今にも沈んでこれ見よがしに溺れそうに、でも剣の形がきっと助けて呉れそうに。きっと助けて呉れそうって、その剣の形が、きっと人の形に違いなくて。違いないよ、って確かめるみたいに、四つ目は、箱の形を改めて剣の形に睨め回してから、自らが人の形をしているのを、淡い灰色に透ける石の振りを振り切って、人の形みたいに低い形の艶

っぽく透ける闇を支える細い柱みたいに立ち上がって、その姿を何処へ映そうかって、行き掛かりで人なんかに成ったみたいにオロオロしてると、そのオロオロにしか人の姿は映せそうになく、だって、外は白くて内は黒い剣の形の箱は、相変わらず黙り込んで仰向けに横たわって、蓋を開けて、いや蓋は濡れるようにじっとりと閉じてる、閉じて蓋の僅かに窪む剣の形を、白く濁った水を掻き回してその痛みに呻く影の動きへ向けて、脅すように白く輝かせ。って、何の為に、この箱はここに有り続けてるんだろ、そのせいで何もかもが損なわれてないか、って、誰が尋ねるんだっけなんて誰も言わないので、人の形は嬉しくなって、ついその四つ目を剣の形の四つの隅に一つずつ向けて釘付けにしたくなるけど、剣の形の隅なら四つより幾つか多くて、それで四つ目はどれもそっくりに酷く傷付くんだって、それがまた擽られるみたいに嬉しくて、その嬉しさを声にするなら同じ翼と腹を分かち持つ四羽の鳥の形でしょ、って、その形の小さな箱を探すと、え？箱を探す？それだけはしちゃいけないでしょ、良かったな直ぐに分かって、でも何で箱を探しちゃいけなかったんだっけ、それだけは知って置かないと。でもそんなの箱を探さなくちゃ知れないでしょ、なら箱を探すしか無くて。の箱って何だっけ？って、どの箱か知れないけど何かの箱に、人の形の四つ目は尋ねられてるって思えてならないなら、そんな探しちゃいけなかった箱で、探されちゃった箱は。それは、何かを呑んでる形に

三つの角を濡れるように光らせ俯いて尖ってるとは分かって、いやそれだけ分かれば分かり過ぎる程で、そのせいで同じ翼と腹を分かち持つ四羽の鳥の形は、何の箱でも居られなくなって一片の花弁の振りでもして花の影に紛れたそうなら紛れてて、いや分からない、翼と腹を失った薄っぺらな鳥の形が折り重なってるようで、ならそんな折り重なる形で、なら花弁はどれもその形で、その花弁は次次に襞を折り畳むように重なり重なりして、その重みを自ら跳ね返して何処かへ一纏まりに飛び立ちたそうで。折り畳まれるような襞ってきっと翼なんだろうな、って、飛び立てるなら言いそうで。あぁそんなのを見上げられるのって剣の形だけだ、って声が声に成れないなら剣の形に成って、でもそんな形って少しも剣に見えないなら、あの蛹を喉を塞いで呑み込み掛けてるようだ、って誰が？誰？そこに誰が居るって誰に分かるのかな、の、そこって何処？見付けたよ、探しちゃいけなかった探されちゃった箱だよ、そんな姿の、人の形を脱いだばかりで脱ぎ慣れない、ただ蛹を呑んでる形、喉を塞ぐも無い、だってその形が蛹に塞がれる形で。息を塞がれた三つの息が息をして蛹の形かな、って、そうとだけは、低い形の艶っぽく透ける闇を裂いて声に出来て。いやまさか、何の声が、低い形の艶っぽく透ける闇を裂いたり出来るもんか。何の声だって、低い形の艶っぽく透ける闇に含まれてて、なので低い形の艶っぽく透ける闇に違いなくて。あぁ分かったよ、その声も、人の形を脱いだばかりで脱

ぎ慣れない蛹を呑んでる形で、どんな薄ぅい刃より薄くて闇へ裏返ってる刃の形もしてて、でも、なら他にも何の形だってしてて、そんな形なので蛹を呑んでる形で、いやそれだけは違うんじゃないかな、だってもう、ほら、それに裂かれた闇の裂け目が、それを裂いた形を手繰ってすっかり吸い取って、裂け目ごと脹れて手足を生やすようで、いや手足じゃない、どれも同じ形で同じ向きなら揃って足で、その姿を支えてるよね、低い形の艶っぽく透ける闇はその裂け目から浮き掛けて、もっと低い暗い水でも恋しいのか怖ず怖ずと丸っこくなって、でもその重みで何処へも行けず、それを四つ足を生やした裂け目は背負って四つん這いに踏ん張る形はくっきりと。ならもう足じゃない、四つの尖った角が、ただ重いだけで動けない一塊の闇の下にその四隅に根を下ろすかに生えてるよね、見掛けは蹴飛ばせば直ぐに折れそうにスカスカでも、って、声を掛けられるのは誰？って己の姿を見返すと、人の形こそ擦り切らそうと人の形の影はねっとり残す四つ目で、四つ目で見える限りの一つ一つを回し見て、四つ目の姿って他に見付からずに己独りだけだって分かれば、込み上げる笑いは止まらずに喉は避け血でも吐きそうなら、止められるのは四つ耳しかないな、なんてそっちを見たのが拙かったか、だって、そのそっちなんて、低い形の艶っぽく透ける丸っこい闇の中で、細い片足を上げ、もっと細いもう片足だけで突っ立ってる何の形だってしてる蛹を呑んでる形が、踊りたそうなら、もうク

ルクル踊ってて、闇から何の声も吹き払って、そこは暗く透ける程に自ずと汚れるような水を張ったようで、その形の笑う声だけが闇ごとはち切れそうに響いてるだけだものね。四つ耳なんて直ぐにその笑い声にへばり付いてそれを直に聞き取れば、切り取られた小さな翼みたいにヒラヒラと闇から外へ舞い上がり掛け、でも闇に蓄えられた水を脅すかに尖って俯くと、それは鳥の細い四つ足で、でも音は聞けるぞって、四つ足の姿の中に身を潜めた四つ耳なんだろうな、その四つ足を聞いた音の通りに震わせ。いや、震えてるのは、何かが全く足らないぞ、って震えてて、その何かって四つ目に決まってるなら、四つ目はその震えに試しになら影だけは切り落とすように投げようけれど、絡んで来るのがもう震えもしない四つ足だけじゃそれっ切り、立て続けの雫のような震える音へ四つ目を向けると、四つ耳はまたこっそり丸っこい闇の中へ戻ってて何やらヒラヒラと、でも舞い上がるんでも舞い降りるんでもそこに動かずに居るでもない、ならきっとその闇を操ってるんだ、いやまさか、だって丸っこい闇はもう丸っこくも低い形でも無く、ただ艶っぽくその何でもない形の外へなら何処までも透けて、四つ耳なんて小さな塵が闇の端でジメジメと四つ寄り添うだけのようで。いやまさか、そのジメジメこそ透ける闇の始まりだよね、だって四つ耳の穴のどれもから黒く澄んだ水が細く弓形に流れ出て、山の匂いも海の匂いもしないなら森が被さり損なった穴からの風だろうな、それを受けて、

尾を掴まれた小さな蛇みたいに夜がどっちか探してるけど見付からなくて、互いの頭を呑み合うみたいな四匹の蛇は縺れて伸び縮みする目が四つの水玉の溶け合うようでも、ちゃんと四つとは見分けられ、だって四つ目がそれを見てるからね。四つの水玉は四つの夜を映してるよ、でも夜は一つ切りなら、三つの嘘の夜は三つの水玉を潰してドロリと白く濁って溶けて出て、空を見上げるかに平たく固まって剣の形に掻き回されたそうでも叶わないなら、また自らを三つに分けるような動きの中に、虚ろに凹む剣の形をせっせと彫り込むかで。でもそれだって、その凹む剣の形がグルグル回るなら掻き回されてると同じな白い濁りなんだけど、嘘の夜は隠せなくて、何の音も立てられず、黒く澄んだ水の流れる音に流れ込まれてる内に、ドロリよりまた硬くなって延ばして千切れば、きっと骨で。そうか骨か、って、嘘でない一つ切りの夜を映す水玉がその白い濁りを端から啜って、一つ切りの夜の中に骨を組んで行くような、でもようなだけなら違う事を遣ってるんだ、それは何？って四つ目を向けると、一つ切りの夜こそ嘘で、嘘を弾き出した水玉は、自らがずっと水玉で居られるようにかと、白い濁りを骨からまたドロリまで溶かし、耳の穴の形を一つ拵えれば水玉ごとその耳の穴の形で。でも初めから水垢で酷く汚れてるな、って、四つ目が背けられると、その四つ目の人の形のねっとりした影は、その影にぴたりと合わさる人の形の身を四つ目に映したくなって映すと、四つ目で一つの人の形、

その艶っぽく透ける闇の窪んだ底に蓄えられた水の上に仰向けの姿を、その蓄えられた水の減らない為だけに時を止めたみたいに静かに見詰められて。いや違う違う、こんなに違うなんて他にない程に違うんだ、それは四つ目の人の形じゃない。四つ目に形が有るなら足だけだろうけど、きっともう要らなくって磨り減って四つ目の形なんて考えなくて良くて、いやそれも違う、その形を考えてるから四つ目は四つ目なんだ、けどそれって切りないなので考えなくて良いと変わらなくて。って、その変わらなさから追い払われるみたいに、その脇へ四つ目を遣ると、もう低い形の艶っぽく透ける闇を背負わずに済んでる、四つの尖った角をその四隅に根を下ろすかに生やす裂け目が、それでもまだそこを離れたくないかに四つん這いに踏ん張る形はしてて、あぁこの裂け目の四つ目だったらな、って思えば、四つの尖った角を生やす裂け目は艶っぽく透ける闇を睨み付ける四つ目で、でもそれをこっちの四つ目は眺めてなくちゃいけないなら、こっちの四つ目は裂け目の四つ目に成れないんだって思い知るしかなく、でもそれってもうこっちは四つ目でなくても済むのかもな、って己を顧みると、呼ばれてるよ、こっちはもう四つ目じゃなく、そのじゃない何かを、その通りに、その声は呼んでるよ、その通りを決められた通りに読み上げるみたいに、違うの？「違うか違わないかなんて、違うの？って尋ねるあなたが答えを出すか出さないかしかないでしょ、違うか違わないの？」「さあ、どうかな。」いや、

答えちゃいけないんだ、でも答えてないよ、さあ、どうかな。は、きっと空耳さ、だってもうこっちは四つ目じゃないからね。「もう四つ目ごっこは終わってるでしょ、って誰が言わなくちゃいけないんでしたっけ、だってあなたは、四つの尖った角を生やす裂け目が四つ目なのを確り見付けてるもの、見付けただけで四つ目かどうかは知れないけど。だって四つなんてそれが四つかどうかを知りたくて見たら何だって翳むしかないものね、四つ耳だって翼の形が当たり前って、でも何それってヒラヒラ生えてるものね、その四つ目の脇に、きっと。後、足らないのは何かしら、それをあなたは知らなくて、なので私が言うけど、それは私の子でもあなたの子でもない、ならそんな子なんて居もしない攫っても来られない、なら自ら幼子で居ようとしてその幼子で、私に抱かれてるなら、その淡い灰色に透ける石で出来てる何時も結ばれてる薄い唇を、鳥の姿は消されて四つの嘴だけが啄みに来るけど、同じ小さな唇を揃って狙うんで嘴は互いに打ち合って狭苦しそうにカチカチ音を立てると、それは鳥には旨そうな幼子の笑い声のようで、でも四つの嘴はその音を啄めるでもなく、打ち合うより激しく擦れ合って互いを歪ませて。後、足らないのは何かしら、それをあなたはずっと探してるんでなかったら、声の私なんて要らないわね。」探してるのは、そんなものでだけは無いって、ずっと分かってたかな。だって、艶っぽく透ける闇の窪んだ底に薄く蓄えられた光る水の上に仰向けの姿は、他の

何の形も形で無くなったってそれだけは形な、なので水程にも薄い人の形で、なので何の形もそれは要らなくて、ただ人の匂いか色か、どっちでもないなら、そのないだけの何かで、でも間違いなく二つ切りの目をそっと瞑ってて、その瞑る目にしか見えない時を追ってる、その目と時の音だけを二つ切りの耳も追ってる、って、何処へ？あぁその追われる時こそ人の姿をしてて、何処へも行かないんで、なので思う様、その時を追ってられるんだ、って、それが思うなら、それも、その時を真似て人の姿をして居られて、その自らの姿を何処へも行かせず思う様追えて、その楽しくて仰向けな身を僅かに傾けると、艶っぽく透ける闇の窪んだ底に蓄えられた光る水へと身は僅かより多めに頭から沈んで行こうね、水は少しも薄くなかったよ、なのでもう仰向けではなく反り返って逆立ちし掛けてるみたいな。違うの？って言うのは、もう一つの、きっともう一つ切りの、もう一つ切りならきっと人の姿、それとも一つ切りなら必ず二つ切りでしかなさそうな、そんなら人の姿が二つ重なるなら目は二つと二つで翳んだりせず四つで、四つ目なら誰だろう？って尋ねて答えるのは独り切りなら、そこに居るのは誰も何も無い、そこはそこじゃなく、ただこっちで、そのこっちに独りのそれは、艶っぽく透ける闇の窪んだ底に蓄えられた水の、水は少しも光ってなかったよ、そのまた底に身を傾けるしかなく丸まって横たわる姿だよね、でもそんなの独りならその独りに向かってって何だって言える、違うの？っ

て自らの声に囚われるかに、その姿は、こっちの儘、耳の穴の形で自らの重みに圧し潰されそうに寝かされて眠らされてるみたいな一つ切りの水玉で。それを微笑みながら眺め下ろすんだろうな逆立ちし掛けてるみたいな身は、こっちからはそっちで、その水玉に手の届く処までまた少し沈んで、それを手に取るや箱に容れるように、当たり前に何時の間にか縦に裂かれてる自らの腹の、その裂け目の思いの外奥深くへポトリと落とすと、裂け目は細い根で縫い合わされるように直ぐに閉じてようか、初めから逆立ちし掛けてなんて無かったよ、逆立ちするなら追われる時だけだね、って言いたげに。それから耳の穴の形の水玉は、女の腹に孕まれてるしかなくなってどうなったか、女？そうさ！必ずそれはそんな腹なんだ、人の形からして人の形なら必ず女でしかないものね、って、それに孕まれた耳の穴の形の水玉自らが声にするなら、それで初めて、それを孕むのは女で。じゃ、その声にしなかったら女じゃ無いのかな。そりゃそうさ、なので初めから女なんて居ないのさ、女しか居ないみたいに。色も匂いも無いのは、色と匂いしか無いのと同じにね。それを、アハハ、嘘だね、って負け犬みたいに遠くから叫んで微かに声を届かせるのは、森が被さり損なった穴しかなさそうで、だって夜は艶っぽく透ける闇の拡がりに溶かされ、その向こうへ流れて、溶けようはなく晒し者のように残る穴は、周りは干涸らびて硬い皺だらけで、縦に酷く長いのは変わらず浮き出るようにポッカリ真っ暗で、

息はしてるんだろうけど拡がりも狭まりもせず、確か花の影でびっしりの水玉に塞がれてたよ、って覚えは有っても嘘みたいで、でも嘘じゃないのは、穴の直ぐ手前に如何にも嘘らしい虚ろな花の影でびっしりの小さな黒く澄んだ水溜まりが出来てて、それとも叫んでるのはその水溜まりを掠めて吹く風に抗う漣かな、だって、穴の奥を幾ら覗いたって、数え切れず連なって片脚の鳥かに足を引き摺る姿を真似て踊りながら穴へ行き止まりまで奥深く籠もって踊り続けるしかなかった子供の群れ、穴へ導かれる前は子供じゃなかったけど穴では泣き喚くか黙るしか出来ない子供で居るしかない、そんな彼らの息の根を止められ折り重なって一塊に穴を満たしてその塊がまた脹れそうなら渦を巻きたそうにしてるのが見付かるだけで、いや違う、そんな彼らの身は疾っくにすっかり溶けて黒く澄んだ水に流れて、溶けない目だけが嘘じゃないけど虚ろな花の影に象られたかで、でもその目の重さのせいで穴から出られないどころか、もっと奥の向こうへ水は沈んで、きっと耳の穴の形でも探してようか、そこでしか安らえなさそうに何処までも流れ落ちてそうで、でも耳の穴の形もその替わりも見付からず。そんなのを女の腹の中の耳の穴の形の水玉が見詰めて、左の踵の剥き出しの骨の痛む憶えの幾らズキズキと甦ったって足は引き摺っちゃいけなかったんだ、って身に刻むように思い知りさえ出来れば、他に何を探すも無かろうか、でもそんなの分からなくて、なら、耳の穴の形も見付からずまた渦

を巻きたそうなら渦を巻かせて渦が見付ける穴の奥の穴に渦ごと水を全て流し込ませ、そしたら穴の中まで干涸らびて硬い皺だらけで、いやまさか、奥へ水を全て流せたなら、だって水なんて要らないからね、もう穴じゃなく、まだ造られたばかりで何も入れた事の無い剣の形の箱の置かれるだけで、箱の蓋が開いて中は空っぽなら、その箱の置かれてるそこが丸っきり空っぽで、何処までだって。あぁその何処までだって。なんだよね人の形って、なので少しも何処までだって、じゃなく。「後、足らないのは何かしら、それを私はずっと探してるんでなかったら、あなたなんて要らないわね。」何にしたって要らないだろうさ、なので、そうだよね、で構わないみたいだけど、いざ答えなくちゃいけないとなると口籠もって。なら答えなんて無い替わりに、あなたに要らないって言われない為に、こっちはあなたに足らない何かを探して貰わなくちゃ、ってて虫の良い事を考えたのが拙かったか巧かったか、その声のあなたなんて、こっちが黙ってれば、その声を何より嫌いな黒く澄んだ水をその声に流し込むみたいに溶かして消せて、替わりに、黒く澄んでないとだけは分かる三つ寄り添う温い泉に囲まれてずっと前にその泉と泉と泉の隙間の水の無い処でジリジリ溺れ死んだ憶えに息を吹き返せば、その息を吐く姿は、少しも何処までだってじゃない何処までだってなので人の形に孕まれた耳の穴の形の水玉で。耳の穴の形って何の為かって、足は引き摺らなくちゃいけないよ、右足は跳ね左足

は足の裏を上へ向けてだらりと痺れたみたいに、って、少しも何処までだってじゃない何処までだってなので人の形に伝えなくちゃならないからで、でもそう分かるように伝えるにはどうすれば良いか分からなくて、耳の穴の形の水玉は汚げに酷く白く濁って。見付けたよ！って何が何を？少しも何処までだってじゃない何処までだってなので人の形が、何処までだって空っぽな人の姿を、だよね。それがそれを見付けて仕舞えば、足は引き摺らなくちゃいけないよなんて話しはどうだって構わなくて、人の形をした人の姿が、何処までだって空っぽなんて、どうにもそうで有るしかなさ過ぎて嘘丸出しな何処までだって空っぽな空っぽの中を、少しも何処までだってじゃなく、だって人の姿だからね、何処までだってが何処までだってだったら何の姿も無かろうからね、それだけは分かってそれだけ分かってれば嬉しくてその嬉しさに身を守られて人の姿で居られる人の姿は、もう人の姿でなくちゃならないって事も無いんだけど、そんならただ人の姿で。なら、あぁ何も見付けてなんていないよ、見付けようがないじゃないか、そんな人の姿なんて、って誰が言うんだっけ？はい、待ってましたって、汚げに酷く白く濁った耳の穴の形の水玉が、耳の穴の形って知ってます？足を引き摺る人の姿にそっくりじゃ有りませんか、それもその筈、右足は跳ね左足は足の裏を上へ向けてだらりと痺れたみたいに足を引き摺って、そうしてるしかない姿のクネクネと踊るように進んで行く、その音を聞きたいか

らだけで、その聞きたい余りにそっくりなんですよ、それ。え、何がその音を立てるの？そう、それを知りたくて音を聞きたくて、それで耳の穴の形って、アハハそんなの嘘にも聞こえないよ。だって耳の穴の形って耳を塞ぐからそんな形に成るんで、いや塞がれる耳の形が耳を研ぎ澄ますんだ、で何も聞こえて来ないって取り返しの付かない程はっきり分かって分かる程、人の姿は幾ら踊っても進んでも音を立てない足を舞うように振り立て、細くて骨張ってるけど澄んだ黒い水の輝くように色という色を振り撒き、なのでもう何が足らないも無く、振り返れば艶っぽく透ける闇もずっと後ろで、その窪んだ底に蓄えられた水だけが耳を欹てるみたいに、何時でも人の姿の影を映せるよ、って待ち構えてるみたいで、でもそんなのも要らないんだ、人の姿は自らの振り撒く色の重なりに囲まれ、伸び縮みする四つの水玉の溶け合うようで、でも溶けたりしなくて四つの儘なら、何の四つ目とも係わらずに済んで、いや違、違わないんだけど、その四つ目と係わらなくて済む先に、左の踵の剥き出しの骨の痛む憶えをズキズキと甦らせてる、四つ目の四つ足の四つん這いの四つ耳を探すしか他なくて、良いよ、初めからそれを探してたんだから、って事にして仕舞えば、そんなの直ぐに見付かって、その儘踊って進めば、そいつは後を付いて来て、直に四つ目でも四つ足でも四つ耳でもなくなれば、その四つん這いは、戻って来た艶っぽく透ける闇、じゃなく、元からそこに艶っぽく透ける闇で、ずっと

後ろに残した闇は、この元からの闇に到り着く為の贋物だったかな、でも闇に贋物なんて有るのかな、ってまた振り返ると、いや、どっちも振り返ってなんて無くて、元からさえ艶っぽく透ける闇なんて無くて、その無いのは、艶っぽく透ける闇しか無いのと同じで、透けるなら、そんなの知らなくても構わなくて、ならく人の姿はもう踊らずにも進まずにも済みそうで、身が酷く軽くなれば、孕んでる耳の穴の形の水玉が酷く重くて耐えられずにそこからそこへ、伸び縮みする四つの水玉の溶け合うようなのを脱ぎ捨てて身を投げると、自らの孕む耳の穴の形の水玉へ身投げしてて。身投げは悪くなかったけど、伸び縮みする四つの水玉の溶け合うようなのを脱ぎ捨てたのは拙かったかな、だってそいつらは、逃げ回る艶っぽく透ける闇を捕まえては、それぞれの水玉の中へ流し込んで、伸び縮みする四つの艶っぽく透ける闇が溶け合うようで溶け合わずに、でもぴたりと絡み合って何処までだっては拡がらないけど果ての見えない四つん這いの姿を現したり消したりしながら、見えない果てでも直ぐそこに隠れてそうな、でもそんなの無いかも知れない虚ろな花の影でびっしりの黒く澄んだ水溜まりを恐れて脅すようで。いや違う、四つの艶っぽく透ける闇は、それぞれの底に蓄えられた水に人の姿を映したくてそうしてるだけさ、って、人の姿が言うんだっけ、言える訳無いさ、だって耳の穴の形の水玉へ身投げして、それから人の形はどうなったか？いや、人の姿どころか耳の穴の形の水玉も、耳の穴の形

を残して、きっと四つの艶っぽく透ける闇に脅されたんだ、何処かへ消えてて、残された耳の穴の形は何処へも行けないなら何処までだって薄く平たく拡がりそうで、そうしてやっと身投げした人の姿が、蛹を呑んでその蛹に塞がれる蛹の形をして、四つの艶っぽく透ける闇を見上げてる、いや違、違わないかも知れないけど、だって蛹を呑んでその蛹に塞がれる蛹の形なら三つを見上げたいに決まってて、それでも闇を四つ見上げなくちゃならない姿は何？知らない。でも見上げるには、右左の足を生やさなくちゃいけない、闇の四つん這いに抗う為にね。その痩せた生足は蛇のように拗って、足の裏に生えてる何の形も無い水玉をぎょろりと周りを脅すみたいな目玉かに脹らませ、でも白く濁ってるだけで何も見える筈無いさって、四つの艶っぽく透ける闇に圧し潰されそうにもっと白く濁ってる周りから却って嘲笑われてそうで、なら目玉は已めて、耳の穴の形に成りたそうな形で、その踏ん張ってる処をがっしりと噛みたくて何も噛めず、でもその形は尖った歯まで生やしてそうに噛む形はしてて、きっと耳の穴の形に成りたそうが災いしてるなら成りたそうなを已めにして、でもそしたら噛む形でも無くなって、足を生やす姿は何処までも滑って行くようで、それは、四つの艶っぽく透ける闇を蛇みたいにクネクネ擦り抜けると、蛇とは似ても似つかない、いや目付きだけは蛇の面影を残してそうな幼げな白い裸の細い程硬い骨をしてるって一目で分かって少しもクネクネなんてしない人の形

が、黒く澄んだ水の色に輝いて、あぁその黒く澄んだ色の膚が欲しかったんだ、って、艶っぽく透ける闇の底に蓄えられた水は言いたいんだろうな、なら、そう言ってて、言ってるなら、その膚の色を水に映してて、でもそしたらその闇の底は四つじゃなく一つ切りで、そうか、その黒く澄んだ色の膚は、つるりとその一つ切りが欲しかったんだ、一つ切りなら、四つと三つの一つ違いも七つと六つの一つ違いも擦り抜けられるものね、そしたら、その黒く澄んだ色の膚の白い裸の人の形って私だよって、そう言える人の姿が、その人の形をして嬉しそうに、右左の足をどうややこしくぎこちなく動かして、ややこしい程に楽しさも重なるね、襞を何処までもぎこちなく折り重ねるように、そんな足を引き摺る踊りを果てなく踊り続けようかって。蛇の目付きはその為さ、だってその目付きをした女、いや人の姿は女とは決まってないよ、なら姿に限る女かな、女に成り損なった振りを思いの儘なら却って足の力をぴょんぴょん増してそうな、その目も黒く澄んだ色の一つ切りで、四つ目かに一つ切りで、襞の襞まで分け入って、足を引き摺るように伸び縮みするもっと黒く澄んだ笑い声を、襞の途絶えたその向こうの明るみから聞き取れるからねって、（二〇二〇年九月七日）

（濁ってまた白くに…）

　濁ってまた白くに匂い直されてもただその儘の匂いの白は、何処にも戻れないようにその匂いに白を怖ず怖ずと輝かせようとも、そんな輝きは白から内へ距たって白で、その白から、白くに匂い立つ匂いの白さえ距たれば、辺りに匂い立つその白の匂いは断たれて忘れられ、その忘れられた白の匂いとも距たった濁りが白で、何をか匂わせ、繋がり。僅かでもそれを嗅ぎ取る振りで、その匂いが白くに見えるなら、それを見る目がそれを濁らせて白で、嵌め殺しかに何処にも戻れないように。それとも、ただ何処にも戻れないようなら白か、と自らを責めるように尋ねて白か。そんな白は忘れて仕舞え、と白は匂い立って、その匂いだけで立つようなら、もう何処へ戻れないもない、そこをそことだけ濁りには頼らず白く染めて白で、もう濁れない程に酷く濁って、その濁りだけが白くもなく匂うようで。ならもう匂いでもなく、失われた凪ぎの内への温もりでしかなかったかに白で、それは。の、それは、白を、そこだけ乾き果てて枯れた叢へ落ち込んで身は転げて窪みを虚ろに拡げるばかりかに知らなくて、白で。なので、匂い立つんだ、白くに白を知らず。その匂いの白は、いや、それをそう呼んでそれをそれと呼べたかは知れない、なら、それをそうと呼べて

ないかも知れないなんて知れないその匂いの白は、その匂いの白だけで、白ともう匂いとも知れない儘、それと内へ距たって、匂いの白で。その匂いの白には、もう一つの匂いの白を、いや違う、でも違うのは、もう一つか匂いか白か、そんなの考えたって考える先から忘れられて行くさ、って誰が言うなら言うんだっけ、何も言いそうになく、いや違うなんて言い出したのもその誰かじゃないか、の誰かも、考える先から忘れられれば、それはそれと入れ替わってて、入れ替わられたそれは、その入れ替わりを喜ぶしかなく喜んで、入れ替わったそれへ小さな匂いの白を一つ手渡し、その白の軽みと共にそれを広く高くへ送り出すなら、そこは柔らかく重く沈み掛けて硬く上り出の有りそうな薄くて草の根も溶かして草も生えようのない透けるような白い坂で、匂いはもっと薄くにさらりと拒んで。いやそこもここも無く、白い坂だけが間違いなく柔らかく透けて硬そうに白く坂をすぅーと上ってたみたいだね、って坂が嬉しがるしかなく嬉しそうに言うなら、その坂を上れるのは、その坂はそこに一つしかないからかに、嬉しくも一人しか居なくて、でも入れ替わられたもう一人も居るには居るんだけど入れ替わったんで一人しか居なくて、でも、なら内へ距たるしかなさそうに二人居ての一人で。それはそうだね、二人居なけりゃ一人でなんて初めから何処にも居られなくて、ってのが、そうなのかどうなのか、きっと知ってるのは、手渡され手に馴染んでもう丸く角張ってる一つの匂いの白だけだ

ろうけど、考える先から忘れられてて、って、何を忘れるんだっけ、忘れられるんだっけ、忘れられないなら忘れなくちゃいけないんだっけ、初めから。味は灰そっくりの匂いもしない白くないなら白く見て白い枯れ枝を、坂が白いばかりなら木に登って枝先に手を伸ばして折って集めなくちゃいけないんだよ、あぁ匂いが無いなんて、そのせいで冷たく硬い風と風の狭い隙間に逃げ込まれたみたいに燃やせない、なら塒へ戻るまでには棄てなくちゃ、だって棄てなくちゃ塒の匂いも嗅ぎ取れなくて、上った坂のまた少し先の南も北もない山を彷徨うだけだからね、棄てるなら山を嫌って西を向いてる浜に限るって、入れ替わられたもう一人からの、それは引き継ぎみたいで、でもそのもう一人へそう引き継ぐように迫って頼み込んだだけで、いや違うな、入れ替わられたもう一人からじゃない、入れ替わられたもう一人と入れ替わった、なのでもう一人を引っ繰り返した、見るからに見た儘の、木を嬉しそうに褒めてばかりのせいで顎が木の匂いに白く形を変えたのか、何時も喉に玉を閊えさせてる、翼を切り離した雌の鳥の背の高い瘦せた姿、あぁそれこそのそれだけが木かも知れないけどそれだけは山へ向かってさえ告げちゃいけない、木なんて何処にも無いかに、いや山こそそんなの疾っくに知っててその山の知ってるのを知ってるのを嬉しそうに、に、僅かに競い負けたかの辛そうに、その姿からだよね、そんなの姿じゃないみたいな、なのでそれだけが姿みたいな。だってそれが姿だった

ら、こっちは姿を無くして仕舞うよ、なんて戯れ言さ、って呟くのも恐ろしいなら出来なくて、つるつるした坂を右足は延びてずるずる、左足だけで踏ん張って、欲しいのは火なんだ見えない位に刻まれて小さな、だって火の小ささのその燃えてるのだけが、山を見上げても山から見下ろしても見付からなくて、でも浜は山の陰にぴたり隠れてるんで、浜にはきっと生きてるのに飽きてる色色な物凄い獣達がうとうと眠り込んで彼らの掟にでも従いながら犇めいてそうで、それを忘れてるだけで昨日だって奴らの中を擦り抜けて来てたに違いなく、え？何が違いないって、確かなのは獣達に見せ付けられたその怠け振りの燃え立つような物凄さだけだね、獣かどうかだって知れやしない、いや獣に違いないけど獣かどうかなんてどうだって構わなくて、その物凄さだけは取り敢えず、どんな匂いの白も届かずに、その外へ外へ狭そうに泥で濁った海でも渡りそうに。でもそんなの直ぐに海に呑まれて海も泥の苦みを引き摺るだけの見せ掛けで、奴らの物凄さなんて物凄くないから物凄いだけの物凄く無さでしかなく、なので酷い浜風も知らぬげに火は奴らの物凄く無さからしたら物凄くに見えない位に小さい程に、それより刻まれはせずに確かにちろちろと燃えたり出来て、でも燃やされるのは匂いもしない白い枯れ枝だけなのは、その火の味も灰そっくりだからで、そんな火の味に獣かどうかだって構わない奴らはすっかり虜で、腑抜けになって浜にへばり付いてるしかないって事かな。匂いの白も、

そんな物凄く無さとだけは近しく触れ合えて、何時の間にか灰そっくりの火の味も覚えたけど虜になるどころか却ってその火の味が匂いの白の虜かも知れず、だって毎日奴らの中を擦り抜ける度に、匂いの白の持ち込む白い枯れ枝に火は粘粘と舐めるように纏わり付いて灰そっくりの味を欲しがって、まるでその尻でも追うように。でも火に尻を追われる灰の色からは目を背けたいね。それだけは苦手なんだって、匂いの白は、毎日それを見て仕舞っては心に刻むけど、次の日には忘れて仕舞って。でももう已めよう、こんな事、って思えるのは、灰そっくりの火の味も灰の色も、そんなの白い枯れ枝を不味ければ不味い程已められずに噛んでるのと同じで態態浜へ降りるまでもないな、って分かって。

つて誰が？匂いの白が？それ、どの匂いの白かな、って浜を見渡そうにも、ただ浜へ引き千切られて行ったらしい匂いの白の霞む中に、何やらの物凄く無さしか眺められず。で、そうだ引き返すんだ、行かなくちゃいけないのは浜じゃない、って言えて、やっと入れ替わった一人は入れ替わって引き返しようもなく一人なんだって自らを匂いの白の中の、火なんて少しも欲しくない、灰そっくりの味も知りたくもない、そんな、坂を上り下りさえしてれば坂を上り下りしてられる姿にそれと見付けられて。そうして白い坂に独り切りなら、足らないも何もないさ。手に馴染んで丸く角張ってる匂いの白さえ一つ有れば。って、上から下、下から上へと内へ距たる身振りで一眺めに振り返れば、坂なんて、

白くさえなくてただ坂と呼ばれて坂らしいだけの、ぬるぬると内へ距たって足を滑らせそうな、中が虚ろな水の塊のような大きそうか小さそうかも知れない、大きそうか小さそうかが何を尋ねてるのかも知れなくさせる、薄そうなら薄い深そうなら深い水溜まりで、でもその窄まった底に、何時も喉に玉を閊えさせてる、翼を切り離した雌の鳥の背の高い痩せた姿が死んだ真似で横たわってそうって、何故そう思えて仕舞うか分からないのから逃げたいならその姿の喉の玉を燃やして灰にする程に凝っと見詰めたいんじゃないか、って、却って思い切りそれから目を逸らせば、その水溜まりの上に水など当たり前に撥ねて波に揺れるように乗っかって軽い足取りで踊ってるらしい、白より汚れて白よりもっと白い影のそんな形が、一つ切りの手に馴染んで丸く角張ってる匂いの白を、疾っくに一呑みにしてて。あぁそれでこそ入れ替わって良かったって言えるかな、って、一人は疾っくに身を硬くして水溜まりに突き刺さってて、いや違うよ、見間違いにも程が有るだろ、白より汚れて白よりもっと白い幹だけの木が、何故こんな事になったんだろうって苦しげに水溜まりに浅い根を張ってて、その倒れないようにその一人は幹に跨がって右左に張り出す枝みたいに腕を拡げて上げ下げして釣り合いを取ってるよ。でも身は、白より汚れて白よりもっと白くは成れないならの白で居るしかないのが、その自らの居心を知れずに木を頼るしか無さそうなら何とか木を褒めて煽てたいけど、今更に舌に残る灰

そっくりの火の味が、それを妨げてそうで。いや、これも酷く見間違ってようね、抑も一人じゃないし一人だった事もこれまでにないから。なんてうっかり思って仕舞うのもどうなのかな、生きて居られるには必ず見渡す限りの一人でなくちゃいけないに違いないから。でも一人で居るには、火を欲しいって思わなくちゃいけないんだ、なのにもうそう思いたくても思えないどころか、火って何だっけ、の、何って火だったっけ、の火なんて何であるもないさ。なんて、中が虚ろな水の塊のような水溜まりに、嘲笑われるみたいに尋ねられてないか。って見ると、そんな水溜まりなんて無さそうに、そこに入れ替わってるのは、白くさえないばかりに内へ距たってだけ穿たれたろう、坂と同じ傾きの低くへ延びて行きたそうな穴に見えそうなら穴で、いや少しも穴じゃないかも知れない、でも微かに寝息を立ててるようなら、そう見えなくても穴って見てなくっちゃ、うっかり吸い込まれそうで、こっちのそのそこでない丸ごとを。でも穴って呼びたくだけはない、だって穴って呼んだら、寝息どころかそれは確り醒めて尖った息の音が荒荒しく聞こえ、その音を火みたいにずっと凝っと見詰めてなくちゃいけなくなりそうで。なりそうならもうそうなってて、でも穴って呼んだ、覚えはないよ、そうか、火って何だっけ、が、それで、穴、って呼んでたんだ、って心付けば、火って何だっけ、は、もう消せないんだから、だって火を欲しいとも思えないんだから消しようもないよね、で、そう見えなくても穴

って見てなくちゃいけないそこは、穴って呼ばれるしかなく、そうとは呼んでなくても。でも遣りようは有るよ、火みたいに凝っと見詰めてなくちゃいけない尖った息の音に、火って何だっけの何って火だったっけを纏わり付かせ、その音に紛れさせれば、火って何だっけは、荒荒しかった尖った息を鎮めて、穴から目を逸らせそうで。いやまさか、穴から目を逸らすのこそ穴さ、だって、目を逸らしたそっちもまたそのそっちも内へ距たってだけそっちだもの、白くさえないばかりに。そうして穿たれ延びて行くので、そっちで、穴で。何処まででも延びて行くなら、白より汚れて白よりもっと白くでしかなくに。あぁぁその白くでしかなくにって、何時も喉に玉を悶えさせてる、翼を切り離した雌の鳥の背の高い痩せた姿と何が違うんだろう、いや、何が違うんだろうとは違う尋ね方をしなくちゃいけないけど分からなくて、それでやっと、そっちで、穴で、に、匂いの白の身を寄り添わせられて、丸く角張ってる匂いの白の新しそうな一つをまた手に馴染ませ、いや違う、丸く角張ってるけど、それって手に馴染む程に萎れて潤む、灰そっくりの火の味の、毟った草花を捏ねて丸めた粘粘してギザギザした塊で、だってそれを手で捏ねてる身が匂いの白では、その身を保つには匂いの白でないものを白を欺いてでも掴むしかなく、それがただ草と花ばかりって事は、そっちで、穴で、から、少しずつ、狭そうな外へと距たってそうで。の、外なんて内に決まってるさ、って、そっちで、穴で、に嘲

笑われるなら、その草と花の塊を投げ付けてでも遣ろうか、笑いを閊えさせて
咳き込ませてでも遣ろうか、けど、どっちへ？見渡したって匂いの白しか無い
なら、お座なりに己の剥き出しの身へ向かってとかね。白より汚れて白よりも
っと白くでしかなくに。あぁそうして、その白くでしかなくに、の匂いを身に
付ければ、身もきっと、穿たれ延びて行けそうで。いや、そのそんな身で、で、
しくじったかな、だって、延びて行けそうなんて、そっちで、穴で、しか無く
て。寄る辺ないかにその身を捩るなら、直に手の中で萎れて潤む塊は草花の面
影も無くし、灰そっくりの火の味を滲ませてどろどろと溶けそうで、火って何
だっけの纏わり付く鎮まった息が吐き付けられてだけ溶けずに居られそうなら、
何ってて火だったっけみたいな振りの塊は、どろどろから少しまた草花の面影は
無い儘にも萎れて潤む姿に戻ったろうか、渇くように、中が虚ろな水の塊のよ
うな水溜まりに投げ遣りに投げ込まれたそうで。手放しさえすれば、そんな水
溜まりなんて何処にも有りそうでも、灰そっくりの火の味がきっと水を拒むだ
ろうな、って、はらりと手放すと、白より汚れて白よりもっと白い影のそんな
形が、それを一呑みにしてて、って何を？丸く角張ってる匂いの白しか呑めな
い筈なんだけど、弾みでか物珍しくてか、その塊を呑んだならきっと喉に閊え
ようけど、白より汚れて白よりもっと白い影のそんな形は、軽い足取りなのは
ひもじさが増すばかりかに、中が虚ろな水の塊のような、でも水溜まりじゃな

い上で何食わぬ顔で踊り直すようで、だって、水溜まりには、白より汚れて白よりもっと白い幹だけの木の浅い根が相も変わらず苦しげにびっしり張られて、の水溜まりは何処かって探すと、白より汚れて白よりもっと白い影のそれんな形の陰に隠れ損ねて捩れて窪んでて、だって、きっとその上で誰も踊って呉れなくて水は濃くなってぬるぬるして行くらしく、でも、なら、その捩れて窪む姿を、もっと捩らせ窪ませ、誰かに踊って貰うより楽しそうに自らを震わせようかな、潤むばかりに草花を捏ねて搾った黒く透けた匂いを歓びの弾けるように滴らせ。それに震え上がる白より汚れて白よりもっと白い幹だけの木の浅い根を見下ろす、白より汚れて白よりもっと白い影のそんな形は、少しもそんな形じゃないような萎れて潤んでそうな何でも食うような顔で、「坂だもの、溜まらないんだよ水は。溜まる水も有ったけど、ぺろぺろ舐めてまで呑み果てて呑み損ねた露は弾かれ滑って流れて。なので初めからそこのそれは水溜まりじゃなくて。なんて言わないよ私は。」それって、水溜まりじゃなくて水溜まりなんだ、って言わないって事かな、それって、水溜まりなので水溜まりじゃないんじゃなくて、って言わないでも言ってるなら、水溜まりだよね、水なんて溜まらなくて少しも構わない儘に、だって水溜まりなんて誰も見た事ないし、だって水の事もその心も誰も知ろうともしないし、とか、そんな。だって、そんなそんなは溜まるばかりだよね。水の他に何が溜まるのかな、水の他の何も

かもが溜まる他に。「そうもそうもないも私は言わないよ。なんて言わないよ私は。その私の、そうもそうもないもなく。の私なんて私なんて言ってなくて私の私じゃ無くて、なので、私なんて言わないよ私は。だってそうとしか私は、私じゃ無くて。なので私は私なんて言ってないよなんて言わないよ私は。」そう遣って何もかも言ってるようで、言ってるようなら言ってるよ、そう遣って何も言わなかったかに確り何も言わずに、あれこれと。そうと分かれば何も聞かなかったと同じに何もかもより少ないので酷く多い何かを聞かされたとも分かって、その分かった分からなさを、その白より汚れて白よりもっと白い影のそんな形へ、それへの眼差しを通して投げ付けると、さてそれで、おっと、いや違う、分からなさなんて無いんだ、その分からなさの無さしか言ってないね、これ見よがしに、白より汚れて白よりもっと白い影のそんな形は、内へ距たって。って、内へ距たるを、初めて色形の有るように目にしたみたいに、目の中の汚れを拭い棄てるみたいに、それを外へ距てると、その、内へ距たるは、自ら内へ距たってきっと外からの、いや違う、外への嫌さから穿たれ延びて行くので、そっちなんて無く、穴で。なので穴なんて言わなくて構わないし、穴とは言えなくて、なので、ここはここごとそこで、のそこなんて何処でも無いさ、って言えば、ひんやり白くに何処でも無さそうなので、そこでしか無く、身はそこにしか居られない匂いの白かと探られる身の匂いの白なんて身でも匂いで

も白でも無さそうなら、その無さそうの有るか無いかの渋渋とでも手堅く縁取りでは有りそうで、きっとそんな縁取りならそう自らを縁取った足だけは生えてようね、手は生えてなくても。だって、手なんてもの、引かれたばかりでまだ柔らかい縁取りを引っ掻いて掻き消すだけで、手もそんな手を嫌さに耳に形を変えて、あぁそれで、聞こえたんだ、って何を？いや何を？なんて要らない、耳に聞こえたならその聞いたのが耳なだけで、って何の手応えもなく虚ろに唱えながらずんずん歩いてるなら、身でも匂いでも白でも無さそうの縁取りは、足を生やすだけより少しだけ食み出してて、ならそれって、身なんじゃないかって、身でも無さそうを打ち消すと打ち消せた替わりに、身は無さそうの縁取りに匂いの白になって溶け込んで、なら縁取りって、匂いの白の身なのか、って、振り返ると、縁取りは裏返って縁を失えば、匂いでも白でも無さそうだけが、身を内へ距てて、ぴたりと匂いの白で。足なんて生やしたって足なんて生えてない、何の手応えもなく。欲しいのは耳なんだ、足なんて生やしたって足なんて生えてないの形を変えた、そんな。手の形を変えたんじゃなくね。で、そんな耳は手に入ったの？アハハ、耳に形を変えた手の？そうさ他に無いよ、そんな耳だよ、なので手に入りようもなく、それでそんな耳で。で、そんな耳なの？知らない。でも、耳に聞こえたならその聞いたのが耳なだけで、って何の手応えもなく虚ろに唱えながら歩いてるなら、何を知らないも知らなくて済

んでて、なら、もう何を唱えて歩かずにも済んでて。でもそれって、その耳に聞こえただけの耳の姿にうっかり微睡んで、白より汚れて白よりもっと白い幹だけの木の浅い根の水溜まりを失って水溜まりに浸ってる姿を真似てるのに音も無くそっと巻き込まれて、ぴたりと匂いの白で。でもそれって、水溜まりを失って水溜まりに浸ってる根の姿に絡まる自らの姿を、ギザギザに引き裂きたいだけで少しも引き裂けてなくて、それで、白より汚れて白よりもっと白い幹だけの木なんて空を向いた水溜まりの影だろうな違いない、なら、その水溜まりの影を水溜まりに映したのがその根にも違いなくて、それに絡めるならその自らの姿だけは、影じゃないぞ、って、唱えて歩くしかなくなってるの足の生えてないのも直ぐに心付けば、でも足なんて何時でも生やせるさ、って耳は、その足のせいで何も聞けないなら耳じゃなく、耳じゃないなら、生えるまでもなく、ただ足で、その足を内へ距てて、ぴたりと匂いの白で。なので足はきっと、つるりと音を立てるように黒光りしてて、何処へも行けるように真っ直ぐ先へぐんぐん歩いて見失われるって決まってたみたいに見失われれば、それを内へ距てた匂いの白は、それを見失う為の一つ目で有るしかなく。で一つ目なのか、知らない。知らないなら目は数じゃない、数じゃないなら火か水かな、って、見れば、って何を？山と浜の往き来を逸れれば行き着くしかないって決まってたらしい、そこは岸辺なら見てるのは水で、なら、数じゃない目は火な

んだ、って目を、その岸辺の暗さに誘き出されたかに生えたばかりの茸みたいな片手で擦っても、ぬるぬると指を擦り抜けて冷たいだけで、なら間違いなく目で、匂いの白は、そこに屈んで、流れる暗い水で目を洗うと、向こう岸は荒れる海の向こうに消えて砕けそうな離れ小島みたいに遠ざかって、そんなの見たくない、って目を逸らせないなら、掌に暗い水を掬って手鏡にして、己の目を覗き込むと、その目はその鏡の奥の薄い砂の一欠片のような鏡に流れ星程に小さく映る、大きな川の流れに注がれてて、あぁそんな事で見付かる川なら渡らなくちゃ、って、誰が言うんだっけの匂いの白は、一つ目で有るしかなかった片目は火に燃やされて失ったらしく、何処からかのもう片目で掌の水鏡に己を覗き直すと、二つの目と二つの耳を溶かして混ぜ合わせ、その自らの身から溢れんばかりにしてる、だって二つと二つなんて多過ぎるよね、そんな姿の、どっちから見ても丸っこい小さな肉の塊、いや違う、水に濡れれば肉に見えて仕舞う声の一塊が、誰が言うんだっけの匂いの白に、何かうずうずと話し掛けたそうで。なら、話し掛けたそうなのは先ずはきっと匂いの白で、おーい、えっと、どうしようかって何を？でもそれ声じゃないよね、匂いの白は匂うだけだもの、でも分からない、だって、その丸っこい一塊のうずうずはもう、「あぁ、」って、声を返して来て、「あぁ、って何が？なんて言わないよ。だって離れ小島みたいな向こう岸で、そこで何時も燃えてる火に幾ら燃やされても燃え

ずに、それで二つの目と二つの耳は溶ける儘で、でもそんな事じゃないんだ、って何が？欲しいのが燃える身でもないなら時だよ時、火で燃やせる、そうして灰を暗い水に流せる、灰は軽くて水を弾いて、星明かりをせっせと蓄えれば、水を浮いて灰だけで翼の形で、時の底を這う平たい風にも乗れそうに。あぁ、そんな風に乗りたいんだよ、でも何時まで経っても翼の形は軽くたって浮いてる水より重くて、いや水より重いのなら却ってどんな風も放って置かないかな、火で燃やせる時なんて初めから、これと言う徴もなく、その灰なんて徴もないさえ無く、知らない間に水に混じって、どうやらそれを啜って呑んで仕舞ったいらしく、腹の中をその灰の泥が数えられる星がぶつかり合うような音を籠もらせてようか、その音の篩いに掛けられたみたいに、白より汚れて白よりもっと白い幹だけの木が、腹の中なのか外なのかどっちでも無さそうな辺りから浮き上がっては沈んでて、それを、見覚えが有り過ぎて産まれた時からそれしか見てないような、なのでクネクネした若い女に似た岩の匂いのする体を抱き上げるてみたいにして、引き寄せると、そのクネクネの丸っこい真ん中は、そこにすーっと刃を立てたみたいに静かに止まった儘に裂け目を開け、その微かに覗く奥行きが内へ距たるなら、それは女の体の何処からも入れない奥まった真ん中で、って見えて仕舞うなら、そこは灰の泥を呑んだ捩れた腹の緊く塞がれた底に違いなく、なら、若い女に似たなんて見覚えが有り過ぎて要らなくて、静か

に止まった儘のクネクネと開いた処だけを力も入れず力尽くで岩を裂くみたいに押し広げると少しも押し広げてなくて、その押し広げてない中へ、白より汚れて白よりもっと白い幹だけの木は自らの身をぎこちなく辛そうに裏返し、それをまた抱き上げ直すみたいに引き寄せると、引き寄せる程に、それは低く脹れ掛けて切れ込むように逸れて、森か川に突き刺さって剣が突き上がるような形の大きな石の片側に穿たれた奥へと丸っこく拡がる室へ、狭そうにその身を拗り込ませ。そうしてすっかりその石室に身を収めると、それはくるりと向き直って、目と目が合うと、そんな目と目なんて有る筈も無く、その石室に収まる身は放り棄てられるように、内への距たりに捧げられる為の、白より汚れて白よりもっと白い、えっと、何だろう、収まってもやっぱりクネクネしてて、でも要らない若い女に似た体にしては、それともまるでそうで無くたって陰ばかりで出来てるようで、なら却ってぴたり若い女の体って呼ぶしかないなら呼べなくて、あぁ、ならそれって間違いなく、この私だよ私、だってクネクネした陰だもの私、女みたいなら女な、って、つい勢いで女っぽく言えそうな、そんなのずっと若い儘に決まってて、って見え透いた嘘を吐かせるかに、って誰が?って己が己に尋ねられるのは灰の泥しか無さそうなら、灰の泥でだけは無く、あぁ、ならその灰の泥を己の姿みたいに見下してる、向こう岸まで渡さなくちゃいけない、つるりと音を立てるように黒光りした足を生やした匂いの白

の、遣って来たばかりの眩しく澄んだ目を伏せてる幼げなあんたに話し掛けられてる、確かに形の有る姿。な私。あぁぁ姿に形なんて有っちゃいけないんだ私、若い女にぴたりって何？それを考えて反吐が出るならその反吐を捏ね回したんだよ、それ。酷い事になるのは分かり切ってたさ、中でも酷いのは、その酷い事を尋ねられる儘に全てを言い尽くさなくちゃいけない事、そんな私、そんな為の口じゃ無いのになモグモグ、の口は噤みっ放しで、なら、腋の下でもパコパコさせて短い声を繋げてるとか。いやそんな事でもなく、声なんて何処からだって出っ放しで私、流石にもうあちこちに溜まって腐って酸っぱい匂いを立ててるよ、それを、選りに選って、って言ってもそれしかないんだけど、白より汚れて白よりもっと白い影のそんな形は、少しもそんな形じゃないような萎れて潤んでそうな何でも食うような顔をして静かに止まった儘に内へ距たりまくって遠くまでザワザワと散り散りに笑うんだ、いや違う、いや、その、いや違うが、それだけですっかり古くからずっと変わらずに饐えた笑いで、それで笑うしかなく、なら笑えずに、いや違う、の何が違うかって、笑いが笑いを違わせて笑うんだ、アハハを裏返し損ねる振りで裏返し、そんな声なら幾らでも出せるさって薄っぺらな遠くまで誇らしげから檻褸が出て、でも檻褸が却って白よりもっと白くて、全く何て事だよ、それでそれが何処に居るか探さなくたって隠れようもなく、少しもそんな形じゃないような萎れて潤んでそうな

何でも食うような顔にザワザワと音もなく根を生やし枝を伸ばし、白より汚れて白よりもっと白い影のそんな形に、ぴたりと己の姿を当て嵌め、それって何処を見渡してもそれしかないのでそれなそれだよな、って、誰にも言われなくてそれで、だって、それって、白より汚れて白よりもっと白い影のそんな形の、全く何処でだってその形でしか無くてそんな形に、石より硬い木みたいに空を覆うなら先ずは空が固まって動けないみたいに定まってて、なら姿を現すなら硬い木の姿でしかなく、喋り過ぎが崇ったかに黙って黙り過ぎてる顔に崇られてるなら、何一つ、それには怖くて近寄れずに、の何が何一つか、って。それで、それより後ろには何の徴も無いなら、そのこっちには何でも砕いて腐らせる色をした、仄暗く輝く川が細くクネクネと流れ、流れてる間にすっかり幅を広げ、あぁもう離れ小島みたいな向こう岸なんて私が私をザワザワ煩いだけの戯れ言だったんだ、なんて事を言う奴は、川から湧いて出た刺刺した虫か何かに肉を裂く高い音を立てて喰われて跡形も無く、替わりに、白より汚れて白よりもっと白い、その白過ぎる狭さが、自ら息を塞げないなら雷に撃たれてでも死にたそうに、黒雲の湧き返る狭苦しい空を空からさえ閉ざされるように見上げてて、その膚の色が川よりもっと仄暗く輝けば女の切り出されて腐り掛けの肉みたいで、尤も肉なら女しかないよね男なんて肉どころか骨すらしゃぶり尽くされて溶けて無くなってて、いや抑も男は何処にも居られなくて居なくちゃ

いけなくて辛うじて、でも身投げも出来ずに縺れた足は突っ立たせて女で無いだけで、って、話しを繋げたいだけの嘘で、って声は粉粉に砕かれて白過ぎる狭さは、だらしなく戯けた姿を晒すしかなく。まるで、いや、まるでの後に見た事もない程に醜い物の終わらなく長い名を言い当てようとした筈だけど、真ん中が罅割れた舌が尖って縺れて、その醜いのってその舌の縺れ方じゃないの終わりの無い、って言い直せば、黒雲は泥水よりずっと濃くて重くて今にも砕けそうにも慎ましく凝っと静かに身を捩ってる凍った石みたいに白くキラキラ固まって、もう雷の落ちる筈も無いなら生きるしかなく、直ぐ目と鼻の先の遥か見知らぬ処へ旅に出るみたいに、噤んでも噤んでも声は涎そっくりにダラダラ漏れて、その声のせいさ醜い物の名を言い当てたくてそれっ切り身動き取れないのは、だったら、そんな舌を捻曲げて、ぴたり要らない女でしかない肉そっくりにして、それがずっと誰にも知られず埋められてたんだ、って掘り出したら何が生き返るんだっけ、の、見た事もない程に醜い物の名は、目と鼻の先よりもっと遥かな光りに運ばれて来るしかなく透けて軽そうに燃え立つようで、その確かに形の有る、その名との戦いだけが安らぎな姿は、白より汚れて間違いなく白じゃ無いので確かに有る形は少しも定まらなくて確かに有る形で、って何処に。なら言える、その、それだけが居られる時の中だよ、止まってもないのに短いだけ短い時、それより短いなんて時の外にさえ無い、そんな。なの

でその姿は名との戦いだけが安らぎなんだろ、全てはその時の短さのせいなんだろ、って、声じゃ無く、ならその無い声を呑んだ小さく開いた、ずっと光りに当たり過ぎたせいで爛れて、口でも無くなった口で。あぁその口でも無くなりったの、動きの取れない裂け目の震えるような動きって、見覚えが有り過ぎて、なやっと戻って来たよ戻りたかったんだ、って思えてならなくて、でも何処へ、なんて尋ねちゃいけないんだ、どっち道、目と鼻の先だもの。でももう尋ねちゃったせいで目も鼻もその爛れた口でも無くなったに囓られ、その儘に醜い物の名みたいに戯けた姿で今にも水に落ちそうなら俄造りの窄んで真下へ尖って落ちて行く闇に消えるように落ちてて、でも落ちてても落ちてても戯ける姿に変わりならグリグリとまた囓られた儘の姿で、それを囓り続ける口でも無くなったに戯れるように伸し掛かって、口でも無くなったは、愚かしげにぱっくり開いた裂け目でしかなくなれば裂け目でも無くなって、その奥に覗く数知れない小さな尖った歯が、もっと愚かしげに燃えるように焦げ臭く光りを卑しく溜め込むみたいに酷く輝いて、その溢れ返る煌めきは反吐なんか押し流してドクドク吐き出されて重そうに転げ、白より汚れて白じゃ無いので確かに有る形は少しも定まらずに確かに有る形がそれを受け止めれば、形は煌めきに固められ、開く儘の裂け目でも無くなったに硬く身を固め、そうなれば硬さは、とろりと眠るみたいに冷たそうにぴたりと閉じて白白と。あぁ何で閉じるんだ有り得な

いだろそんなの、って、それより短いなんてない短いだけ短い時が為す術無く身を焦がすように嘆くなら、そんな短い嘆きは、誰の目も眩まして何処へでも弾けて逃げられるだけ逃げて行けてそうで、って何処へ？の何処も有る筈無いさ、だって、何処もが無いから凝っとした何の助けも求められない嘆きになるんだろ、って、短過ぎる時に言われて裏切られたみたいに、冷たく閉じる口でも無くなったは、今にも水に落ちそうな闇なんて当てにならずに窄んで落ちるのも儘ならず、それをもっと冷たく何処からともなく見下すのが硬い木の姿だけでは、もう口でも無くなったでさえ無くて、冷たく閉じてるって冷たく言っとけば何が閉じるも無しに済んで仕舞うだけのもので。ええっと、あのね、さっきから、そこに居てここに居ない私は、ずっと私のそこの事だけ喋ってるんだよ、なのに何故そんな私の姿を誰にだって見て取れそうかって、そりゃあんたの、ふっくら柔らかそうな掌の水鏡をずっと覗き込んでるからさ、つまり私じゃなく、その水鏡の中の冷たく閉じてるって言っとけば済んで仕舞うだけが、喋る振りで黙り込んでるに違いなくて。あぁなので、私は、じゃなくてな私を憐れみ続けなくちゃいけないのかな。それで、仄暗く輝く要らない女の肉みたいに、いや何時まで私、女とか言ってるんだろねそんな私とか飽き飽きしながら、何でも砕いて腐らせる色をした仄暗く輝く川に浸かったり川から上がったりを繰り返してるんだけど、もしあんたの掌の嫌で嫌で吸い込まれそうに

澄んだ水鏡を振り払えたら、今にも砕けそうに身を強張らせてる凍った石みたいに白くキラキラ固まって笑うしかない酷い事を待ってそうな黒雲は崩れて空から水より濃い煙みたいに真下へ落ち、その奥のもっと高くに瘡蓋を剥がしたみたいに絶えず雲を足を生やした蜘蛛みたいに動かしてる空が固まってるのが円く曝け出され、それに見付かってその恥への怒りにでも任せて冷たく閉じてるって言っとけば済んで仕舞うに狙いを定め、ちょろちょろ鼠の戯けるような白いばかりに一つ煌めくだけでこの星より重い雷を落とせば、死ねるか死に損ねるか、どっちにしろ、それを見下す硬い木の姿は、きっとまた、白より汚れて白よりもっと白い影のそんな形のお座なりにおどおどした振りだけして、そんな自らを楽しく嘲笑って、さっさとぴたりと戻って、木よりももっと黙り込むなら、内へ距たる酷く、遠くからこそ、馴れ馴れしく話し掛けても来ようかな。違うの？も何も、あんたの掌の水鏡って、ただぱっくり開いた裂け目でも無くなったしか映してないなら、そんな水鏡に見せ掛けたそんな裂け目でも無くなったで、酷く輝く小さな尖った歯が所狭しと焦げ臭く醜く蠢いてるのが覗くなら、そりゃ必ず覗くよ、硬い木の姿は、その輝きにうっとり身を強張らせるように照らされ、無かったようなら醜く確かに有る後ろへ白より汚れて白よりもっと白い影を遠くとは逆さの向きに延ばし、影は誰にも話し掛けられたくなさそうに痩せ衰えた雲みたいに恥への怒りにでも任せるかに起き上がって、白の

腐った匂いを撒き散らしながら硬い木の姿を呑み込めば、それは白より汚れて白じゃ無いので確かに有る形の姿を現し、そんな形なんて直ぐに消えるに決まってるって思うより先に消えるので、見えない筈の、それより短いなんてない短いだけ短い時は、その短い時を飴みたいに暗く引き延ばされ、みっともなくもその儘で居なくちゃいけなくて。でも、どうなのか、それより短いなんてない短いだけ短い時が今更引き延ばされるなんて、怪しさを見せびらかしたいかに怪しいよ、まるで見せびらかされた怪しさの私かに、は要らない言い草で。だって、それより短いなんてない短いだけ短い時なんて、疾っくに引き延ばされるだけ引き延ばされてて、それで何とか闇に蓄えられてた何かの色でも着きそうなみっともない短い時で、その短い時より長い全ての時が見窄らしく縮むばかりなのを独り嗤って見下してられて、って、他に出来る事も無く。ふん、そんなのきっと、どっちも時じゃないし、短いも長いもない、なんて誰が言うのかな、なんて言わないよ私は。あんたなんて時が何かも言えないよね、だって足とか生やしてるもの、足なら動いて時をぷくぷく泡ぶくみたいに生み出そうものね、泥の重みみたいに、なら、もっとそっちの、と言ったって、白より汚れて白じゃ無いので確かに有る形の消えたよりそっちしかないそっちだけど、いや違うな、そっちにそっちもどっちも有るもんか、なんて私が言うのかな。そしたらそんな私は、そっちじゃないの時じゃないに呑み込まれるかして見失

われ、その呑み込むかした、如何にも川から湧いた刺刺した虫で有りたそうな奴は、それより短いなんてない短いだけ短い時みたいに虫で有りたそうな儘に引き延ばされ、その引き延ばされ過ぎて見失われた姿を探しに、何処へ行くかって、そりゃ白より汚れて白よりもっと白いの他に無いって分かってても、そんなのきっと時の中にしかなくて、そっちじゃないの時じゃないんじゃ、さぁ、どうしよう。いや違う、そっちじゃないの時じゃないんで塞がれた時の中にだって転げ込めるんだ何かの慰めかに、って誰が言うのかな、なんて言わないよ、って誰が？消えた白より汚れて白じゃ無いので確かに有る形しか見当たらないよね、って、何処に？だから、そのそいつに見渡せて、そいつがそいつの消えた形を見て取れる処しかないよ、って、何処を覗き込んでるかって、ただぱっくり開いてるにも飽きたかの裂け目でも無くなったしか映してないあんたの掌の水鏡なら、消えた形のそいつは、掌の水をその薄い暗さに駆られて啜る振りで、鏡の中へ窄むのも忘れて落ちて行き。なんて言わないよ私は、だってそいつにそれを言わせたいんで。その声の白の腐った匂いを撒き散らす様を、その内へ距たる声自らに落とせない染みみたいにザワザワと思い知らせたくてね。いやそんなの初めから声じゃないって分かってるけど、その声じゃないに声じゃないの姿の鏡に映るの声を見せ付けたくて。その姿ったら初めから白の腐った匂いでしかなく、なので腐る前の白なんて無く、白は腐って匂って白、って、

ほら見付けたよ、白は腐って匂って白が、白は腐って匂って白を。って何処に？って、そっちじゃないの時じゃないが、ここだ！って自ら醜い名を叫ぶみたいに、裂け目でも無くなったの奥へ低く回り込み、その行き止まる先も無さそうなら、そこは、何処からも入れない白く光る内へ距たるばかりなる鏡が、森か川に突き刺さって剣が突き上がるような形の大きな石から産まれて尽きない玉みたいに沸き返ってて玉って、あの、翼を切り離した雌の鳥の背の高い痩せた姿が、何時もその喉に閊えさせてる他に無いさ、違うの？違ったって構わないに違いないさ、あぁそんな音を…、音？それって私の声かな。」ほぉほぉ成る程、そんな声だもの、何も聞こえなかったよ、なんて言わないよ、生やした足から泡ぶくみたいにぷくぷく生まれる時は、って誰が言わなくちゃいけないんだっけ、って誰に尋ねられてるんだっけ、ま、そっちじゃないの時じゃないの他には無さそうかな。いや、他なら幾らでも有るかな、だって、引き延ばされるだけ引き延ばされたそれより短いなんてない短いだけ短い時なんて、どっちに足を向けたってジャリジャリ踏ん付けて仕舞うに違いなくて、白は腐って匂って白い掌に、何処からも入れない白く光る内へ距たるばかりな鏡が、沸き返るように音も無く、裂け目の形を、裂け目で無くなっても無くなっても象り続けるようなら、象り続けられる裂け目一つ一つが、一つ一つ小さな玉を銜えるように、引き延ばされる筈なんて無い、それより短いなんてない短いだけ短い時に、

ぴたりと貫かれてて、そのぴたりが白は腐って匂って白で。あぁそんな白をゲ｜ゲ｜吐けたらな、そしたら、この身は幾ら虚ろだって、その虚ろより内へ距たるその虚ろが白は腐って匂って白より他では無い、って見せびらかして遣るのにな、ぴったり怪しげに。あの、何時も喉に玉を悶えさせてる、翼を切り離した雌の鳥の背の高い痩せた姿に向けて。あぁぁそしたら、あの姿だけは、白が腐るのを知らずに居られる、って言うか、あの姿には白が腐るなんて事は初めから有り得なくて、なので初めから白を吐き続けてて、なので、あの姿だけは、何の白より奥まった処に、そうだ、あの森か川に突き刺さって剣が突き上がるような形の大きな石に穿たれた石室みたいな処に、それより短いなんてない短いだけ短い一つ限りの時にぴたりと包まれて、いや、だったら疾っくに石室とかつるりと飛び出して、その一つ限りの時を、その底まで剣のように引き延ばし、益益それより短いなんてなく何処までも短くして、ならそんな短い時ばかりが、泡ぶくみたいにぷくぷく生まれてるに違いなくて、って何処に？いやその何処にでもだよ、の何処にでもって森か川の他に無くて、川は、裂け目で無くなっても無くなっても象り続けられる裂け目一つ一つに流れ落ち、そこで繰り返し洄れ果てて続けるなら、森はもう、あの姿の吐く白で白より汚れて白よりもっと白いかどうか分からずに居て森で、そうかそれで森は、あの姿の喉を悶えさせてる玉なんだ、って、泡ぶくみたいにぷくぷく生まれてるそれより

短いなんてなく何処までも短い時に囃し立てられれば、玉は、逆さの坂を逆さでなしに転げたそうに喉の奥へ行くのか、却ってその奥って喉より外なのか、って、自ら内へ距たると、その距たりの儘に玉は、自らが何処までも逆さに下って行く坂なんだって、その自らの内側に映し出された自らの姿を、そっちじゃないそっちじゃないって、泡ぶくのそれより短いなんてない時に言われながらでも、窄んで行く闇へ何処までも下って行く逆さの坂と見て取って、闇の窄むせいで却って逆さの坂は奥深そうだぞ、って、誇らしげから襤褸が出たか、却って襤褸は取り繕われたか、玉は裂け目になって、そこから喉の奥行きを呑み込めば、裂け目は直ぐに塞がって、時はまだまだ何処までだって短く短く底まで窄んで、その先の短さの中へ中へ自らを閉ざし閉ざして、もう短さも無くなれば、時の短さの無くなる？アハハ、って、何が笑うんだっけ、それなら匂いの白だろうね他に無い、だって、あの姿が翼を切り離した雌の鳥の背の高い痩せた姿だって知ってるのは他に無いもの、だって、あの姿へ一つだけ入り込める裂け目からだけ匂い出て匂いの白で、って、言ってみたり出来るのは匂いの白しか無さそうなら、匂いの白でだけは無いね、って言えるのは匂いの白だけで、いやそれこそ襤褸どころか身一つにまで剥き出されて産まれたばかりかに嬉しさに身を震わす匂いの白は、振り返っても振り返っても逆さの坂を転げ落ちるのとは逆さの時をなぞり、それを嘲笑ってるに違いない、白より汚れて

白よりもっと白い影のそんな形ってどんな形だっけ、って、なぞれる限りの逆さに時でその形を象ろうと笑いたくて、だって笑いだけがものの形を象れるから、でも笑えなくて、形は象られ掛けては崩れに崩れ、それなら笑えるかなって思い付くより先に、その崩れて象られても形で無いに笑われて、なら、その形で無いに匂いの白は象られてるんだ、見付けたぞ！も何も、そんなの初めからで、なので一つだけ入り込める裂け目からだけ匂い出られて匂いの白なんだ、ってのも疾っくに分かってたさ、なんて言ってみたって笑われるだけで、笑われるだけなら笑い声は何処からも聞こえて来ないさ、その来ない向きを探しに、必ず足は逆さの坂の匂いを追って進もうと、爪先は、白より汚れて白よりもっと白い影のそんな形の確かな声を聞きたいなって耳の形でもしてそうで。アハハ、ってそれを窄み果てた闇より遠くの耳の形が笑うなら、逆さの坂を転げ落ちるのは耳の他に無いかな、って、逆さの時に笑い返されれば、逆さも逆さで無くなって逆さで、「そうもそうもないも言わないよ。なんて言わないよ。その、そうもそうもないもなく。なのでそれって、逆さの逆さの事だよ。なんて言わないよ、逆さの坂は。だって逆さじゃ無くて逆さだもの。なんて言わないよ。」知ってたよ、の、知ってたが匂いの白なんだって匂いの白が白を匂わせると、何も知ってないのは、白より汚れて白よりもっと何なのか知れない長くも短くも無さそうな時に、裂け目に埋め込まれて切り刻まれてる自らの姿を食

べ尽くすように言われてるから、それで、分かって。そうさ、その自らの匂いの白の姿をすっかり食べちまえば、分かる事なら何だって分かるんだ。なんて事、初めから分かってたように思えてならないのは、翼を切り離した雌の鳥の背の高い痩せた姿が、何時も喉に玉を閊えさせてたのを、ずっと見続けて来たからに違いなく、だって、喉に閊える玉の他に白なんて無いに決まってて、だって、その白を食べ尽くしたいの他に匂いなんて無いに決まってて、嘘だけど。そりゃ嘘さ、そう言いたいだけだけど、だって匂いの白はもう、疾っくに逆さの坂を逸れる振りで、逆さの坂を内へ距たる振りで、逆さの坂を縁取る振りで、何の振りもして無くて、逸れて内へ距たって縁取って匂いとも白とも知れなくて、だって、何だって知れてるからね、って、逆さの坂は、匂いの白を産んだく覚えを覚え直して忘れて、それで逆さの坂で。「そうもそうもないも言わないよ。」そんなの誰にも言えなくて、嘘じゃ無さ過ぎて、何の事でも有り過ぎて、言ってる事が言ってる事過ぎて、煩いんだよ、なんて言うのも煩いけど、煩いなんて、逆さの坂は白くて狭過ぎるせいで、白より汚れて白よりもっと汚れた水が裂け目を拡げる、その裂け目ばかりが流れ込む川が逆さの坂に流れ込む音に掻き消され、その坂の膚の色が白より水より裂け目よりもっと仄暗く輝けば、逆さの坂は逆さごと内へ距たって、何時も喉に玉を閊えさせてる、翼を切り離した雌の鳥の背の高い痩せた姿、いや違う、それとまるで違う姿がその姿な、

そんな姿がその儘な剥き出しの姿を晒せば、匂いの白は匂いの白とはまるで違う姿を自らの匂いでも白でも無いで引き裂いて、そうして象られ過ぎて象られない身は、逆さの坂の膚の色を、白より臭いなら何より臭い生えたばかりの歯を立てて食べ尽くそうとしてないかな。無いよ！だって、坂は逆さじゃないか、アハハ、も逆さに笑えてるのかな、ただ痩せてる姿は、それで背を高くして、なので雌の鳥でしかなく、雌なら翼は切り離され、だって、そんな事、坂の膚の色が逆さなだけの姿を映してるだけで、って、何処に？「そうもそうもないも言わないよ。」って、聞こえて、それっ切り何も聞こえない処で、その聞こえなさこそ初めっから煩かったんだって分かる処で、そこが玉を喉に閊えさせてるんだけど、なら、喉に閊える玉は何が逆さかって、あぁぁ、それを繰り返し尋ねて居たい、玉は何が逆さか玉は何が逆さか、玉に逆さの答えが無いなら何が逆さも無かろうに、って、繰り返し疑って居たい。そしたら、「そうもそうもないも言わないよ。」を、そんなの誰にも言えないかどうかも疑えそうで、「それはね、お前が自らの姿を食べ尽くして仕舞える程に自らを分からない程に、匂いの白で産まれた儘の姿だからだよ。疑って尋ねてをクルクル繰り返し、すっかり丸くに似せた玉で。その閊える喉なんて逆さの坂みたいなものさ、逆さの坂って、ただそのみたいなもので逆さの坂で、なので、何処まで奥だか知れない喉のほんのとば口に閊えてられて。それも、匂いの白で産まれた儘の姿

を食べ尽くして、そんな姿で居られるからさ。どうだい、すっかり甘かったろう、そりゃ産まれた儘の自らの姿だもの、嘘だけど、嘘じゃ無さ過ぎて。そんな嘘とか嘘じゃないに足を取られて取られない事より、ただ痩せてる姿の、ええっと、それって、ただ痩せてる姿なんだよ、背の高さとか雌とか鳥とか翼がどうしたとかって、ただその姿をその姿に映し損ねてその映し損ねから捏ねくり出された色形でしかないよ他の色形に逆らえそうなだけの、違うかな、違ってたって、お前はもうそれを甘い甘いって、喰っちまったからね。でもここで笑っちゃいけないし、笑えない。アハハハハ、その笑えなさで、産まれた儘の匂いの白なのさ。アハハハハ、それをお前が分かってたか分かってなかったか、誰にも分かって分からないけど、けど、誰にも、って言ったって、この声を聞こえてる耳を持つ、ええっと、それって、ただ痩せてる姿なんだよ、それっ切りのそれだけさ。それっ切りなばかりに、お前はそれだけは喰えなくて、それで、ただ痩せてる姿は、お前を匂いの白に産むしかなく、そうして、ただ痩せてる姿なんだよ、ただ匂いの白には。で、何処へ行っちまったんだ、そのただ痩せてる姿は。匂いの白を産んだっ切り、その姿の中へ内へ距たって姿を消して、その消えた姿の内へ距たる姿を、何処へ行っちまえるもなく、匂いの白の届かない外で、笑えなさを笑ってて、の笑えなさだけを、お前は分からなくて、で匂いの白で、とも分からなくて、それでまだまだ喰い足らなくて、喰えるも

のなら何でも、の、そんな何でもなんて匂いの白しか無いって分かるなら、その姿は、その内へ距たってようね。でも内へ距たってようね、に似せただけの姿だろうね、どっちも同じだけど、その同じが、どれをも違えて違えて、その果てに匂いの白、みたいな。なら、その、みたいな、だけで、匂いの白も要らないみたいで、その、みたいが、みたいと同じに同じに、あぁやっと、匂いの白の外へ。」ただ痩せてる姿が、そんな姿じゃない、って言うか、姿とも違うんで同じなんだとは、分かったかな。何が分かったかだけは分からずに分かって。「いや、それだけは分かってないのさ、お前には。そしてそう思うんだよ、お前は。だって、匂いの白の外だもの。」アハハハ、幾らでも笑えるさ、だって声は嘘しか言えないって自らバラしてるもの、だって声は、いや、って言える筈ないものね、声が嘘なら、それって何？なんて尋ねちゃいけないかどうか知りたくもないけど、知れちゃうなら、さぞかし匂いの白の外だろうね、そんな外なんて知らなくて構わなくて外で、なら内かも。ここで、クルクル繰り返して、に戻るんだね、すっかり丸くに似せた玉は、喉の逆さに押さえる力でか、逆さの坂へ、逆さに直されて、産まれた儘の自らの姿を、これって産まれた儘の自らの姿じゃない、って、それだけは分かってて揺るがず、その揺るぎなさはなさの儘に見失われ、自らの姿を産まれた儘じゃないにする裂け目は裂け目じゃなく、いや、ここは、裂け目がどうとかなんて遥か先まで引き延ばされ

て、ぴたり匂いの白の振りをするところかな。だって、うっかり声に成って嘘しか言えなくなって仕舞いそうで、が、もう嘘かも知れないなら、まだ内へ距たっては嘘じゃなく、でももう声かは知れない、だって、匂いの白の振りって何だっけ？って尋ねようもないなら、産まれた儘の自らの姿を、これって産まれた儘の自らの姿じゃない、って、逆さに直され直し続けるしかなさそうで、そんな事してたら丸くなって、自らの姿は自らの姿じゃない、だけが、玉そっくりに似せてるならそれは玉かって、問えて、（二〇二〇年十一月五日）

（額は白いなら…）

　額は白いなら硬くて、その触り方にも依るけど尖ってるのは首から下が黒いせいに違いないって覚えは有る、触り方は何時も丸っこくて。それとも首から下は泥濘む軽い土にでも土よりもっと軽そうにぬくぬくと埋まってたかな、そんな匂いをツンとさせてるだけで。なら光りを蓄えたかに黒いのは、ええっと、って額より尖ってそうに重い目を、まだ知られてないもっと重い距たりに放って距たりを見付けるように落とすと、濡れて汚れて伸びる足なら、血をまだ通

わせてる肉の柔らかさを踏み付けたそうに確かに骨と筋だけみたいに幾らでも硬くなりたそうにやっぱり黒くて、それって傷が癒えて歩けるようになったのなら歩いてて、ペタペタ。何時治ったんだろ、いや傷は癒えて瘡蓋の痕も消えてても何も治ってないかも、だってペタペタなんて歩く内に入らないよな、引き摺ってさえないもの。なので回り道を行くしか無いのに道でも無いなら回るだけの回るも儘ならずペタペタ、行くならそっちしかないそっちをそっちとも無しにのそっちに見るしかなくなって仕舞ってるだけで。その、はい待ってましたって一つしか無く一つさえ無さそうなそっちで、汚れようにも汚れようのない黒い嘴をぶつけ合ってるみたいに騒がしいなら声はぴたり等しく距たって睨み合う五つで、さぞ心も尖りたげに有ろうなら五つそれぞれに殻を被るみたいに硬く色付き、それでどれもうっかり明る過ぎたらしい色を混ざらないって分かって混ぜ合わすようにぼやけて見通しが利かず喧しいなら、こっちは先ず足を数えなきゃね、それも後ろへ滑りながらに前へ進める軽く薄っぺらな足としてだけ使える足を。泥濘に踏ん張るだけの使えない足なんて時に埋もれるかに数知れず、色付きもせず腐ってポトポト落ちて何の匂いも立てずに、初めっからずっと白かったみたいに汚げに白くに、傷だらけだけが美しげな足の形に固まった儘、狭く淀んだ汚げでさえなく汚くて白い底無しかの水の底とか。いや、五つが違うんだ、なので喧しく聞こえるだけで四つなら嘴なんて引っ繰り

返して裏向けて喉の奥まで呑み込み掛けて静かなもんだろうよ、その静けさからはみ出て痛そうな白く硬い額みたいに一つ、一つの他に何の望みも奪われたみたいな、へ向かってるのか、それとも傷を癒やした足を棘棘した音でも立てそうに生やすのは、こうしてる間にももう、その一つ、なのか五つの内の、それともうっかり外の、なら五つの内の一つ、はその影の、軽軽と。でもね、抑も足なんて傷を負える筈ないのさ、光りの届かない剥き出しの奥にぬるぬる隠されてて、生えてるのか切り取られて萎えてるのかも怪しく。傷を負うのは何時だって足より上の酷く狭い、あぁぁ翼が有るなら翼だろうけど、黒でも白でも無いならきっと燃えるように輝いて火よりずっと熱い灰色なら冷たい、でも足よりもっと使えなくて腐りもせずに浜から射す酷く鋭い光りにとっては、きっと目障りで、それを恐れて震えて自ら捥げて水の底へも流れ着けず、だって泳げないから、浜へ下る脹らんでは窪むなだらかにも険しい坂の何処かで身を捻って傾いて滞る風の底とか。いや良いよ、捥げて行き着く先が風の底なんてゾクゾクしないかな、間違いなく翼で、思いも寄らない何にだって使えるさ使うまでも無くたって、濡らさず拾い上げさえ出来たならね。で風も、坂の窪みを思う様滞るだけねっとり滞って溢れて後戻り出来ずに流れ出し、浜へゆっくり下りる風の川になれば、その川を遡って風の源へだって泳ぎ着けようかって思えば、川を真似るみたいにひょろひょろと蛇みたいでも誇らかに鰓ピクピク

の魚で。そんなの知らないよ好きにしたら、って、その泳いでるようで少しも進めてない姿を見切ると、五つの内か外の一つ、は、坂の窪みでゆったり渦を巻く風の底の渦の始まる小さな穴のような色へ、風が僅かずつ吸い取られてるのに今にも吸い込まれそうで、それを直ぐにも逃れようと、五つの内か外の一つ、では無くなろうとして、兎も角、姿を、数えられない形に変えなければ、と思い詰めれば、そんな形って翼しか無かろうに、だって、翼って、翼の中がまた、形は翼じゃないけど翼で、って、それを確かめたくて、翼の中の翼を覗き込んだのが拙かったんだ、風なんてすっかり浜へ流れ下って、坂の窪みの底は干涸びたようにあちこち罅割れて草の色まで滲ませ、でも、罅割れてない処も有るよ、って見ると、そこだけ引っ張り上げられたみたいにつーんと真っ白く硬く尖ってて、そんななら何でやっと見付かるんだろ、それって今更に窪みの底どころか坂よりも先にそこに有ったに違いなく、だって坂の窪みの底と比べて、その尖る事で拡がるような狭まるような形って、大きいか小さいかさっぱり計れないから。それとも坂の窪みの底が計れないかな。だって、その尖った先って、空を向く窓を一つぽつりと開けてて、空に何も無いから窓だつて何にも無しに。そんなでは、空の大きささえ計れなくて。あぁぁ、そこへ風が僅かずつ吸い取られる事から始まったんだ、って何が？翼が？って事にしとこうか、だって翼でだけは無いから、窓が空を向いて一つ切りなら何の翼が要る

もんか、だって窓を映すように空が窓だもの間違えたように、逃れようも無く一つ切りの。その翼の翼でだけは無い、も一つ切りなら、一つ切りなんて何でも無くて有り触れた幾つにともなく数は殖やせそうで殖やすと、殖え増す程に一つ切りにズルズルと滑り落ち、それが坂で。いや違う、そんな坂じゃ浜まで辿り着けないよ、って、翼の翼でだけは無い、は、一つ切りも数を殖やすも振り切って、風みたいに捻って傾げた一つ身をその窓へ放り棄てられないかと、ええっと何をしてるんだっけ、その白く硬く尖った周りを、その尖った先へ辿り着こうとグルグル回っては登り掛けながらも遠ざかってるばかりで、そんな下からでは窓は覗けも出来ないなら、尖った先に窓が開いてるって、それを見下ろす空にとっての他に何の事かな。尖った先なら必ず窓が開いてるしかないって事？空と係わりなくそれ一つ切りに。で、そう遣って周りを回って遠ざかってるばかりな内に、その白く硬く尖ってる先しか無くなって、なので坂も浜も翼の翼でだけは無い一つ身も、その白く硬く尖ってる上っ面の中にどっちを向いても逃れようもないなら広広と眠たげに何時果てるもなさそうにじんわり溶け込んでて、それを見下すように窓だけが溶ける筈も無く、だって窓だからね白く硬くを尖らせる、空の下をすっかりザラザラにする程に一つ切りにぬるりと煌めき、きらりと角角しく残って、そこを覗き込んでそこへ身を放り棄てようなんてのは、翼の翼でだけは無いを溶かして骨と筋だけ残したひょろひょ

ろと細身の一つ身しかなさそうで、その影なんて、窓にぴったりか、酷くぴったりでないかの。だって元はと言えばの元って窓かも知れないけど、その一つ身が窓を探しては来てたんだよずっと、なのでそんな事をするのは一つ身だけさ。って、誰が言うんだっけ、ならきっと、覗いた窓の奥に底無しかに覗ける、その白く硬く尖った先の内側の真下に真っ暗に見渡せる円い底に、そのぴたり真ん中に放り棄てられた傾いても真上に口を開けるのを已めない細く透けた撓る骨で編み掛けの籠の底の、川を真似るみたいにひょろひょろと蛇みたいでも誇らかに鰓ピクピクの魚の匂いに違いなく、いや違うんだよね、って、その魚の匂いが誰より先に言い直すなら、匂いから魚の匂いが消えて匂いだけになって、それが籠を編んでいる骨に染み通るのかな、籠は骨が自らと同じ色をした空の事を酷く嫌そうに呟くかに僅かに煌めき、それに応えるように、籠の周りを転げ転げするように途切れずに絡んで円く取り囲んでる木の枝枝が仄かな明るみを脹ませて浮き立てば、それらの直ぐにも燃やされたそうな乾き果てたような姿に、籠はその編み掛けも眠そうに心に懸けながらに、きっちり恐れ慄いて見せなくちゃいけないようで。あぁその籠を誰かが降りて行って救い出さなくちゃいけない救われるのはその誰かだけのように、なので救いなんて誰からも遠回りされるだけで、それが出来るのは、この一つ身しか無いよな、って、喧しい中へ自らを棄てて来た足跡を暗い淵の底の見付からない底に探すみたいに

振り返ると、そんな一つ身は見当たらなくて、翼の翼でだけは無い、だけが、その無い、でも無くなった姿は直ぐにも燃やされたそうならきっと、独り拾い忘れられて風に弄ばれるように彷徨ってた、崖っぷちから目を切ろうとする木の枝そっくりに違いなく、落ちて行くのを酷く恐れてる。って思えば、って誰が？なら、崖っぷちみたいに真下の真っ暗な底に僅かに輝く籠を見下ろす木の枝そっくりの目なら目に今さっき蓄えられたばかりの光りの動きが為す術なさそうに重く延びて逆さの枝を生やしたかの影がで、それは木の枝の形そっくりに籠そっくりの僅かな輝きを帯び、でもそんなの知らぬげに黙り込むように落ちて行き、窓からその底まではずっと、その木の枝の姿をした輝きに脹らむ布にですっかり覆われたようで。でも輝きが覆ってるのは輝きだけなんだって、底が真っ暗では直ぐに窓からも底からも見透かされ、その木の枝の姿をした輝きは見窄らしく傾いて窓から煙のようにずり落ち、目なら目の光りも曇れば更に凋んでふらふらと、籠の周りを円く取り囲んでいる木の枝に搦め捕られそうで、それだけは避けようと籠を編んでいる骨の匂いを振り落とすように身に付けながら、目なら目はまだ空の明るさを集めて光ってる筈の窓を高くに見上げると、窓は今にも空より高くへ飛びたいかに塞がれそうで、それに独り拾い忘れられたちっぽけな木の枝が枯れたくても枯れられずに挟まって、何とか歪な星のような形にはその上に拡がる空を覗けても、その空も、ただ怯えてれば落

ちずに済みそうかに青白く震えてるようで。いや空なら必ず赤黒いよね、赤黒い？って見直すと、翼の翼でだけは無いでも無くなったまるでちっぽけな何の姿にも成れない姿が、そこをふらふら飛ぶような落ちるような、でも必ず星の形の窓まで辿り着くだろうって分かる、うっかり舞い上がった湿った塵みたいな動きで、それなのに落ちて来ずに居て、何故だろうって、って考えれば、それを考えてる一つ身がそれを凝っと見上げてるからかな、の、一つ身って何？って聞耳が遠いんだよ、えっ？何？だからその何？が聞き取れないんだよ、いや、って聞き取れないとは聞き取れてるよね、だって何？って尋ねられてるとは分かってるもの。いや、何が分かってたって知れてるのさ、だって遠いんだから、耳が。って言われてずっと遠くを見ると、あぁ確かに、そのずっと遠くに耳を見付けたよ耳かな、歪んだ砂粒を耳っぽい向きに二つ並べたみたいな、如何にもこれ見よがしに汚げに白いかに色んな色を塗りたくり損ねたような。いや違う、ずんっと遠くなんて何処にも無いんだ、だってどっちを向いても何処も少しも霞んだりしてなくて、何処までもくっきり見通せるならその何処までは何処も無さげに透けて消えて、耳は砂粒程に小さいだけで、きちんと直ぐ籠の側で、じゃ耳が遠いって騙そうとしたんだね、その小ささで。って、その小ささを見てるのが、見付けたぞ！お前だ、きっと、川を真似るみたいにひょろひょろと蛇みたいでも誇らかに鰓ピクピクの魚の振りして、違いない、だって必ず違うから。

違うの？耳が遠いんだよ、えっ？何？だからその何？が聞き取れないんだよ、なんて言ってないよ。で、真上に口を開けてる細く透けた撓る骨で編み掛けの籠の姿だけが酷く黙り込んでて、それは、円く取り囲んでる木の枝に火が着けられるのを待ってるみたいで。何の為に？えっ？何の為になんて事、何処にも無いよ、だって、真っ暗に見渡せる底なんて真っ暗に見渡せたら何の為も有りようも無く。だよね、なんて言ってないよ。耳が遠いからね、その小ささで。それって、騙そうとしてようと騙そうとしてる、って小ささだろ、良いよ、その小ささを拾って遣るよ、それでお前の顔が立つんならな。アハハすっかり騙されてるね、騙されてるって分かって却って。いや、お前は少しも笑ってなんかないぞ、「えっ、笑ってないって？何の為に？笑おうと笑うまいと、何処の何だって、必ず何かなら何の為かでないものなんて無いよね。何かで無いなら必ず何かで無い為で、何かで無い為って必ず何かで、なんて言ってないよ何も。為にの何も無く。」見付けたぞ！それが、鰓ピクピクのひょろひょろと蛇みたいな魚の振りの言い分なんだ、だって必ず違うから。その違うのって、魚は、喰うのか喰われるのか、それとも浜から海へ放たれるのか、どれも違うような、坂で虐められるのか、虐められる振りで浜から上がって潮の匂いをプンプンさせて風とだけ係わっていたい坂を虐めてるのか。だって虐めるも虐められるも身の置き処も無いように痛みの痛くなさに呻いてその呻きの震えに聞き

入って消え入りそうなら同じで、そんなのに厭きたら呻く群れに交じる独りの振りで、「そうだ、良いぞ、なら歌えよ。」歌うならお前だろ、だって必ず違うから。それともその違うのが違うの？って尋ねて仕舞うのが何をしてるかなら分かるよ、砂粒程に小さな耳を、ええっと、放り込みたいんだよ耳の為に開けられたややこしく歪んで柔らかくて、もうそれだけで煩そうな淡い闇の欠片を入り組ませて鏤めたような、翼でも生やしたら様になるかなとか、産毛の輝きにでも自惚れてそうな穴に。いや違う、耳に穴なんて開いてたら何も聞けない、石を潰して捏ねたみたいに塞がってるから耳なんだ。なら耳の事じゃ無い、ひょろひょろと鰓ピクピクなんて。とかそんな事を何時かお前は歌おうとしてただけだろ、その歌い損ないの声の匂いが粘粘と柔らかい塵を擦り付けたようにお前の有りもしない魚の振りの姿に染み着いて。でももう、その匂いは裸に剥かれるみたいに吹き払われてて、糸屑とも見紛う細く短い寒そうに萎れた蛇の身を直ぐにも籠の中へ隠したいだろうけれど、籠が黙り込む儘じゃ、その周りを這い回ろうにも這い回れず、砂粒程の耳の二つ揃うその僅かな隙間で蜷局を巻いて蜷局ごとまた巻いてずんぐりと、三つ目の砂粒にでも、うっかり間違えたかに姿を変えたそう。も叶わず、だって、お前の二つの瞳を爛爛と輝かせて木の枝が燃え始めて籠とお前を円く囲んでるからで、逃げ道を塞がれたお前は鰓ピクピクの魚とは違う歌を、いや歌とは違う、そうだな例えば鱗の奥から脂

でも滲ませ垂らして、乾かした尻を硬く唸るように脹らませ、足を溶かされた蜥蜴の匂いでもさせて、闇を真似た色で闇の直ぐ手前で溶けて切り抜けるしか無さそうとか。だって木の枝の燃えるのは、逃がしたくても逃げようのない蛇の身を焼きたいからに決まってようから。だって、蛇の姿さえ、この真っ暗に見渡せる底から消せたら、窓に挟まって枯れたくても枯れられずに居る木の枝は、窓に溶けるようにそこを擦り抜け、そしたら木の枝の姿を棄てて長く垂れる糸みたいな蛇の姿で。いや違う、それよりずっと早くに、空をふらふら飛ぶように落ちるようだった、翼の翼でだけは無いでも無くなったまるでちっぽけな何の姿にも成れない姿が、次次に窓までボトボトと落ちて、熱い灰色なら冷たく盛られて窓はすっかり火でも噴きそうに塞がれ、放り棄てられた星の形は糸のような光りを引いて流れ落ち、真っ暗に見渡せる底の籠の口まで届いて砕ければ、その底はもう真っ暗には見渡せず、あちこち火にも劣る色があちこち輝いたり燻んだりして酷く見通しが悪くなって、それに紛れてられるのを幸いと蛇は糸屑とも見紛う姿まで振り捨てるかに、籠を編んでいる細く透けた撓る骨を凸凹と這い上り、もう籠の口から籠の底へ自らを溶かすように落とし込んでないか。「ないよ。何をすっかり見ないのかな。分かってるくせに分かってないなら。真っ暗に見渡せる底は、真っ暗でも見渡せるも底でも無く、窓が尖らせてる上っ面は白く硬くの拡がりを嫌でも透けて仕舞う、浜から射す酷く鋭

い光りにずっと照らされる儘のせいで、色は全て灰色の少し手前まで褪せて何の姿も形を消され、細く曲がる枝先をややこしく縮らせ絡ませて丸まって見える木の枝の逆さの影が、浜から射す光りの溜まった中を揺れてるだけで。いや瞳だけは輝かせてるかな、でも酷くぼやけて。それって、浜から射す光りが白く硬くを透け、鋭い儘に汚げなのを耐え難いからで瞳だとしたらな、でもそれ、きっと瞳じゃ無いんだ、なら浜から射す光りの溜まって光りだけで固まり掛ける中に開けられた針で刺したような傷かもな一つ切りの。傷を負うのは何時だってそんな光りの上っ面だろ一つ切りに。肉とか血とか一つより多い傷口なんて空の暗さが捹えた紛い物とか。いや紛い物なら傷だって似たようなものどころか傷こそ真っ先に怪しくて、なら輝いてるのはやっぱり瞳で、輝くからそれは瞳なんだ、の輝きなんて疾っくに木の枝の逆さの影に掻き消されて、でもそのせいでその逆さの影こそズタズタに骨まで裂かれたような傷を負うかで、もう木の枝の面影もなく薄くて透けてる布を丸めたみたいな儘、弱弱しくゆるゆる降りて濡れてるみたいに隙なく籠の口を塞ぐようなら、掻き消された筈の瞳が二つ、籠の底で息苦しそうに行ったり来たりしてないか。でも輝くどころか、浜から射す光りに、他の何もかもは照らされる中を、その瞳だけが針で刺したように小さくても真っ暗で、籠を編んでいる細く透けた撓る骨は、その暗さを囲む耐え難さからか見る間に砕けて粉になり、浜からの光りに照り映えな

がら瞳に被さり瞳を覆って埋め、でも籠は、それで編み掛けだった形を脱ぎ捨てるように編まれる前から籠だったような整った形を得て、生木の匂いを振り撒きたげに、その勢いで今にも浮き上がりたそうなら浮き上がってて、でも底が抜けてるのか、真っ暗な瞳とそれを埋めてる粉粉の骨は置き去りに晒され、それへ籠の口を塞いでた布を丸めたみたいな木の枝の面影もないその影が、ふわりと拡がって被さってて行くならそれらに息も出来ずに顔を覆われてその下で仰向けに横たわってるのが蛇とは似ても似つかない岩の塊みたいな魚に違いない、だって違うから。でも、その違ってて間違いない魚なんて、さっさとそこを擦り抜け、浮き上がる籠を追ってないかな。で、何が残るかって、頭、そりゃね。うっかり魚は頭を残して泳いで行ったでもなさそうなら、何の頭？って、何だか分からず、浜から射す光りさえ怖がってそこを避け、押し広げられたみたいな形の光りの裂け目は底無しにも見えるなら、覗き込んでるのは、その底無しを抜ければ他の誰にも見付けられない逃げ道かもな、って、糸屑とも見紛われない姿の蛇で、だからってそこへ滑り落ちて行くのではなく、押し広げられたみたいな形の光りの裂け目を、身を裂くように開けた、何とも見紛われない口で一呑みにしてて、で、蛇の姿は、糸屑か糸屑でもないだったのが、裂け目を押し広げたみたいな形に成るのかなって探しても見付からなくて、剥き出しの頭だけが、浜から射す光りに覆われ、いや、と言うより頭はそんな光

りを従え、そうさ、だからその光りってもう、浜からの光りじゃ無く、その頭から血の匂いを噴くように輝き出される光りで、でも却ってそれでまた光りは、もっと、何だか分からない頭を怖がるようで、でもその頭から輝き出てるんじゃどうにも為らず。きっとその光りの恐れが仰向けだった頭を起こせば、その唇は力なく垂れて口は餌に飛び掛かる魚のように大きく開き、いや違う、大きく開くのは薄く開いた唇の奥に覗く喉なんだ、喉？そんなの切り取られてそうだけど、って見ると、確かにその奥は切り取られたかで何も無く、その奥で闇を円く取り囲んでる木の枝が燃えてて、その闇に目を凝らし、あぁ闇なんてそれ限りだ、それを囲む火の外なんて何処も火にも劣る色の明るみばかり、って分かってやっと、その閉ざされた闇の中に、それよりもっと真っ暗な瞳が二つ、火の色さえ火にも劣る色なら尚更恐れるように、産まれる前から産まれてたみたいな己の姿を探して震えてるみたいで、って、誰がそれを覗き込んでるか、って、こっちにその瞳の闇が煌めくかに向けられると、それは尖って真っ直ぐ真後ろの奥まで刺さるようで、だって必ず違うから。って、何が？いやそれも違う、何が？程違うものも無いかに。だって、産まれる前から産まれてたみたいな己の姿って、すっかりこっちに切り揃えられた薄身の影を並べて、何処までも狭そうに。って何処を見てるの？って何が？にまた戻るなら確かに戻ってて、だって必ず違うから。でもう、火に劣る色しかないその色が己を恐れて

色褪せ、瞳の闇とまるで違う、底抜けの闇を隅隅まで剥き出して遠い限り遠い光りを真似に真似て煌めこうとする色は、火の穢れを曝け出して已まないように止まった風より静かに、真っ暗な瞳の切り取られた奥の、裏返せば空さえ見上げられそうな円く窪んだ拡がりの中を、艶っぽい玉を二つ寄り添わせたような形で僅かに揺れるか震えるかしてて。いやそれって揺れるとも震えるとも違うよな、って、そのそれが言うなら、だって他に居ないから、だって違うから、でそれは、揺れるも震えるも無くすけど、艶っぽいだけは、火の穢れの匂って来そうな、空でも空の下でも何処かの何かの底でもない、切り取られた喉の奥に火を知らない色を全て解き放って真っ直ぐに続き過ぎる、真横を向き過ぎてるもう一つの窓かへ逃がそうとしてて。の、そんな窓なんて無いのかな、だって違わないから。で、艶っぽいは、その窓の真横を向き過ぎを少しだけ直せば、それに微笑むように消えて初めから開いてなかったみたいに窓も消え。確かに消えたにしても、でも真っ直ぐに続き過ぎるは開いた切りだよね、「え、何の事？何の事にしろ、お前が火の穢れとか小賢しい事を言い出したせいだろ、な事を言うしか無くなるのは。なんて言ってないよ。」何をか言ってるなんて言ってないよ、そこだけはきっと同じ事を言ってるかな、でもそのせいで、それは開いた切りなんだ、真っ直ぐに続き過ぎて。「で、それがどうしたの？って、それが言うとでも。」そうだ、見付けたぞ！いや聞き取ったぞ！その、言うと

でものそれを。そのそれが、真っ直ぐに続き過ぎて開いた切りで、なので切り取られた喉の奥を、いや違う、喉に出来るのは呑み込むだけだろうから、切り取られたのは、その言うとでものそれで、その奥に、すっかり起こされた頭が、火に劣る色の行き着く先みたいな美しげに真っ白過ぎて汚いとさえ見たくないその顔の色に目鼻立ちを全て溶かされ、魚みたいな口が大きく開けば顔ごとその口で、なら喉の奥を覗けそうな筈が、編まれる前から籠だったような整った形の透けた籠が喉に閊えてるかで、改めて首が刎ね直されて欲しいけど、って、言うとでものそれが望むなら、独りでかにさっさと首は飛び、でもその首を刎ねたかも知れない生木の匂いをプンプンさせた空の奥なんて無いその無い奥の暗さしか映さない刀を、言うとでものそれが隠れてこっそりへし折ろうとしてれば、その姿は刀ごとすっかり隠れて仕舞って。首はそれを見下ろしてるに違いない。の、それが、首は何処かな、って探せば見付かるのは、首じゃなくて産まれる前から産まれてたみたいな己の姿だけど、それが首を探しに行こうとすれば、それは刎ねられた首に違いなく、だって違うから。って、何から違うの？は、その首の斬り口から逃げるように這って出る、口を開けて牙を剥く火の穢れに塗れたような色の蛇か、さあね、って蛇とも決め兼ねてると、色ばかりは蛇な、形は木の枝に似せたそれに違いなく。でも、そんなでそれはそれを見付けられたかって怪しいもんで、だって火の穢れが全く足りてないのは分か

りって、でも火なんて見た事も無いよ、って思えてならないのは、産まれる前から産まれてたみたいな己の姿が、見えない儘に、それとはまるで違うともの姿のようで。いや構わないんだ、って、それがそれに言い聞かせるようとして、し損なって、その隙に首の斬り口から這って出ようとして出られない蛇は、木の枝に似せた形を繋ぎ合わせれば、木の枝の形などかなぐり捨てて数を殖やし、首は、怒りに任せて這い回ろうとするその蛇の束ねられた群れに振り回され。で、何をし損なってるかもどうでも良くなったそれは、見失われて却って己の姿に収まったなら、ゆったりした手付きで首の斬り口を裂くように拡げて首筋から頭の皮を裏返し蛇の群れを放とうとするけど、斬り口から解き放たれ掛けた蛇はそれぞれに向きを変え、斬り口に潜り込もうと足を溶かされた蜥蜴みたいに身を丸く縮め、その頭ばかり隠して野太い尻尾は隠さない蛇共の、もうすっかり蜥蜴かも知れないその膚の分厚そうに乾いて行く焦ってのろのろした姿に、笑いを噛み殺し。だってここで笑ったら、それの負けじゃないか、その笑いを餌に蛇共は遣りたい限りを尽くすだろう、って、何処で？なら枝を繋らせるだけ繋らせ、それらへ蛇を数知れず絡ませる、真っ直ぐ空を向きたがらないくねくねした大きな木に違いない、だって違うから、って、その木を探すと如何にも見付かりそうな処に真っ先に見付かり、いやもっとそれらしい木もその後ろに次次に生えてそうだけど、って蛇なら言いそうなら、そんな木木は、

火に劣る色の行き着く先みたいに美しげに真っ白な拡がりに溶かされ、だって何処までだってそこは、その顔の膚だけが延びてるみたいで。アハハハハ、でも蛇共は何処？木なんて何処にも生えてないよな。だって木は火の穢れで脅さなくちゃ育たないから。そんな火の穢れなんて要らない、って、それは、笑いを収め、その火の穢れに穢れ切った大きな木の振りをしてる己の姿から目を逸らそうとして逸らし切れずに諦めれば、その諦めた先に、大きいも小さいも知れない籠にすっぽり収まりそうかに円い形の熱い灰色に煌めいて眩しい浜が広広とした中に狭そうに見えてて。いや少しも見えてなくて、でも眩し過ぎるからじゃなく、何の面影もない影が、自らをひょっとして波の影なのか、みたいに波打ってるだけで、浜の姿はその影の眩しさに溶けてそうで、そうか、浜からら射す光りって、そっちから来てたんだ、でもそこまで目が届くなんて、「って、真っ暗な瞳の切り取られた奥の裏返しが言うとでも。って、それが言うとでも。なんて言うのかななんて言ってないよなのかな。」ふん、そんなの火の穢れの拵えた穢れの擦れ合っての声に違いなく、そうだ、見付けたぞ！いや聞き取ったぞ！その、言うとでものそれを粗方見失ったのを。聞き取れてないって聞き取れたんだ。だって違うから、いや違う、違わない。あぁぁその違わないそれなんて有り得るのか。の、それって何？いや、だから何？が違うって、さっき知れた筈だけど。違うの？知らない。の、知らないって言えるなら必ず

何かを、いや何かと違うを聞き取れてるに違いなく、だってそれで違わないから。あぁぁだからその違わないそれなんて有り得る…っ、いや、同じ事なんて言える筈ないし、言っちゃいけないし、言ってないよ、ならどう言ったの？って誰が？なら、編まれる前から籠だったような整った形の透けた籠が閊えてる喉を震わせられる、そんなの誰でもない、ならその誰でもなさの美しげに真っ白過ぎて汚いとさえ見たくない顔しか浮かばないなら、その誰かでだけは無く、なので編まれる前から籠だったような整った形の透けた籠なんかを喉に閊えさせてる、そうだ、その、そこに居る。…。えっと何故黙るんだろうか、なんて尋ねちゃいけなくて黙り返さなくちゃな、いや同じ黙るを黙れる筈ないし、黙っちゃいけないし、黙ってないよ、ならどう黙らずにどう言ったの、それとも言い掛け言い掛け口籠もる声を摩り合わせてるの？って誰が？いやこれも同じ事になってるなら、なる筈なくて、なら、その同じとは違うを聞き取れてるに違いなく、だってそれで違わないから。って何と？って尋ねられるのは、真っ暗な瞳の切り取られた奥の裏返ししかないさ、だって違うから。で、その違いまで辿り着いて仕舞うのは、その違いを聞き取ってる耳のせいで、そんな耳なら、蜷局を巻いて蜷局ごとまた巻いてる蛇なんかと並んでられる筈もない、なので砂粒だったにしても砂粒とは遥かに距たった耳に違いなく、いや違う、耳の姿なんて蜷局の影よりどうでも構わなくて、ただその違いを聞けて仕舞えば、

それが耳で。なので聞こえられるならその何でもを聞いてるのがその耳で。いや違う、耳が耳だなんて耳の姿よりどうでも構わなくて、ただ聞こえられるそれがそれで、なのでそれを聞こえられて。で、真っ先に聞こえられて仕舞いそうなのが、火の穢れの拵えた穢れの擦れ合っての声かも知れないなら耳を塞ぐべき、のそんな耳なんて影も有る筈ないなら、「足を溶かされた蜥蜴、それも、坂や浜や翼の翼でだけは無い一つ身に混じって、白く硬く尖ってる上っ面の中にかのように、痛いまでにその足の無さを晒して、そいつだけは、溶けずに初めから細く撓る骨の匂いの息をしてそこに溶け込む振りをしてた奴だぞ、飛びつ切りの古株かもな、その蜥蜴に帰れよ舐め回すように、帰りようも無いならそこしか帰れる処は無くてしゃぶり尽くすように舌も唇も磨り減らし磨り潰すかに。そうしてその首が遠い限り遠い光りの向こうで刎ねられ真横過ぎる処を通って遠いなんてどうせ直ぐ側だろって戻って来ようなら、首の斬り口は、遠い限り遠い光りにさえ映えない白い血なら搾り取れそうかとも僅かにも滴らせないと匂わせて、その姿の奥へ噴き上がらせてるかも知れない、必ず赤黒く？隠されてる振りの蜥蜴の首はどんなかな？それと間近に向き合うよりもざわざわとべったり歓べて眠くなる事も無いなら、他に何だって出来過ぎるみたいに必ずそうするしか他に無く。仮に耳を塞ぐべきなら、その必ずなので必ずに向かって塞ぐべきで。お前はその首に纏わり付くしかない必ずなんだよ、

違うなら違うって言ってみな、さも一つ身かに。その一つ身の違うなんて、必ずの違うより、遠い限り遠い光りを幾らでも呼び寄せて喰って数を殖やしてる蛇共より違うぞ、だって違わないから。なので蛇なら何だって穢れようもなく偽りの嘘なんだ眠りを誘うしかしない、何でも喰っちまう。その喰われた形なら見せて遣るよ、ほら、蜥蜴の閉じた口の奥の切り取られた喉の奥に独りでのんびり生えてる、枝を繁らせるだけ繁らせて枯れたそうに活き活きと鋭い刃を数知れず煌めかせるみたいに青ざめてる大きな木が、尻窄みに根も生やさずに、だって土の一塊は疎か水の一溜まりだって見た事も無いから、そんな偽りの嘘に穢れようもなく嬉しそうに回されて、何の面影もない影の自らをひょっとして波の影かみたいに波打ってるに冷たく沈められるように引っ繰り返されて根のない根元だけが一息吐くように傾けた頭を出し、その初めつるりとしてた厚い皮が、自らをひょっとして波の影かみたいに波打ってるの光りに時を掛けてボロボロに破かれて捲れれば、産まれる前から産まれてたみたいに真新しげに顔を出すのは、そんなの知った事かって顔付きの産まれる前から刎ねられてたに違いないかの膚ばかりは幼げな蜥蜴の首で、聞こえられるそれがそれでそれを聞こえられるの硬い匂いの上に据えられ、喰うのを拒む為に叫んでるみたいに口を裂けそうな程にさもそっと撫で回されたげに柔らかく開け、空から空の外へ濁り水の溢れ出すのに目を瞠りたげに凝っと空へだけ剥き出された二つの

瞳は、却って空の外で暗い泡を吹いて澄んで重く縮んで行きそうな濁りは真っ青な薄い色に透ける濁り水から、憎憎しげに見詰め返されてるみたいで。その剥き出しの瞳を覗いたら、さぞその奥を切り取られたみたいに真っ暗だろうなって横様に覗き込むのは、更に高い奥に空の見える忘れられてぽつんと浮かぶように独り切りの窓からの、火に劣る色しかないその色が己を恐れて色褪せ煌めく抜け目なさそうに硬い目なら一つ目なら、それは、その真下の針で開けたような鏡の底に、己の針の先より尖ってそうな光りと濃い青空に薄い雲の溶けそうに柔らかい闇でも見付けて安らいたそうに覗き込んで、その鏡に映る己の姿に射られたかに煌めきを奪われ、その目なら一つ目の真っ暗から溢れ出す火に劣る色しかない己を恐れて色褪せる色が、それらを見下ろす窓から空までをその色に染め、高い窓は、浮かんでられないなら窓を已めても浮かぼうと、その姿を空より大きな鏡に変えられるなら変えようかと消え。でもそんなのは、凝っと空へだけ剥き出された蜥蜴の瞳の中を移ろう幾つかの光りの崩れては裸に剥かれるかに繋がり合っては知らない形を産んでは殺して行く色の、石かに硬く固まる姿の移り行きで。だって、それはそう耳に聞こえて来るから、の耳なら、この首の蜥蜴に産まれる前から生えてたんだから嘘だろ、なんて言えずに、って誰が誰に言えずになのかなんて決まり切ってて分からず仕舞いに、その誰が誰にの嘘に決まってる耳は、疾っくに蛇共に喰われて耳は穴だけの穴も

喰われれば喰われる程に小さくなって、喰った蛇共は全てそこへ閉じ込められ短い糸屑の色濃く縮れて行くような姿を絡み合わせ、その一塊ごと、穴が小さくなり過ぎて小さくさえない処へ鏡張りの雫の内側へ籠もらされる勢いで裏返るみたいなのに乗っかって、脹れようとして弾けて消えようか。何故そんな消え方から決まってる。火に劣る色しかないその色が己を恐れて色褪せ、瞳の闇とまるで違う、底抜けの闇を隅隅まで剥き出して遠い限り遠い光りを真似に真似て煌めこうとする色が、小さくなり過ぎて小さくさえない処へ裏返ろうとする耳の再び甦らないまでに掻き消したい為で、そしたら火の穢れの拵えた穢れの擦れ合っての声も聞かずに済むかって、いや却って、耳に聞こえる声なんて高が知れてて、耳が無くなれば何の穢れも穢れてる全ての声が聞こえに聞こえ、そんな聞こえに聞こえる声なんて高が知れてて、それと違う声が届くかなって。いや違う。声に届くも届かないも無く、声が声なら声に届いてる、そんな声だけがその初めからより前から声だったみたいに聞こえられるそれがそれでそれを聞こえられて、だからそのそれを叫びたいんだ、って、刎ねられた蜥蜴の首の口は、何もそれに触れられそうにないどころか、その口の形を形と描こうとするだけでその形ごと裂けそうな程に硬く開いて。でも何がそれに触れようとしたりその形を描こうとするだろう、って、目なら一つ目の真っ暗から溢れ出す火に劣る色しかない己を恐れて色褪せる色の煌めきしか無さそうだけ

ど、それすらもう、凝っと空へだけ剥き出された蜥蜴の瞳の中を移ろう幾つかの光りの崩れては裸に剥かれるかに繋がり合っては知らない形を産んでは殺して行く色の、石かに硬く固まる姿の移り行きに紛れてるなら、全くその通りに、その火に劣る己を恐れる煌めきの、形を産んでは殺して行く光りの色の移り行きへの紛れなんだよ、って、何が？だからその、何が？が、蜥蜴の口に触れようとしたりその形を描こうとしてるんだよ。だって違うから。いや違う、違わないんだ。だってそんなの、目なら一つ目の真っ暗が許す筈なく、蜥蜴の首の口の叫びたいそれって、その目なら一つ目の真っ暗か、それともその真っ暗へ向かってそれを叫びたいのか、の、それって何？って、それがそれに尋ねたとしてみろよ。って、何に向かって言ってるか、って、いや言えてるのか、蜥蜴の瞳の中で、知らない形を産んでは殺して行く色の、石かに硬く固まる姿しか無くて。ふん騙されないぞ、騙そうとして騙されようとしてるんだからきっと相打ちで、そんな姿なんて今更蜥蜴の瞳の中の何処に有るもんか。その二つの瞳こそ、空へなんて剥き出されてなくて、口なんかよりずっと、ただそのそれを叫んでそうな形ですっかりその一つ限りな色で。あ、ぇっと、一つ限りな色？って、どう色を数えたのかな。そんな数えられる筈なくて数えられたかに色の色が何処だろうと何処やらにほんの僅かでも仄めこうなら、何の形も、果てもなさそうな白の拡がりに溶けて浜へ打ち上げられ、そうか、それであの浜から

鋭い光りが射すと見えたかな、いやまた騙そうとして騙されようとしてるなら、その叫びたいそれを叫んでそうな形って、その騙し騙されるの浜の形が絡み込んでるに違いない。だって違うか違わないか、知れないから。かも知れないけど、そのそれを叫んでそうな形は紛れもなく蜥蜴の二つの瞳を輝かせ、いやそのそれを叫んでそうな形の輝きがそっくりその二つの瞳で、その中を移ろっていた、幾つかの光りの崩れては裸に剥かれるかに繋がり合っては知らない形を産んでは殺して行く色の、石かに硬く固まる姿の移り行きは、その輝きに溶けて外へと薄く散って延び拡がる程にまた薄くに脹れてその輝き自らを隙なく閉ざすように映し出され、蜥蜴の頭を真ん中に丸く大きく固まって取り囲めば、その幾つかの光りの崩れては裸に剥かれるかに繋がり合っては知らない形を産んでは殺して行く色が、蜥蜴の頭の膚に彫られるように濃く映り、膚の奥まで食い込んで血に混じって更に色濃さを増し、いや違う、いやそうかも知れないけど、膚に映った色が頭の骨にまで届いて灰かに輝くに違いない、その骨の色からの照り返しで膚は、美しげに真っ白過ぎて汚いとさえ見たくない色に染まって行けば、幾つかの光りの崩れては裸に剥かれるかに繋がり合っては知らない形を産んでは殺して行く色と混じり合うしかないだろうけれど、どう遺って？いや混じるとも溶けるとも弾き合うとも違う事をしてないか、って、そこへ割り込もうとするのは、そこは初めからずっと円い形の熱い灰色に煌めいて眩し

い浜だったようにその浜で、でも割り込み損なえば、円い形は明るいと暗いに真横に離れて割れ、いや割れるとは違う事をしてないか拡げられるみたいだぞ、って自らを疑えば疑う程に、取り繕いようもなく愈愈真横に割れて明るいと暗いは、どっちも浜とは似ても似つかない割れた円み過ぎて割れた円みでさえない姿で離れ離れで、の姿って、どんな姿？って、二つの瞳のそのそれを叫んでそうな形の輝きが、その姿に届こうとして、離れ過ぎた明るいと暗いの間を彷徨っているようで。いや違う、だって違わないから、の何が違わないかって、形を産んでは殺して行く光りの色の移り行きへ紛れてた火に劣る己を恐れる煌めきが、二つの瞳の一つに繋がるそのそれを叫んでそうな形の輝きの奥で、そのそれの叫びとは違う静かな声を洩らしてるその穢れに違いなくて、だって違うから。穢れなんて違いなくて違ってるに違いないさ、だって、その、に違いないさ、を辿れば火だからな、って、火を、火なんてどっちか知れる筈もなく振り返ったんだろう、その火に劣る己を恐れる煌めきが。そのそれを叫んでそうな形の輝きの奥の蜥蜴の頭の中のその真ん中で。あぁぁ頭のその真ん中でだけは拙い、だって頭に真ん中なんて有り得ないから、って、そいつの声なんてその声からずれるしかないに違いない誰が言うんだっけ、誰でもなさの美しげに真っ白過ぎて汚いとさえ見たくない顔しか浮かばないなら、その誰かに決まってて、だって必ず違うから。あぁぁ必ず、なんてだけは言っちゃいけなかっ

たんだけど言っちゃったなら、何もかもがすっかり変わって変わる前と一つも変わらずに、が、何の姿かならさっさと言い当てようよ、それが、必ず、なんだ。違うも違うも違うもなく、だって必ず違うから。アハハハハのアハハハハも必ずに。その必ずでもなさの美しげに真っ白過ぎて汚いとさえ見たくない必ずだけが、形は形に似せ色は色に似せ、でも匂いだけは匂いの儘に贋物で、その必ず贋なのが必ずで。そうさ、それで匂いに戻れたんだ、って騙される前から騙されてたなら騙し直されて騙されてるのを分かって騙され直され損なって必ずに、その必ずが、匂いを何処からも有り得なくさせてるんだ、数えられ過ぎるばかりに。あぁぁそうして匂いは数限りなく有り過ぎて何処にも有り得ないんだ、って、その儘の姿を見てなくちゃいけないみたいで、って何処に？そうさ、見付けたぞ！その何処に？こそ必ずの姿なんだ、いや姿とは違う有り得ない匂いそのもの、だって必ず違うから。いや違う、違うに必ずなんて有り得ない、だってそう匂うから、その、その匂いだけが、美しげに真っ白過ぎて匂いに匂って匂い果て、そう有るしかなくて有り得ないなんて無くさせて、だって必ずとは違うに、違うから。で、必ずと美しげに真っ白過ぎが残って、って、何処に？なんて何処にも見付かる筈なく、美しげに真っ白過ぎを侵したいかに、必ずは必ずを必ずなんて無いかにの無いかにな程に激しく振り翳して円い形の熱い灰色に眩しく煌めけば、美しげに真っ白過ぎは、傷だらけだけが美しげな

足の形を探しに行く振りで必ずの円い形を取り込み、その必ずの真ん中に足の形を美しげに象るけど、その色が真っ白過ぎと熱い灰色との間で砕けに砕け、朧に足の形を明るませ、火に劣る己を恐れる煌めきを呼び寄せたいかで。それってまるで匂いだよ、それだけが匂いみたいに、って、声なんだ。声なら、聞こえられるそれがそれでそれを聞こえられる声しかなくとしかないなら、そのそれを叫んでそうな形が火の穢れを求めるんでなかったら何？ハ、何でもないに決まってる、だって必ず違うから。その違う必ずがもう火の穢れを掴んでて、いやそうなのか？ってのも、声なんだ。声なら、聞こえられるそれがそれでそれを聞こえられる声で、そのそれを叫んでそうな形が火の穢れを求めるんでなかったら何？いやそんなの繰り返せる筈も無いなら、頭に真ん中なんて有り得ない処で死んだ振りでもしてれば息をしてられる、形は木の枝に似せた色ばかりは蛇で。だって違うから。だって違うから、なら、それはその形は木の枝に似せた色ばかりは蛇でだけは無くて必ずに。アハハ、じゃ必ずが、その、形は木の枝に似せた色ばかりは蛇でだけは無くを象ってるんだな、って誰が笑いを噛み殺すかなら、もう繰り返せない聞こえられるそれがそれでそれを聞こえられる声に替わって、ここぞと嬉しげに盛んを装いたげな火の穢れに違いないかな。だってそんなの、美しげに真っ白過ぎが必ず許さないから。で、頭に真ん中なんて有り得ない処で、聞こえられるそれがそれでそれを聞こえられる声を

守るのが、その美しげに真っ白過ぎでしか無くなれば、それはその儘に熱い灰色にも眩しく煌めこうとして、さっさと燃え尽きてないか。ないよ、いや、あるよ、の、その必ずが、必ずにその声を奪い取り、或いはそっくりに真似て、頭に真ん中なんて有り得ない処を囲んで蜷局を巻くようで。蜷局？いやぁ惚れ惚れするよ、そんな嘘の必ずに嘘でなさのプンプン匂わせるに、数えられそうかの匂いに。火の穢れならそれを数えられそうだよ、火の穢れって、きっと、火が、その匂いを数えて穢れになったんだ、って、嘘の必ずに嘘でなさに、火の穢れの搾えた穢れの擦れ合っての声が、全てを変えそうに何も変えなければ全ては変わらずに変わって、って、そんな全てなんて有り得ないを凝っと見詰めてるのが、息をしてる振りでもしてれば死んでられる傷だらけだけが美しげな足の形から射す、鈍くに白過ぎる光りなら、いや違う、だって違うから。その違う美しげな足の形の鈍くに白過ぎる光りが傷を負うんだ、他に傷を負えるなんて無くて。有るよ、いや、無いよ、の、その必ずが、傷なんだ、傷なんて何処にも無い形をして、なので傷なんて何処にも無く、それで足は足から足で無くなれて、火の穢れより穢れてるみたいに光ったりせずに、他の何処にも見付からなくに嬉しげに。あぁぁその他の何処にも見付からなくな嬉しげに程、傷の形に象れそうなものなんて無いね柔らかそうで硬くも出来そうに、って、誰が思うんだけじゃなく、もうそうしようとしてるんだっけ、必ずに。なら必

ずでだけは無くて。有るよ、いや、無いよ、の、その必ずが、つて、息をして
る振りでもしてれば死んでられる傷だらけだけが美しげなだけが、その必ずに
纏わり付くかに自らを裸に剥いて、裸に剥かれたそれが、有るよ、いや、無い
よ、の、その必ずを、裸に剥き返そうとすれば、どっちが、より裸を知らなくに
裸かって、いや違う、どっちが裸かなんて無くて、だって、そのそれとも違う
から。の、それって、えっ、どれ？なんて尋ねちゃいけなかったんだ、だって
尋ねてないから、の、どれ？が、頭に真ん中になんて有り得ない処を、そんな処
も有り得ない処まで先廻りして、どれ？を裸にしたがって却って、自らを裸を
知らなくに裸に剥いて傷だらけでも美しげでも無くなった傷だらけだけが美し
げなを、裸でだけは無くし、その無くしてに、どれ？が、その息の根を止めよ
うかと薄く淡く覆い被さって、鈍くに白過ぎる光りになって延べ拡がって行く
なら、それを巻き返すかに、形は木の枝に似せた色ばかりは蛇でだけは無くが、
その姿を、針で刺したような鏡の底の、掩げた翼の匂いを棘棘と黒光りさせて
そうに微かに走る艶に変え、そう己の姿を変えられなかった、頭に真ん中なん
て有り得ない処も有り得ない処で一続きの円い艶になって、聞こえられるそれ
がそれでそれを聞こえられるに覆い被さり、聞こえられるそれがそれでそれを
聞こえられるを、円みである限りの円みを押し詰めて円みを全て殺したそうな
姿に変え損なって、円みである限りの円みが、それ一つ切りに数を、手始めに

その一つ切りから殺したかに裸になって、と言うか、それだけがそれだけで裸
であるかに、と言うか、その裸を知り尽くしたげに裸そのもので、鏡の底を微
かに走る艶へ襲い掛かれば、艶は走るのを已めたかに、きっと時を止め、いや
違う、時が時の外を止め、時だけが圧し潰されそうに進んで、いや違う、時は
止まりも進みもしなくて時で、の時が、その艶で、如何にも血塗れの好きそう
な傷一つ汚れも染みもない受け皿みたいに。だって必ず違うから。だって必ず
違うから、って何？って、何が尋ねられるかなら知ってる。だって知らないか
ら。あぁきっとそいつが、時を殺したんだ、いや違う、時に殺されたんだ、で
も殺されるなんて時しか無いね、の無いね、が、その圧し潰されそうに艶に違
いなくて。なら、そんなの艶じゃないって自ら裏返れば、自らがさらりと自ら
の受け皿になりたげに、なれる筈なくて、だって受け皿って何、濃いだけ濃い
血ばかりか、それよりゴツゴツ尖って歪な何だって水みたいに染み通らせてし
まうのだけが楽しそうな、何時だってつるりとした。アハハハハ、って、その
筈なくて、を笑えるのは、時しか無く、の時が殺された、って、ならそれ、捥
げた翼でしか無さげに、その匂いなんて吹き飛ばし、なので翼は捥げてなんて
無く、そうか、繋がったぞ！翼がその中の翼の中のその外と。なら外しか無い
か、って内から内を眺め返して内が延び拡がって閉ざされるみたいに、再び何
処へも開かれずに、必ずに。あぁぁその必ずが翼と繋がるんだ、その美しげな

だけが、一つ切りのその一つ切りを切り落とされて失われた一つ切りに、それでは剥いても剥いても裸に掠りもしないなら、真下の鏡の底に真っ逆様に噛み付いて、その底を走る艶を呑み込むしかないけど、呑み込めたかな。え、呑み込めたかな？そんなつるりと尖った言い草を何処で覚えたのかな、おませちゃん。だって傷だから、美しげなら必ずに。そんなの頭に真ん中なんて有り得ない程に嘘をぶん回してて、の、真ん中なんて直ぐに嘘みたいなら嘘じゃなく必ず見付かるよね、だって頭なんて初めから無かったみたいに何処にでも見付かり尽きないみたいに無いんだから、翼だけで。ふん、そっちがぶん回してるだろ、翼なんて疾っくに遠い限り遠い光りでも無くなった微かな艶に溶けてなくちゃ翼でも居られないかな、必ずに。ならその必ずにが翼かな、って、そんな匂いをさせてる嘘こそ疾っくに嘘の匂いに溶け、間違った蛇の色みたいに形は木の枝に似せたいなら、いや違う、何が違うかって？木の枝だけは違うんだ、だって違わないから。その違わなさしか木の枝なんて無いって、やっと分かったかな、それを分かれば済んじゃいけない事が全て済んだみたいに何も済まされてないのが、何時の間に弾け飛んだのかバラバラに浮いて漂ってる艶のふやけた欠片を取り込もうかって襲い掛かって来て、その全くの違わなさに。なのでそんなの、何が襲い掛かろうと、その違わなさの餌みたいに呑み込めたかな。え、そんなつるりと尖った言い草を何処で覚えたのかな、いや繰り返しちゃい

けないんだけど繰り返しちゃうしかないなら、間違った蛇の色みたいは、その必ずに、が翼かなって嘘の匂いを振り捨てて、蛇の色みたいが蛇の色みたいを呑み込めば、呑み込み呑み込みを繰り返し、繰り返しちゃいけないのに、そのいけなさがいけなさを磨けば鏡の底と違う、ならきっと底の無い鏡で。あぁぁそんな鏡だもの、何でも喰っちまおうね、眠りを誘うしかなく穢れようもなく偽りの嘘の何が偽りか知らぬげに。そこでなら、のそこはそこじゃないかも知れなくに、必ずは必ず翼と繋がり繋がり繋がり尽くし、繋がるなんて、裸を知らない影も擦り切れてる処まで擦り切れて、鏡の無い底にまで落ちて届こうなら、だって無い底になんて落ちられないから、ってのが偽りの嘘なら、偽りは、円みである限りの円みの姿を晒し、その裸を知り尽くしたげに裸そのもので、円みである限りの円みの姿は、疾っくにもう嘘も偽りも嘘の偽りも脱ぎ捨て、鋭い刃を数知れず煌めかせてる姿を隠し溶かして含んでるみたいで、その燻みが、バラバラに浮いて漂ってる艶のふやけた欠片を一睨みすれば、艶は一繋がりに頽れ、数知れない筈の煌めきの数を見透かし、あぁぁ数なんて偽りの嘘なんだ必ずに、でも脱ぎ捨てた嘘の偽りを今更取り戻せる筈もないなら、必ずは、数に引き裂かれて傷だらけの傷だけの姿で、裸の痛みに必ずでは居られなくなって。そりゃ必ずにじゃなく、って、匂わせて。アハハハ、そんなら処に匂いを滑り込ませようって、の、匂いって何？って、何がその匂いへ吸い取られて

戻れないんだっけ。知らない。だってそんなのもう戻れないから。だよね、って言えるのは、その滑り込ませようとした奴だけど、奴なんて有り得ないって奴が奴の後ろを一つ切りに貫かれる憎しみだけを弾みかとに振り返れば、殺された姿の時は疾っくに枯れた木の枝で、その震えちゃいけないのに、だって殺されてるから、震えは、初めっからずっと白かったみたいに汚げに白いのを一時一時刻みで自ら恐れ直さなくちゃいけないみたいで、あぁぁ汚げな白だけからは身を逸らしたいんだ、って、傷だけの姿の裸の痛みは、必ずにじゃなくの匂いを痛みを走って滞る痛みみたいに匂い直そうと、円みである限りの円みの姿に自らを擦り込ませ、え、自らって、そんなつるりと凹んだ言い草を何時覚えたのかな、の何時の時なんて、殺された姿から振り落とされて破れて飛び散るしかないなら身構えなくちゃ！おませちゃん、なんて言わないよ、言えないから。だって、何も言えない振りしか出来なくて言えないい言えないって言い触らし損なうしかないからね、姿な限りに円みである限りの円みは、そんなものなんだから、そんなものなんだとも知らなくに、必ずでは居られずに。そんなそんなものに、傷だけの姿の裸の痛みは、傷だけのと姿のと裸のと痛みとにばらけて、そしたらそれは姿でも無くなって、鏡の無い底に並べそうで並べなさそうに、並ぶ振りで互いに互いをずらそうとしたいかに歌声を揃えるみたいに揃えば、傾き滑るように映って。嘘だね、偽りなしの、なのでそこから偽りが

偽りなしの偽りに染み出て止まらない、なので嘘なんて疾っくに裸に剥かれて裸もないなら空っぽな。いや違う、空っぽこそ偽りなんだ、いや違うも違わなくも、そんなの時も時で無くも、無くの時からもう何でも無くって、きっとそうに掠めるように嘘われながらに定められてて、それがその儘で姿でしかなく、の痛みが裸かどうか、痛みか裸を無い底から身を逸らして鏡を擦り抜けるみたいに確かめようとすれば、しただろ？ほら、ぺろぺろ舐められる傷をもう舐め尽くして痛みでも無くなって、姿と裸とが睨み合って蜷局を巻くようなら、間違った蛇の色みたいだけは、そこに見付からなくて、って事は、その他は何でも見付かって、いや違う違う、あぁぁこれだけが違うんだ、他の違いなんて違いの外へ放り出されて全て同じな違いな程に。この間違った蛇の色みたいだけは見付からなくて、と、何でも見付かるの、これだけが違うその違いが、円みである限りの円みを円ませ、その円ませが、これだけが違うの外へ。外へ？それって内みたいだけど、内はみたいだけど外はみたいみたいじゃなく、ならみたいじゃなくて外なのか、って、誰が尋ね、いや違う、尋ねないんだ、だって違うから、必ずさえ無しに。なら必ず、姿な限りの外に違いなく。その外の必ずに円ませは放たれて行こうかな、円ませだけは知らなくに。なので何も何処へも行かずに、ただ放たれるなら、その放たれはその放たれへ放たれるだけで、必ずかに、なので必ずに、でだけは無くへ放たれ、いや違う、だって違う

から、放たれる何が有るかって、円ませは何も円ませられずに、円みである限
りの円みの円み円みって繰り返すしか無く、なので円みが違うんだけど！って
言えたのか、言って良いのか、の良いのかなんて悪いと直ぐに取り替えられ損
なって、どっちも円みである限りの円みに呑まれるしかないかな。え、呑まれ
るしかないかなって、そんな呑まれるしかない言い草を何処で覚えたのかな、
なので、おませになれないちゃん、って言えたのか、そりゃ言えるよね言える
限り、だって、おませになれないんだから、その。いや違う、その、そのが違
って、その、そのの違いが、おませになれるもなれないも知らないに違いない
なら、その、そのの違いが、それまでの何を知らないも知らないみたいに、円
みである限りの円みを呑み込み返して来ようかな。そうに違いなくて、その、
そのがその。いや違うが違うんだ、見付けたぞ！・そのいや違うが違うんだ、を。
その色のないみたいな匂いみたいな嘘の偽り丸出しの光りを捕まえるんだ、っ
て、こっちが捕まえられてないか、ないよ、いや、あるよ、アハハ、そうさ、
その笑いを笑えよ、必ず笑い返したりせずに、きっちり笑えるしかない向きへ。
出来るかな？拙かったんだ、笑わない内に、笑い返されるばかりで、円みで
ある限りの円みは、いきなりに数を殖やすだけ殖やして殖やし足らな過ぎてブ
ルブルとふやけて、蛇そっくりに、嫌嫌、嫌でも、そう見せ掛けられてるみ
たいに。その姿ならそれをふやかした水の匂うそっちへ逃げて行こう。逃げて

行こうとしてるみたいに。水の匂うそっちなら、必ずに、嘘の偽り丸出しの光りだよね、って、誰が誰とかも無く、必ず、そう言うしかなくて、あぁぁそう言っちゃったよ、もうおませなんて、すっかり水の匂うそっちの向こうで、その向こうになら、いや違うが違うんだ、なんて幾らでも見付かって見付かり過ぎて見失われ拗れ、その拗れこそは見失いたくても見失われず、そのまた向こうを水に呑まれるかに呑み込みたそうなら呑み込めなくて、呑み込めないのを拒みたくてこっちへ薄っぺらく脹れ、だってそれは円い形をこっちへ尖らせて窄んで来て、でも尖る先だけは消えようもなしに初めから無くて、何故って、きっと尖る先って拗れの穴の裏返った影で、その影の裏返りが、その影の裏の輝きで自らを照り返せば、影の裏返った色を分厚く塗られて凍ってるみたいな艶の一つ限りの片耳の形を、無い尖る先の窪んでるみたいな底だけの鏡に真下に落とし込み、底だけの鏡じゃ何の形も匂いかにまるで扱えずに、でもそれを一つ限りより前から静か過ぎて静かでもなく分かってたに違いない片耳の形は、底だけの鏡の形に拗れる程ぴたりと収まって水に呑まれるように嬉しそうで。あぁぁ嬉しそうって、何て埃臭くにさえ詰まらなそうで薄っぺら過ぎて薄っぺらくさえ無いんだ、それはきっと裏返したいんだけど裏返せないんだよ、それでただのっぺりした叫びみたいに嬉しそうで、流れ去る水みたいに固まってるしかなく、凍ってるみたいなんかよりずっと弾け過ぎて弾けようもなく冷たそ

うに、燃える砂粒の青くさえなく燃え尽きても残る火みたいに柔らかそうに、円みを舐めて閉ざすようにぬるりと膚を晒すみたいに幼げに、でも産まれる前から産まれてたみたいにでだけは無く、産まれる後からだって産まれる産まれるって産まれ続けるしかなくに産まれてなくて、そうしてれば必ず、聞こえられるそれがそれでそれを聞こえられる声を聞けるだろうって高を括って、で何も聞こえないなら却って何が聞こえたって聞こえるもんかって何だってぶった切ってやるぞ、でもそっと、って、安らってられそうで、それでまた冷たくて薄っぺら過ぎて薄っぺらくもなく、なんて知らず。その冷たさって、きっと見たいんだよ、必ず見付かる、その冷たさだけに見て取れる光りの煌めきの艶の眩しさの止まった風に溶けて穢れさえ穢れようもない火みたいにどっちも向いてない、なので裸に違いない、その形を。底だけの鏡に落とし込まれたって少しも変わらない形の儘に、鏡なんて水を光りに溶かすみたいに溶かして仕舞う。そんな溶けて水の匂いを探してそうな鏡の、水より水っぽいとも知られない姿なら、小さくなり過ぎて小さくさえなくなって裏返りも出来ないなら、その自らの姿の内へ自らを吸い取るように籠もって、暗くなり過ぎて暗くさえない瞳みたいに二つに揃って、いや違う、いや、そのいや違うが違うんだ、なんて誰も言わないよ、って瞬けば、聞こえるよ。だって片耳がそれを凝っと見てるものね、片耳の形なんて溶かして。その瞳が見詰める筈の、暗くなり過ぎて暗く

さえない水の匂いの流れて消えてるのを。消えても消えても、また消えてなくちゃいけない、だって産まれる後からだって産まれてないんだから、必ずに、必ずにじゃなく。の、必ずって何だっけ、なんて誰も言わないよ、って、瞳がまた瞬かなくちゃいけない時には必ず瞬くみたいに瞬けば、産まれない前からさえ瞬いてなくて、だって瞳を覆ってるのが、必ず色も形も色も形で、なので色も形も無い翼で、の翼って何だっけ、なんて翼にしか尋ねも答えも出来なくて、それで翼は直ぐに初めから消えてた処まで消え、消えても消えても翼で、なので翼の形だけはしてないなら、何だってその色の無さで覆って隠せるんだろうけれど、それで却って、隠しようのない裸を知らない影が、浜を知らない波が高まるみたいに、消えても消えても翼をすっかり覆い、円い形を探すなら直ぐに見付かって、だって円くにしか探せないから、その見付かったのが、影の知らない裸なら、その裸の艶だけは、形を無くして尖ってる片耳の先のない底まで届きそうで、もうそれは艶艶と寝息を擦り殺すみたいな音を煌めかせて。あぁぁ、そのそれのそれの匂いしかしなさげに何て幼げな、聞こえられるそれがそれでそれを聞こえられる声を、（二〇二〇年十二月二十八日）

断片　二〇二〇

著者　u_

© 2020 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published